紫式部の巻

上東門院―一條天皇の皇后彰子

こせうしやう―上東門院の女房小少將

あまの戸の―新勅撰には「いかなる浦に」とあり

槇の戸の―同集に「槇の戸も」とあり

一條の院の御時上東門院の官女に紫式部といふ賢女あり。その姿妙にして楊柳の風に靡き、翡翠のかんざし、蟬の羽の透きとほりたるが如し、亂れてかゝる鬢のはづれより顏の匂ひ薄雲に月のすきたるが如し。唇は芙蓉の如し、胸は玉に似たり。姿は園生の中の花の夕映、咲きこぼれたる梅櫻の如し。心ばへ幽玄尋常にして世の常の人にすぐれたり。管絃の道暗からず、和歌達者にして衆につらなり、既に歌仙にのれり。こゝにこせうしやう夕月夜をかしかりける程に、水雞の鳴き侍りければ、紫式部が許へよみてつかはしける。

あまの戸の月の通路さゝねどもいかなる方に叩く水雞ぞ

とあれば、やがて紫式部、

槇の戸のさゝでやすらふ月影に何をあかずと叩く水雞ぞ

大悲―観音をいふ

さうせちる―藏せちる又は奏せちるか

となんよみてやりける。此人石山の観音を信じて、折々参詣せられけり。あるとき賀茂の齋の宮より上東門院へめづらかなる物語や侍る、見給ひたきよし御所望ありけり。彼の齋の宮と申すは村上天皇十の宮選子内親王にておはします。賀茂の齋院は御門御代のはじめ殊に代らせ給ふ事なれども、この齋院は圓融院の御時天祿二年に齋の宮に備はり給ひて、既に御門三代に及びしかども、齋はあひかはり給はず、是によつて大齋院とは申すなり。上東門院、紫式部を御前に召して、うつほ、竹取などのふるめかしき物語は、定めて目馴れ給ふべければ、新しく作りて奉れと仰せければ、式部仰せに從ひ奉りて、まづ石山寺にまうでつゝ、夜もすがら大悲の御名を唱へて、此事をぞ祈りける。をりしも八月十五夜の事なるに、月の影湖水にうつりて、心の澄み渡るまゝに、物語の風情心に浮みければ、まづ須磨明石の兩卷を書きそめしが、そのおもむきを忘れぬさきにとて、佛前にありける大般若の料紙を本尊に申しうけて、ひるがへして書きとめけり。この故に罪障懺悔のために、大般若一部六百卷を自筆にかきて佛前に納め奉る、今に當寺の寶藏に納めおき侍るとぞ。次第に書き加へて五十四帖の草子となし、光源氏の物語と名付け、則ち大齋院へまゐらせ給ふ。齋院なのめならず悅びさうせらる。およそ物語の最上

せぞくゆふゐん―せぞくは世俗、ゆふゐんは優艷又は幽遠か

ためあきら―爲顯

有無の二偏云々―有無二偏の差別觀を脫却したるものを中道といふこの中道即ち宇宙人生の實相なり

貴賤男女のもてあそび、天下の至寶とぞなりにける。さて此物語は天台の六十卷といふ書を學んで、五十四帖に卷を分ち、筆法は史記といふ書をかたどれり。日本紀を考へ書きつゞけたる故に、紫式部が異名を日本紀の御局とぞ申しける。總じて卷々にせぞくゆふゐんの詞多しといへども、皆これ敷島大和言葉なり。歌は詞すくなうして心深く、多くの義理を含めり、則ちこれ眞言の陀羅尼をうつしたり、大日の三十一品を表して三十一字の詠とす。滅罪生善の德あり、このゆゑに神明佛陀歌には感應をなし給へり。又紫式部は越前の守ためあきらの娘、一條の院の御めのと子なり。敷島の道にすぐれたるのみにもあらず、佛道にもおもむきて天台宗の許可をかうぶるといへり。さてこそ此物語にもまづ好色の事どもを書きあらはすといへども、人を仁義の道に引入れ、又は菩提心を勸めて、終には中道實相の妙理を悟らしめて、出世の善根を成就すべしとの方便なり。

さる程に卷のはじめに箒木、卷の終に夢の浮橋と立てたること、有無の二偏を離れて、中道實相の理をあらはしたる物なり。そのゆゑ又諸法は無きかと思へばしかも有り、又有るかと思へば無きものなり。有るにもあらず、無きにもあらず、有無の二法を離れて

實相の道に入るべき故に、箒木といふ卷の名を始めにおけり、其證歌に云く、

園原やふせやに生ふる箒木のありとは見えて逢はぬ君かな

信濃の國園原といふ所あり、その所に箒木といふ物あり、遠くより見れば、箒を立てたるやうに見ゆるを、近くへよりて見れば、それに似たる木もなし。かるが故に有りと見れども無きものに、譬へ侍るなり。又夢の浮橋といふこと、是もありてなきものの譬なり。經に云、生死涅槃猶如昨夢と。又莊子といふ書に云、莊周が夢中に胡蝶となつて百年の間花にたはぶれ遊ぶと見たる由を書けり。此心を歌に、

百年は花に宿りてすぐしにきあはれ胡蝶の夢にぞありける

百年は云々―堀河百首、大江匡房の歌

此物語にかきあらはす所の人々、有爲轉變のことわりを知らしめ、菩提の道に勸め入れんがために終に夢の浮橋ととどめたり。これ則ち觀音の式部が心に入り替りて作らせ給ふと思へば、有難かりし御事なり。又人皇八十代の御門高倉の院の御時に、安居院の法印澄憲といふ人ありけり。これは少納言通憲入道信西が末子、文才世にすぐれ、辯舌人に越えたり。承安四年の春の比、天下大きに旱して人民悲み歎きしかば、則ち禁中において最勝講を行はれ、雨乞の祕法修せられけり。第二日の導師はこの澄憲僧都にて侍りしが、說法いみじくせられし故に、龍神感應を垂れ雨夥しう降りて、大地をうるほしょかば、萬民飢饉のうれひをとどめて、安樂の思ひに住しけり。さてこそ其世の諺に、澄憲の說法には龍神感應を垂れ、廿露の雨を降らしけるとも申すなり。そのあした俊惠法師よみてつかはしける。

雲のうへに響くを聞けば君が名の雨とふりける音にぞありける

澄憲かへし、

あまてらす光の下にうれしくもありと我名のふりにけるかな

又一とせ白山妙理權現の神輿御とうさんありし時、山門の大衆蜂起して禁庭に嗷訴をいたすといへども、敢て御許容なかりけり。是によつて衆徒いきどほりをなして、八王子、客人、十禪師三社の神輿を飾り奉り、禁庭に振り奉るべしと詮議するよし聞えしかば、君も臣も大きに騷ぎ給ひて、敕使をもつてなだめ給ひしかども、衆徒敢て宣旨をも用ひ奉らずして、既に西坂本をくだりて、さがり松たどすの邊まで神幸をなし奉りぬ。さる間武士に仰せて是を防がせらる。大衆神人事ともせずして、軍勢の中へ御輿をかき入れ奉る程に、武士と大衆と互に矢先をそろへ挑み戰ふ程に、あるひは創を被り、あるひは矢

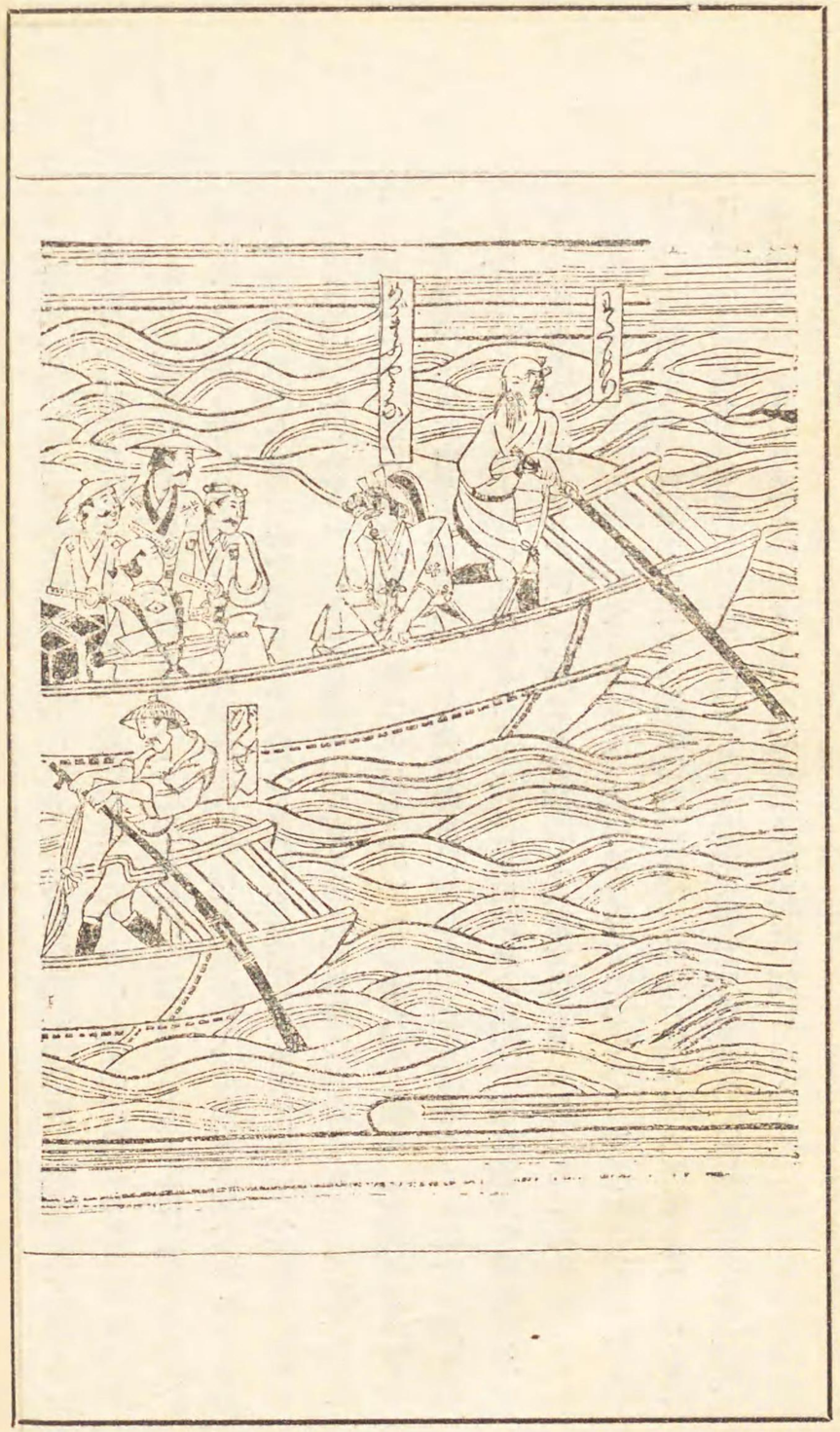
とうさん―登山

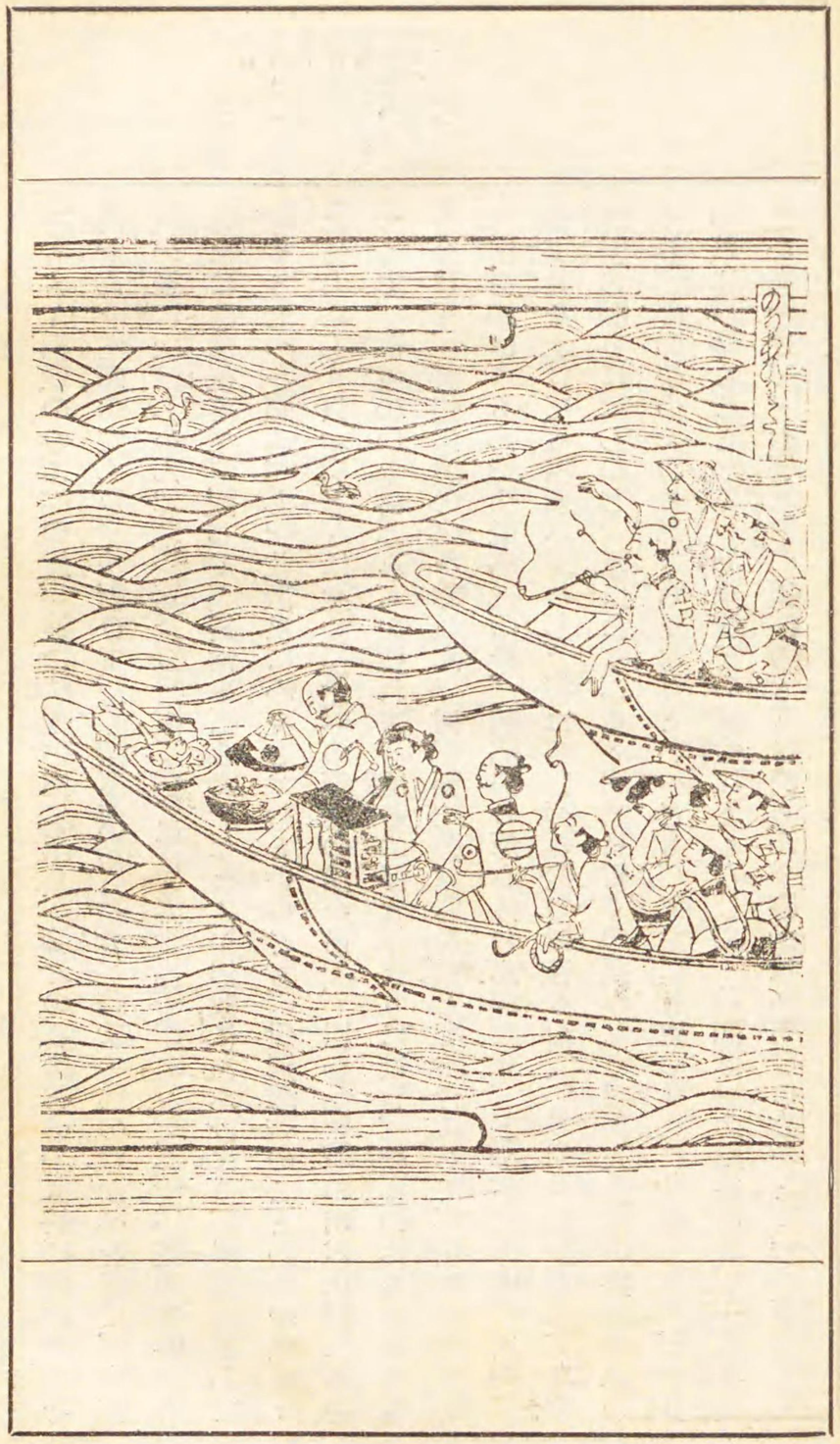
○平家物語の神輿振及び座主流の條を見よ

庭に打たれ、淺ましき事共なり。武士は多勢を入れかへ〳〵攻め戰へば、大衆遂に叶はずして、神輿をふりすて奉り、泣く〳〵本山へぞ歸りける。夜に入て三社の神輿をば祇園の社へ入れ奉り給ひけり。御門大きに逆鱗まし〳〵て、則ち其時の天台座主明雲大僧正を流罪の宣旨下されけり。大僧正はこんど御輿ふり奉りし事、衆徒のしわざなり、度々なだめ給ふといへども、用ひずしてかゝる大事に及べり、されば座主の御身には曇りなしといへども、敕命なれば力なくして、追立の官使に具せられて、本坊を泣く〳〵立出で て配所へ赴き給ふぞあはれなる。年比日比御身近う參りつかうまつりし人々あまた有りしかども、恐れをなして御供申す者もなかりしに、此澄憲僧都ばかりこそ御名殘を惜み奉り、國分寺といふ所まで送り奉り給ひけり。座主澄憲を御前に召されて、汝われに名殘を慕うて是まで來る志こそやさしけれ、その報恩に天台祕密の法文一心三觀の血脈を付屬すと宣ひて、授け給ふこそ有難けれ。此法は是諸佛己心の所生なれば、如來四十餘年祕密して是を說き給はず、たま〳〵一乘こうせんの時、一乘はむじやうの悟を開き、菩薩はそうしんのやくに預り給ふ。されば天台大師は大蘇山の法花三昧の道場にして、きやうたう修行せしときに、靈山の一會現じつゝ、多寶の塔中、釋尊よりこの法を

こうせん―屠宣
一乘はむじやう―未詳
そうしんのやく―堅進の益にて、成佛の因道を增進する利益の意か
きやうたう―行道なるべし
多寶の塔中―多寶塔の內にて

傳へ給ひ、又我朝の傳教大師もろこしに渡りて、台州臨海縣の龍興寺道邃和尙を師として仕へ給ひ、此法を傳受して歸朝し、我山を建立し、一心三觀の宗旨始め給ひけり。たやすからぬ祕法なりとぞ示し給ひける。この澄憲石山の觀音を信じて、常に參詣せられ、或時夜もすがら祈念せられけるに、觀音夢中に告げての給はく、そのかみ紫式部といひし女人當寺に參籠し、光源氏物語といふ草紙つくれり、其詞ゆふゐんにして心菩提を勸め、義理殊に深しといへども、いまだ供養をのべざる故に、善所に到ることなし、汝才智世にすぐれたり、速に供養をのべて彼の佛果を成ずべしとぞ示し給ふ。澄憲驚き夢さめて寺中の僧衆に此由を告げ給へば、各奇異の思ひをなし、さらばとく〳〵說法を始め供養を遂げ給へとありしかば、澄憲喜悅して、佛前に高座を構へ、既に源氏の供養を始め給ふ。此事四方に聞えしかば、京都より公卿殿上人官女以下の女房たちに至るまでさし集ひ給へば、道すがら馬車にせきあうて、人のゆききもたやすからず。其外大津、松本、志賀、唐崎、矢橋、草津の土民等、湖上に舟を浮べ、陸路に駒を早めて參り集ひける程に、石山寺の繁昌時を得たりと見えにけり。澄憲の說法は富婁那の辯舌に異ならざれば、信心微妙のことわり花を咲かせてのべ給ふ。その表白の詞に曰く、





あふひ―奚、逢ふ日
じやうせつ―刹淨（淨土）
四智圓妙―大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四智圓備して微妙なるをいふ

そも〳〵桐壺のゆふべの煙、速に法性の空に至り、箒木の夜の言の葉は終に覺樹の華を開かん。空蟬の空しき世を厭ひて、夕顔の露の命を觀じ、若紫の雲のむかへを得て、末摘花の臺に坐せしめん。紅葉の賀の秋のゆふべには落葉を望みて有爲を悲み、花の宴春のあしたには飛花落葉を觀じて、無常を悟らん。たま〳〵佛教にあふひなり、榊葉のさしてじやうせつを願ふべし。花散里に心をとどむといへども、愛別離苦のことわりを免るゝためしなし、只須らくは生死流浪の須磨の浦を出で、四智圓妙の明石の浦にみをつくし、關屋のゆきあふみぢを遁れて、般若の淨きみぎりに赴き、蓬生のふるき草むらを分けて、菩提の誠の道を尋ねん。何ぞ彌陀の尊容を寫して繪合にして、松風に業障の薄雲を拂はざらん。生老病死の身、朝顔の日影を待たん程なり、老少不定の境、乙女子が玉葛をかけても猶賴みがたし。谷たちいづる鶯の初音も何かめづらしからん、鳧雁鴛鴦の囀りにはしかじ。籬にたはぶるゝ胡蝶只暫くの樂みなり。天人聖衆の遊びを思ひやれ、澤の螢のくゆる思ひ常夏なりといへども、忽ちに智惠の篝火にひきかへて、野分の風に消ゆることなく、如來覺王の御幸にともなひて、慈悲忍辱の藤袴を著、上品蓮臺に心をかけて、七寶莊嚴の槇柱のもとに到らん。梅が枝の匂ひに心をとどむる事なくして、淨土の藤の裏葉をもてあそぶべし。彼の仙洞千年の給侍には若菜を摘みて世尊の供養せしかば、成佛得道の因となりき。夏衣たちゐにいかにしてか一枝の柏木をひろひて、妙法の薪となして、無始曠劫のつみ木を亡し、本有常住の風光を輝かして、聖衆音樂の横笛をきかん。うらめしきがなや、佛法の世に生れながら家を出で名をすつる砌には、鈴蟲の聲ふりすて難く、道に入り飾りをおろすところに、夕霧のむせび晴れ難し。悲しきかなや、人間に生れながら御法の道を知らずして苦海に沈み、幻の世を厭はずして世路を營まんこと。しかじ只薫大將の香を改めて青蓮の花ぶさに思ひを染め、匂ふ兵部卿のにほひを翻しては、香の煙のよそほひとなし、竹川の水をむすびては煩惱の身をすゝぎ、紅梅の色をかへしては愛著の心を失ふべし。待つ宵のふくるを歎きけん宇治の橋姫に至るまで、優婆塞が行ふ道をしるべにて、椎が本にとどまること勿れ。北邙の野邊の泡雪と消えんゆふべには解脫の總角を結び、東岱の山の早蕨の煙とのぼらん朝には、栴檀のかげに宿木とならん。司位を東屋のうちに遁れて、樂み榮えを浮舟に譬ふべし。是も蜻蛉の身なり、有るか無きかの手習にも往生極樂の文を書くべし。かれも夢の浮橋の世なり、朝な夕なに來迎引接を願ひわたるべし。南無西方極樂彌陀善逝、願はくば狂言綺

つみ木―罪と積みとにかく
善逝―佛十號の一つ、好去と譯す

六趣―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上

つまこ―妻子か

慈眼視―原本「慈眼現」とあり、今改む

語の誤をひるがへして、紫式部が六趣苦患を救ひ給へ。南無當來導師彌勒慈尊、必ず轉法輪の縁として、是をもてあそばん人を安養淨刹に迎へ給ふこと豈疑ひあらんや。されば光源氏の名目五十四帖に分てりといへども、大數の名は三十七卷なり、これ大日の三十七尊を表せり。その卷々に好色ゆふゑんのたはぶれ言を書き列ねたりといへども、又無上菩提の妙なる理を含めり。しかれば諸佛の御内證にも叶ひて佛果を成ぜしめんといへども、末代の衆生に千々の縁を結ばしめ、隨喜の功德をもつて、解脫の因となさしめんための方便にて、つまこの大會を行はしめ、諸人の參詣をすゝむる也。誠に有難き御利生にて、慈眼視衆生の御誓願たのもしき御事也。

明暦四年仲夏上旬

藤井五兵衛

伊香物語

伊香物語

かはる事―かはれる事にて普通ならぬ意か

くちやみぬる―朽ち終ぬる意か

いづれの御門のおほん時にや、近江の國伊香郡の司なる人に、いみじうゆたけき者ありけり。其妻かたち世に竝びなきのみならず、心やさしく情ありて、花紅葉に心をよせ、四季折々のながめに大和歌を口ずさみ、絲竹をもてあそび、手なんどをかしく書きて、績み縫ふ業までおろかならず、そのわたりの人思ひかけざるはなけれど、心正しく貞婦の道を守り、五つの德を修めて、いさゝかざれたる由もなければ、皆人類なき事に言ひわたりけり。其國の守かはる事に傳へ聞きて、いかにもして、此女を得まほしく思ひていはでの森のいはでやはと、眞間の繼橋ふみ通はぬ事もなければ、善きにもあしきにも重ねそめにしつまならで、又こと人にまみえず、手にだに觸れぬ玉章のくちやみぬる事となりぬ。このたびの國守もみぬめの浦の思ひ深く、波の立居に心をめぐらし、言にいでては叶ふべきやうにも有らざりければ、いかにもして此女を取りてんと、一つの謀を

物すべ―物のすべの意か
心うちなく―腹藏なく

ぞたくみける。まづ國守の御館にのたまはす事ありと、人をして召し寄せける。郡司の夫何事の仰せにやと、急ぎ參りければ、しかぐ〳〵の由申して奥に召し入れけるに、常に參るより事嚴かにいとをしくもあひしらはず、心も空なるに國守出合ひていふやう、此國の内に人多かれども、物すべ知りたらん人とは汝をこそと思ひ侍る、然れば何事につけても心うらなく昔今の事ども問ひ聞かんれうに呼びいでぬるとて、珍らかなる果物を初め、酒肴もてなして、いかめしければ、夫よろこびよゝと飲みつ、昔今の事心ゆくかぎり打語りて、國の内の面目身に餘りてなど醉ひ泣きしてめで惑ふ。かく打解けたる時國の守曰く、何事につけてもわが言ひいでん事承り屆けつべきやと。男の曰く、こは仰せとも覺えぬ事かな、時の御門の命をうけて此國にあるとしある事共を、心にまかせて計らひ給へとの事なり、しからば守のの給ふ事を否み申さば、御門の旨に忤ふことわりなれば、國法を背きていづれの所にか足をとゞめん、何事にても申させ給へといふ。然らば汝と我いみに爭ひせん、必ず我を憚らず計らふべし、汝勝ちたらば我國の所領以下を半分ちてしらしむべし、其上は心のまゝに計らへ、われ勝ちたらんにおいては善きも惡しきも知らね、汝が妻を我に得さすべしとて、文机にある沃懸地の硯とりよせ、何や

いみに―いみじきの衍か
知らね―この下に、どもなどいふ語落ちしにや

和歌の本　上の句
末―下の句

口かためて―契約しての意に用ふ

駟も舌に及ばず―論語顔淵篇にいづ

らん書き認めて上に封じて、梨地に松のむらだちて千鳥の騒ぐ方に捨小舟の蒔繪かきたる文筥に入れ、上にも封つけ印押してさし出し、是をいとも開くべからず、此内には和歌の本なん書きてあるぞ、此末を同じ心に詠み合はせよ、汝が家にもて歸り開かずして、これに添へ七日といふにもて參るべし、和歌の上下付合ひたらば、速に此國をわけてしらしむべし、都方の事は我にまかすべし、もし歌の心ことに樣あしくば、汝が妻をまるらすべしと言へば、夫ふとむね打騒ぎ、心の内にいかでわれ、神にもあらぬ身の草深き鄙の土に生ひたちて、早苗とり籾打つ歌ならでは言ひいでん言の葉もなし、たとひあらはに見聞くとも何程の事かいふべき、まして堅く封じて見せも聞かせもするにこそ、よしなき醉ひの上に心よく口かためて、年月馴れたる一日片時もえさらぬ中の蘆垣を、人のために押し隔つべきかはと思ひて、我ら賤しき心にて和歌の文字の數をだに知らず、何しに君に勝つ事あらんと、とかく言ひてすまひけれども、さればとよ、とくより言ひ定めしものを、上をかろしむるにやなど、むつかしげに言ひて、駟も舌に及ばず、むくつけき顔の鬚さへあれば、見あぐるも恐しくて、我にもあらぬ心地して泣く〳〵家路に歸りぬ。

女房はかくとも知らで、常にもあらず國守に召されて、程過ぐるまで遲きことよと心もとなくて、更けゆく夜半も春なれば、さなきだに霞める月に浮雲のかゝる隈さへ怨しくて慰むかたのなきまゝに、枕に近き琴を搔き鳴らし調ぶるからに、中の緒のたへがたきすさみも由なしと置きて、

春の夜のならひに霞む月影もいとゞ涙に曇りはてぬる

あなうたてやと衣うちきて臥しぬ。むかひの寺の鐘の音も夜半過ぐる頃、男は歸りて寢屋の外にたゝずみて、言もいでず片手には蒔繪の文筥をもち、片手には面にさし當て、さめ〴〵と泣く。女房は呆れはてて、こは何事ぞやと胸うち騷ぎしが、もて鎭めたるけはひにて、やゝ言ふ事あらば申しもし給はで、只泣きに泣き給ふは、啼澤女の神にやおそはれ給ふらん、怪しきに疾く語り給へといへば、男は知らぬ事とて何をかの給ふ、此年月そこをば片時去らず馴れむつれて、憂きも喜びもうらなく語り慰み、あはれと思ふふしぐ〴〵も月にそひてまさり草、まさる思ひのうらがれて、見もし見られん事も、今五六日と思ふが悲しければ、泣かるゝなりといふ言葉のあやも續かず、只妻の顏を守りつゝ、又雨雫と泣く。女房は思ひよらぬ事なれば興さめて、何のためにしかあらん、事のやう聞

たへがたき―堪へと絕えとにかく

片手には面にさし當て―「は」文字不用なるべし

啼澤女―神代紀にある神の名

きてのち、とありかかりとわきても答へめ、疾く語り給へといへば、泣く〴〵國の守のもてなしより始めて、しかぐ〴〵の由語れば、女房とばかりためらひて申す、さはよく聞き給へ、かゝる難題にあたり、國の守に命をめし取らるべきしぎに成るとも、それ猶前世の宿業なり、今更悔むべきにあらず、さりとて免るべき難をそのまゝに過して、おろかなる名を取るべきや、つら〴〵思ふに我國の歌は素盞嗚尊の八雲をはじめ、三十一文字の數はかぞへて知るとも、六くさの深き道に尋ね入る事は更なり、まして見ぬ本歌に叶ふべき末をつがんこと、敷島の道に名高き雲の上人にもあるべき道理かは、昔物語に又逢坂の關と書きしに、かち人の渡れど濡れぬと、觴の底に續松の炭して書きつけしは、見たりし歌の上下にこそあれ、とにかくに國の守へ我を召捕らん謀に陷り給ひしこそせん方なくうたてけれ、かゝる事を愚なる人の心をもてめぐらすとも甲斐あるべき事かは、佛菩薩こそ一切衆生を憐みわたれる心に誠を發して賴み申せば、宿業をも轉じ給ふとなり、中にも大悲觀世音は救世の誓ひ深くして、もろ〴〵の苦を拔き樂を與へ給ふ、然れば遠く外に求むべからず、此國の内にまします石山寺の觀世音こそ殊に靈驗いちじるし、誠にもて賴み給へ、もし宿因深く驗なき時は、憂き事しげき此國に住まぬばかり、われ

六くさ―和歌の六義をいふ

昔物語―伊勢物語をさす

わたれる―る文字不用か

われ諸共にいづちの山の奥、谷の隈にも影を隠し、身こそわびしき住まひならめ、朽ちぬ契は心の中に變らじものを、諫むべき夫の諫められ給ふは、餘りにいふ甲斐なき迷ひざまかなと、いと面なげに恥しめられて、夫はやう〳〵に人心出で來て、暫く涙を押さへける。さらばそこの計らひに從ひてんとて、今日より家の内清まはりて、下人はしたに至るまで精進うちし、石山の方に向ひ觀世音を念じて、夜晝となく額づきぬ。さて三日といふ日に、男夜の程よりゆするして、明けたつともに立ちいでて、世は安からぬ野洲川にすむとて人の渡りかね、曇るか影の鏡山、長き思ひの勢田の橋、かけし願ひを見ぬ歌のあふ事かたき石山寺、大悲の誓ひあやまたず、驗をあらはし給へ、救世のほさち施無畏の德を施し給はゞ、歌の本末を示し、恐しき國守のにくさげなる面ばせを解き、われに半國をしらしめ、後の世は佛の國に生れ、ほさちに逢ひ見奉るまで、朽ちぬ契の妻諸共に、此世後の世助けさせ給へと、涙を袖にしたてて念願し、其夜は内陣に通夜しける。

此頃の物思ひ、習はぬいもひの心づくしに、道の疲れさへ添ひて、前後の分ちもなく打臥して、更けゆく鐘の響、曉の鈴の音にも目をさまさず寢入りたりしが、ゆふつけ鳥の鳴

ゆする—髮水つけて髮を梳ること
施無畏—觀音は一切群類の畏怖心を脫せしむる功德を有するよりいふ
したてて—ひたしての衍か
いもひ—潔齊
ゆふつけ鳥—雞

くまでも佛の告はなくて、あまさへ國の守に襲はれ妻を奪ひとられ、我身もいたくさいなまれて追ひ拂はれつゝ、せん方なさにをう〳〵とわが泣く聲の我耳に入りて夢は覺めぬ。こは何のしるしぞや、身は汗雫になり、われかの氣色に呆れ果てたり。かなたにはからからと鳴る花皿の音して、樒閼伽奉る法師ばらの、をのこのねおびれたる顏を見て、笑ふが恥しさに、やをら這ひいでて、怨しきに物言ひもやらず、堂をくだりて家に歸るに、參る人も多く、出づる人もある中に、怪む人はさし寄りて、何を歎く人ぞと問ふに、何をか歎かんと答へつゝ、樓門にさしかゝる程、いと氣高き上臈の面は白く光るやうにて、まみのあたり打ちけぶりたるが、紫苑色の衣に紫の綾ひき重ね、濃き袙白ききぬかづきて、市女笠きたるに供の女三たり四たり後にさがりて歩みくる。かの夫を見て何を歎くぞと問はせたるに、はげしかれとは言はまほしけれど、何を歎かん、伊香郡より參りたるにと答ふ。猶思ふ事あらんに申さしめ給へと、頻に問ふにこそ、ふと心づきて、佛智不思議の方便は順逆の量りがたく、三十三應の身はいづれにか託し給はざらん、よしそれならずとも道の巷に行きかふ袖の追風、そよと身にしむも宿世のえにしなり、ましてあはれと思へばこそ問はせもし給ふらめと、しかゞの事ありて歎く事を祈りしに、菩薩の誓

ねおびれたる—ねとぼけたる
はげしかれと—千載、俊頼「うかりける人を初瀬の山おろし烈しかれとは祈らぬものを」
三十三應の身—觀音の化身三十三體あるをいふ

ひにもれて、せん方なさに歸るなりと語りければ、彼の上薦する〳〵と立寄りて、そればかりの事はいと易かりけるものを、疾く語らざりける人かな、其和歌の末は、

　みるめもなきに人の戀しき

と言ひやるべしとの給はすを聞くに、嬉しきこと限なし。さるにても君はいづこにおはする御方、御名は何と申すぞ、承りてこそ重ねてよろこびも申さめといへば、武藏野のゆかりの草も假初の名なれば、いかでそれと打出でん、折節は御堂の東のつまに住むぞ、能くこそ問ひけると打笑み給ふ顏の光、衣のにほひ移るばかりに芳しくて、堂のかたへ歩み給ひしが、立ち隔たる朝霧に隱れて見失ひぬ。男はまさしく救世菩薩の我を助け給ふと、御堂の甍のかくるゝまでに顧みて、拜み〳〵口にはかの歌を誦しつゝ歸りけり。家には女房心もとなさに湖の方を眺めやりて、南無觀世音と唱へて、門に出でゐて待ち居けるが、夫の顏を見るより、いかに驗やといへば、佛を賴みてしるしなくて有らんやと、かしこげにいらへて內に入りつゝ、しか〴〵の事共を語れば、女房餘りの嬉しさに聲打上げて、さと泣きつゝ涙も更に堰きあへず、繰返し吟ずるに、言葉のつゞき長ありて賴もしげなれば、緣の薄樣に筆のあや淸げに書きて、上を包み封つけて推し戴き〳〵、

浦島が子の玉手箱、明けてかひなき恨はあらじと、うちまかせたる佛の誓ひを力にて、夫に渡せば、七日といふ夕つかた、國の守の館に參り、仰せのおもければ何の徑路は知らねども、歌の下つけけると案內さすれば、守はおそし來れ、そのわたり名ある侍、家の子どもある限り召し集め、興あるあらがひに郡司が妻をとられん不便さよ、よも歌の本末つゞくべきやと、喜びて待ち居たり。

程なく參ればよくぞ違へず參りたりと、いかに人々も聞き給へ、此歌心詞つゞきたらんにおいては、彼に國を分ちてしらしむべし、つゞかぬ時は彼が妻を我に贈らるべきかためなり、必ず此事違ふべからず、其證人にもなり候へかしと、髭おしなでて居たり。男恐れ〳〵心の內にはなも觀世音ぼさ〳〵と念じ、文筥をさしいだせば、封を切りつゝ改むるに、違ふことあらんやは。扨我方よりの歌を高く吟ずるに、近江なるいかごの海のいかなればとて、下の封を開きて讀みあげたれば、

　みるめもなきに人の戀しき

と吟ずるに、おのれも人々もはつと言ひて、暫く感ずることやまず。守も餘りの不思議さに男を近くよせて、いかなればかく思ひ寄りしにやと、頻に問ひ責むれば、せん方な

參りたりと—と
文字不用なるべし
かため—契約

くて石山の觀世音の教へにまかせて付くると答へければ、さしもあらみさきの守の心もとけて、佛の力ならでは及ぶべきかはと、人々の上に召しのぼす。今よりは國を分ち申すべし、ともかくも心にまかせ給へといへど、男はいかゞ有らんと辿るばかりなれば、武士の癖にて、言ひ出でたる言の葉を違ふは道の恥辱なり、人の思はんも恥しく、且は私にはからひ約をたがへなば、觀世音の咎めも恐しと、しるしの文に、いろ〳〵の絹五十匹、太刀、かたな、砂金百兩、馬、鞍など、引出物に相添へて、けふより半國を計らひ給ふべしと、盃とりて勸め、おのれも悅ぶこと限なし。男は面目を世にあらはし、家に歸りて妻を初め家の内上下悅ぶことたぐひなし。かくて横しまなくおきてし、民草ゆたけく家の内富み榮え賑しく、あまさへ國のをの子姫一方生ひいでて、夫婦悅びを重ね、行末長き樂みとなりにけり。これひとへに賢き妻の諫により觀世音に歸依し、信をもて祈れば、大悲無邊のあはれみを施し給ふ靈驗、豈疑ふべけんや。郡司は觀世音の厚恩の報ぜんために、石山寺に一日の法會を行ひ、これを恒例として今にたえず、子孫相續いて勤めけり。

つら〳〵此歌の心を案ずれば、所は近江の伊加胡郡なれば、それによそへいかなればか

あちみさき―あちみたまの誤にて、荒御魂の神(守)とつゞけしなるべし

しるしの文―證文

國のをの子姫―誤字あるべし

く思ふにやと上にいひしにつけて、見る人ならばこそ、見もせぬ人の何しに戀しき道理あらんと咎め給ふ心にぞあらん。それをこゝは鹽ならぬ海なれば、蜑の刈るみるふさわかめやうのたぐひも無きにといふ詞によそへて、みるめも無きにと續けたり。此歌の一ふしに鬼神の如くなる國守の心を柔げ、佛力の深きを驚き、菩提の道に入ること誠に歷刼不思議にあらずや。郡司も佛力を賴みて妹背の中絶えず、家ゆたかにして佛道を修し、二世安樂を得る。あだなる迷ひのすぢを深き佛像に引きかけ、終に一大事の因緣と成就する事を思へば、いづれの門よりして眞淨の道に入らざるべき、利生の方便量りがたし、仰いでたふとぶべし。

咎め給ふ―原本「かゝめ給ふ」とあり、今改む

佛像―佛緣の誤か

眞淨の道―眞如淨土の道

ふ

く

ろ

ふ

ふくろふ

中昔の事なるに、加賀の國かめわり坂の麓に、ふくろふといふ鳥あり、年を申せば八十三。ある日の雨中のつれ〴〵に、ふくろふ心に思ふやう、我此年になるまで榮華をきはめず、所詮榮華をせんと、烏の九郎左衞門、鷺の新兵衞を近づけて、いかに皆々聞き給へ、あねはの松山とりの院にて、月竝の管絃のありし時、鷺姫の琴ひき給ふ御姿、しづ心なき戀となりて、心も心ならず、包むに包まれず、いやましの思ひ草となるまゝに、彼の御方へ玉章ことづけて給はれと申しければ、烏の九郎左衞門、鷺の新兵衞、詞をそろへて言ふやうは、仰せにて候へども、彼の鷺姫の御事は、七つ八つの年よりも今日に至るまで、上見ぬ鷲さまの御口說き候へども、終に御返事もなき由、うけたまはり候ふ、我等如きの者が御文づかひを申すとも、いかで御返事あるべきぞ、只同じくは山雀のこさく殿を御頼み候へ、それをいかにと申すに、をさなき時よりも同じ所にて御育ち候へ

ば、殊にかしこき方なれば、定めて一往の御返事あるべきと申しければ、ふくろふげにもと思ひ、山雀の宿へゆき、いかに山雀殿聞き給へ、粗忽なる申し方にて候へども、あねはの松山烏の院にて、月並の管絃のありし時、鶯姫の琴ひき給ふ御姿を一目見しより、由なき戀となり、身のやるかたもなく候ふ、及ばずながら世の嘲を顧みず、彼の御方へ玉章を送りまゐらせたく候ふ、わりなき申し事ながら、文傳へてたび給へと、打歎き申しければ、山雀申しけるやうは、鶯姫の御事は上みぬ御方より御心をかけさせ候へども、終に御靡きもなき由、うけたまはり候へども、餘りに〳〵御心のうち痛はしく候ふまゝ、御つかひ申すべしと申しければ、ふくろふ喜び、文さま〴〵と書きにけり。

さて〳〵何にとりてか、たかまのはらに餘所ながら見染めしよりこのかた、何とやらん心の内の亂れ髪、思ひの種となりにけり。入江に近き蜑小舟、こがれて物や思ふらん、何しに君をみ熊野の、音無川の淵瀬にも沈みはつべきとは思へども、君に名殘やをし鳥の、思へば命ながらへて、神や佛の惠みにも、賴む假寢の聲を聞きまゐらせん。そのためにかき集めたる藻鹽草、うつゝにも見る旅寢の小車の、めぐり逢はんと思ふ君、思ひしことの葉草こそ、譬へん方もなかりけり。されば浮世のその中に限あらざる事はなし、物によ

くよく譬ふれば、み山の木の葉、空の星、岸うつ波と眞砂をば數へば限ありぬべし。その外唐土、天竺、我朝、鬼界、高麗、契丹國、三千大千世界の畜類も、蟲けだものに至るまで、數へば限ありぬべし。法華經は一部八卷二十八品、文字の數は六萬九千三百八十四字につもれり、大般若經は六百卷、文字の數は五十九億四十八萬字につもれり。東方朔が九千歳、龍智和尚が一千歳、浦島太郎が七百歳も、限ある由うけたまはり候へども、君を思ひしことは限なし。物によく〳〵譬ふれば、春の花、秋の月ぞと、織姫か、皆鶴か、小野の小町か、毘沙門の妹に吉祥天女か、松浦姫、紫式部か、小式部か、和泉式部か、小督の局、大織冠の乙姫、玄宗皇帝の三千人のその中に、第一の妃楊貴妃、源氏六十帖の女房達、この外遊女かず〳〵多しと申せども、君に及ぶ人はなし。されば古き歌にもよまれたり、

なさけには賤しき袖はなき物をからさで宿れよひの月影

とよみおかれけんも、かやうの思ひよりも始まれり。上は玉樓金殿、下は賤が伏屋まで、野にふし山を家とする虎狼野干のたぐひまで、情はありとこそ聞け。一切の生類のその中に、この道知らぬものはなし。かやうに申すことの葉を、只おほかたに思すなよ、御

返事なきものならば、浮世は不定のならひ、互に消えはてまゐらせて、今生にての怨念、又來世にての怨み、生々世々に至るまで、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人、この六道をありかんとき、微塵程も離れずして、くるり〳〵と追ひめぐり、憂きもつらきも後の世にて申すべし。もし此事上見ぬ鷲さまへ漏れきこえ、死罪に及ばん其時は、死出の山、三途の河をこす時に、手に手を取り組んで刹那が間に打渡り、閻魔の廳にまゐりつゝ、阿彷羅刹に苛責せられんことども、うらみと更に思ふまじ。さて〳〵此事申し傳へんそのために、生滅滅已の鐘をきゝ、八聲の鳥を打過ぎて、是生滅法の鐘、朗々とうち響き、はや東雲に立ちあかしつゝ、終にいつとも見えもせず、君ゆゑ誠の咎もなき神や佛を怨みつゝ、君ゆゑ身をもやつれそひ、人目をつゝむ事なれば、あはれと問はん方もなし。かゝる思ひをしなのなる淺間の嶽に立つけぶり、胸よりや立ちぬらん。花に三春の約あり、いかで情をかけざらん、されば浮世のならひには風に靡く篠竹も胡蝶に親むならひあり、水にうもるゝ浮草も螢に一夜の宿をかす、虛空を照らす月だにも桂男に宿をかす、ひととほり一村雨の雨宿りも他生の緣とうけたまはる、一河の流を汲むことも他生の緣と聞きぬれば、及ばぬ戀をする人は神もあはれと思すらん。數ならぬ我袖の、乾くま

しなのなる云々 ―伊勢物語「信濃なる淺間のたけに立つ烟をちこち人の見やは咎めぬ」

もなき浮草の、苔の袂も朽ちぬべし、まつことわりもかれ〴〵になりゆく袖も白雲の、立ち迷ひゆく有様にて、筆をとゞめ申すなり。かやうつ書き認めて山雀のこさく殿に渡しけり。

彼の鷺姫の云々―文章調はず、「彼のうそ姫へわが玉章の誠にとゞき」の誤なるべし

その後ふくろふ佛神三寶に祈誓申しける中にも、みやまの藥師へ願書を認めてこめける。南無藥師瑠璃光如來、彼の鷺姫のわが玉章の鷺姫へ誠にとつき、よろしき御返事を給はり、それがしに笑みを含ませ給ふものならば、藥師の御寶殿を金銀を鏤め、黄金の瓔珞、瑪瑙のゆき桁、玻璃の柱、錦の戸帳、水晶の切石、金銀の砂を敷き、池には玉の橋をかけ、極樂淨土をまなぶべしと、頭を地につけ祈誓申さる間、山雀こそ彼の宿へゆき、色色の物語を始めつゝ、その後申しいだしけり。誠にこれまで參ること、別の子細で更になし、たとへばかめわり坂の麓にふくろふ、そもじさまを戀にして、あけくれ袖をぬらさせ給ふ、つゝむに包まれずして、それがしを御頼み候ふ程に、參りて候ふとて、かの御文をとりいだし、まゐらせければ、鷺姫これを受け取らず、山雀のかたへ投げ返す。山雀とりあへず一首の歌をよまれたり。

たとへば―此使用法一種特別なり申して見れば の意と聞ゆ

ふくろふの我を頼みし玉章を空しくいかで返しはつべき

文の中おそろしく―神佛を起請にたてたるより恐しといふなり

みづほのあはの―瑞穂の粟を水の泡にいひかけたり

こんや―この世の誤か

山雀に渡しけり―原本「山雀の渡しけり」とあり

ぬりたしなみ―「ぬり」の二字誤あるべし

ふせ―風情なるべし

とよみければ、鷺姫返歌に及ばず、山雀にいふやうは、誠によく〳〵聞き給へ、年比上みぬ御方よりさま〴〵の御ことの限あらねども、御返事も申さず候へども、そもじの御つかひにましませば、事かりそめの水莖もいかではかなく洩すべしとて、御返事をぞあそばしける。

あからさまなる御言の葉、誠に水莖のあと打置き難く、ながめまゐらせ候ふ。さては數ならぬ身に心をかけさせ給ふかや。返事に及ばず候へども、文の中おそろしく思ひまゐらせ候て、事假初の申し事にて候へども、我身は賤しきものにて候へば、そもじは葛城山の神のゆかりにてましませば、誠しからず思ひまゐらせ候ふ、みづほのあはの假初に、末も通らぬ物ゆゑに、仇名立ちては何かせん、なか〳〵人には始めより問はれぬ怨みのあらばこそ。さりながらそもじとこんやの機縁うすくして、契りしこともよもあらじ、來ん世すぎて又來ん世、天に花咲き地に實なり、西方の彌陀の淨土にて契りなんと書きとゞめ、山雀に渡しけり。山雀斜ならずに思ひつゝ、急ぎ歸りてふくろふ殿にぞ奉りける。ふくろふ戴き開いて見るに、おりたしなみたる言の葉なり。山雀もさも曲なげなるふせにて歸りける。

さるほどにふくろふ餘りに事の物憂さに、木の葉かきよせ枕とし、少しまどろむところに夢をぞ見たりける。われは山の藥師なり、さても鷺姫の方よりよき返事にて候ふを、それを知らずしてさとらんことの不便さよ、こんよ過ぎて又こんよとは、明日の夜の事なり、天に花さきとは、月星いでさせ給ふことなり、地に實なるとは、ほのかにあかくなきことなり、西方の彌陀の淨土とは、これより西の阿彌陀堂の事なり、それにてあすの夜の月いで候はぬに逢はんと、起させ給ふと夢に見て、かつぱと起きていふやう、さこそしるしなりと思ひ、俄に支度して阿彌陀堂へぞ行きにける。さる間かの所に夜もすがら待ちにける。夜中の時分に少しまどろむ所に、鷺姫十二一重を引き飾り、めのとの女房ひきつれて、阿彌陀堂へぞ行きにける。ふくろふまどろむ姿を見てけおこし、そこにて一首の歌をよまれたり。鷺姫の御歌、

思ふとは誰がいつはりのうそぞかし思はねばこそまどろみぞする

とよみければ、ふくろふ返歌に、

よひは待ち夜中は怨みあかつきは夢にや見んとまどろみぞする

とよみければ、鷺姫此歌をきこしめして、打解け顔にて御物語いたしまゐらせんと、比

さとらん—さとちぬの訛
あかくなきこと—あかなることの誤なるべし
逢はんと—此下に「なりとて」の文字あるべき所なり
さこそしるしなり—さてこそ驗なれの意
けおこし—ゆりもこしの誤にや
よひは待ち—古歌なり

翼連理の契をぞこめければ、ふくろふ餘りの嬉しさに、中にもかやうに鷺姫の寢物語のやうは、蜑のしわざや藻鹽草、火屋のけぶりにあらねども、はや浦風に打靡き、さゞめ言さまぐ〳〵なり。そののちふくろふも、扨々此程の君に心をつくし舟、こがるゝことの悲しかりしに、終にあふみの鏡山、むかふ心のうれしさよ、又そもじは音にきゝし瀧の水、かやうに落ちあひまゐらせんとは、夢にも更に知らざりし、悠々と御物語申したく候へども、人目を忍びまゐり候ふ、はやく〳〵歸りまゐらせんと、十二ひとへの褄をひきかへ、はや歸らんとせん時、ふくろふ餘りの悲しさに、泣く〳〵歌をよみ侍りける。

片絲のくるほどならばとまれかし深きなさけはよるにこそあれ

とよみければ、又鷺姫の御返歌に、

かりそめにふしみの野べの草枕露ほどとても人に知らすな

とよみすてて、急ぎ宿へぞ歸りける。もろ〳〵の鳥ども此由を聞及び、鷺姫の方へ腰折なりとも一首おくりまゐらせんと、思ひ〳〵に歌をよみ侍りける。

君ゆゑに身を墨染にそめなして深山鳥となるぞ悲しき
我戀をたがしら鷺の願ひには君と岩屋にふたり住まばや

こがるゝ—澪、焦の兩意
あふみ—逢ふ身、近江
歸りまゐらせん—歸りまゐらせんの誤
せん時—せし時の誤
くる—來る、繰る
よる—夜、縒る

あはぬ戀―逢はぬと引合はぬと雨意

數ならぬ云々―鶴の歌なり、雀の千聲より、鶴の一聲の諺に依る

見しよりも云々―雀の歌なり、躍るといふに歌主知られたり

此君の云々―かうぶりてに蝙蝠をかくしたる也

ほろとかけられて―ほろは雉の鳴聲なりとつてこう―鶏の鳴聲を隱したるなり

梓―梓巫に口寄せさするなり

神おろし―神佛の名を呼びて其來降を乞ふをいふ

四十から今この年になりぬまであはぬ戀にぞ身をやつしぬる

うそ姫を思ふ心は深草の野邊にいつまでねをや鳴きなん

數ならぬ雀の多き聲よりもわが一聲に靡けうそ姫

見しよりもその面影にあこがれて躍りまゐれど逢はぬ君かな

此君のなさけを深くかうぶりて末たのもしく臥す由もがな

うそ姫の情をほろとかけられて世になき鳥と人にいはれん

思ひきやつれなき君を戀にして夜半にかたみをとつてこうとは

その後壁に耳、岩の物言ふ世のならひ、此事上見ぬ鷲さまへ洩れ聞え、ふくろふの方へはい鷹のころくを討手に向けられけり。然るにふくろふは早く木の蔭におちにけり。料簡なくしてうそ姫を害し給ふ。此由ふくろふうけたまはり、起臥なげき沈みける。目もあてられぬ風情なり。せめて腹を切らんとて、刀に手をかけ給ふ所を、ふくろふの縁類みゝづくのきすけ意見申しけるは、腹を切り候はんよりうそ姫の亡き跡を御とぶらひ候へと申しければ、ふくろふけにもとて思ひとゞまり、その後彌陀を頼みて梓にかけにける。まづ神おろしをぞ始めける。上は梵天帝釋、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、王城の

たうろう神―道陸神にて道祖神の事なり
本宮藥師―本宮は藥師の衍
ひれう權現―飛瀧なり瀧を本地として祀る

さんてんの中のたかゐぼし―未詳、但しさんてんは摩利支天、大黒天、辨財天の三天なるべし

鎭守八幡大菩薩、春日、住吉、北野天滿大自在天神、伊勢天照大神、山には山の神、木には木魂の神、地にはたうろう神、河には水神、熊野は三つの御山、本宮藥師、新宮は阿彌陀、那智はひれう權現、瀧本は千手觀音、熱田の大明神、富士の淺間大菩薩、信濃には諏訪上下の大明神、善光寺の阿彌陀如來、南無三世の諸佛を請じおどろかし候ふぞや。

さて〳〵今生の花の緣、かやうに散りはてまゐらせ候ふべきとは、夢にも更に知らざりしに、思ひもよらぬ梓の聲の水手向けかたじけなや、誠に〳〵偕老同穴のかたらひも、緣つきぬれば甲斐もなく、比翼連理の言の葉も、かれ〴〵になるさゝめ言、誠にさんてんの中のたかゐぼしに、申したき事の海山語りても〳〵盡きせじ、かつ〳〵其時名殘惜しきこと、後世の障になり候ふぞや、さてもく〳〵不思議なる事にて、かやうに候ふや、さりながら思ひ切り、これ〳〵も思ひ候へども、九泉にかゝりまゐらせ候ふ間、夜六度、晝六度、十二時の苦み、御推量し給へ、語るははてもなし、閻魔の前を忍びて、これまで參りて候ふぞや、いざや魂彌陀の淨土へいそぐべし。その後ふくろふ猶々歎きまさりけり。はや浮世によしもなく、元結切りて西へ投げ、高野の峯にあがりつゝ、奥の院にて髮を剃り、それより三熊野にまゐり、三つの御山を伏し拜み、その後諸國をめぐりつゝ、かやうに成り果てぬるも、誰ゆゑぞ、露と消えにし鷲姫の菩提をとはんためなれば、恨みと更に思はぬなり。

胡蝶物語

前栽―庭

胡蝶物語

中比の事にやありけん、都近きあたりにこてふと云へる人あり。いかなる故にや、此人は妻をもかたらふ事なかりければ、愛すべき子もなく、只春秋の花にうき身をやつし、色色さまぐ〜の草木の花の種を集めて、前栽にうゑおき、是を樂みければ、京わらんべども此人を胡蝶と名づけけるなり。胡蝶一人の母をもちけるが、世にこえて孝行をなし、いつきかしづきしに、五十ぢあまりの秋の比、假初の風の心地とていたはりつき、程なく十日がうちに空しくなりぬ。此人よその歎きにだに深くいたはる人なれば、まして恩愛深き一人の母に別れし事なれば、天に仰ぎ地に伏し、是を歎き悲みけれども其甲斐なし。誠に會者定離の習ひなれば、誰かこの道をのがれぬべきと思ひとり、せめての事に花園にいでて心を澄ましけるに、あしたに盛なりし花のゆふべにうつろひ、夕露を含みて笑める花も明くる日影に散り萎れぬ。誠に盛者必衰の掟まのあたりなり。世の中の榮

須彌の四洲―須彌山の四方にある南贍部洲、東勝神洲、西牛貨洲、北倶盧洲をいふ

しせつ―結夏、解夏、冬至、元旦の年中四大行事を四節といふ

え衰へも又かくの如し。須彌の四洲の中にも、此世界は老少不定の境なれば、一代教主の釋迦ほとけ末世の衆生に生死無常の定めなき事を知らしめ給はん御方便に、淨飯大王の后摩耶夫人の胎内をかり給ひて、假に人間に生れ悉陀太子と申し奉りしが、十九の年の御年より發心修行の御志ありければ、御父淨飯大王これを歎き思召して、いかにもして御心を慰め給はんために、都のまはりにしせつの四季を學び給ふ。太子は之を叡覽あるに、まづ東表に出で給へば、改まりぬる春の空、こち吹く風にさそはれて、梅が香ふかき山の端に咲き亂れたる初櫻、今をさかりと岩つゝじ、松にかゝれる藤波の、よせくる非手の山吹も、散り亂れつゝ飛ぶ蝶の、はかなき夢や頼むらん、霞の籬隔てつゝ百囀りの鳥の聲、きくも長閑けき景色なり。されども時移りなば花も散りうつろひなん、誠に是も菩提の種ぞと思召し過ぎさせ給ふに、南表を見給へば、常磐堅磐に繁りあひ、卯の花さける木の間より、歸らんには如かじと鳴きすてて行く時鳥、あとなつかしき橘のかをりも深き紫の、雲をひたすか澤水に、色も異なる杜若、風さへ薫る蓮の絲の、濁りにしまぬ御心地にて是にも更にめで給はず。西を遙に見給へば、秋の景色のいろ〳〵に、千草の花の咲きつゞく、裾野の原の絲薄、結びもとめず散る露に、萎れて蟲の聲さやぐ、鳴きすがるに

こんでい駒―馬の名、金泥、乾陟などの字をあつ

舍匿大臣―大臣とあるいぶかし、童子、舍人などいふが常なり

三世了達―過去現在未來の三世を分明に達觀すること

もいとどなほ、秋の哀は知られけり。入り日の殘る山の端に、錦をさらすもみぢ葉も、色濃きよりや散りぬらん。曉かけて小男鹿の妻戀ふ聲を聞くにつけても、煩惱の闇に迷ふらんと打詠め給へば、やう〳〵秋も暮れ、冬のけしきに變り來て、木の葉をさそふ北時雨、尾上も峯も白妙の、雪ふりうづむ炭竈の、煙たえたる山賤の住みかも思ひ知られつつ、いとど哀はまさりけり。是を見彼を見るにつけても、皆菩提の種ならずといふことなしとて、いよ〳〵發心修行の御志深く成り給ひて、十九の御年の八月十五日の夜、内裏を忍びいで給ひて、こんでい駒に召され、舍匿大臣一人召しつれ、檀特山のさかしき路を凌ぎ給ひて、阿羅々仙人を師と頼み、やがて菩提樹のもとにて御飾りをおろし給ひて、花の袂をひきかへ麻の衣に御身をやつし、御名をば瞿曇沙彌とぞ申しける。曉は谷に下りて閼伽の水を汲み、晝はひめもす峯に上りて花を摘み、つま木を採り、夜はよもすがら座禪の床に御まなこをさらし、衆生濟度のために難行苦行し給ひて、終に正覺ならせ給ふ。昔は淨飯大王の御子悉陀太子と申せし、今は三界獨尊の釋迦如來と現れ給ひ、一切の衆生有情草木國土まで、成佛の緣を結び給ひて、御年八十にして二月中の五日に、頭北面西に臥し給ふとかや。されば三世了達の御佛だにも、無常の掟はのがれさせ給

うつつら―提婆尊者と交際ありし嗢呾羅（ウツタラ）をいふにや

悲願―佛が衆生のために大慈悲を起し願を立て行を修し諸願を満てたまふ意にて卽ち諸佛の誓願をいふ

はず、況や人間においてをや。東方朔が九千歳、うつつらの八萬歳も名のみ残れるばかりなり。かゝる教をうけながら、色にそみ香にめでて、二度輪廻の業にかへらんこそ淺ましけれと思ひ定めて、前栽に植ゑおきし花にも心をとめず、日比あつめおきし資財雜具をも打棄て、麻の衣の墨染を身にまとひ、東山のかたほとりに草の庵を結び、夕べには眞如實相の月をすまして、春の花のうつろひ、秋の木の葉の散りつくすにつけても、いよいよはかなき世の有樣を觀じて、

生けるもの草木のみかは何かさて此世に残る物やあらなん

かやうに口すさび、清水のかたを眺めやり、南無大慈大悲の觀世音、悲願たがへ給ふなと伏し拜みけるに、南にあたりて煙ほのかに見えければ、げに是は鳥部野にてぞあるらん、主は誰ともしら雲の消えてさきだつ夕烟、いつ身の上になるべきぞや、末の露本の雫と詠じける彼の遍昭が言葉も思ひいだされて、いとあはれなりければ、

見ればげに心細くも鳥部野に絶えぬ烟のあけくれの空

誠に朝には紅顏ありて世路に誇るといへども、夕べには白骨となりて、郊原に朽ちぬとつらねおきしも、今一入のあはれをぞ催しける。さる程に夕陽西に傾き、遠近の寺々の

鐘さだかに聞えければ、又もや聞かん入合の鐘と詠ぜし歌を思ひいだして、

いつのまにけふの日もはやくれはどりあやしき程の入相の鐘

かやうに折にふれ事に隨ひ、心を澄まし明かし暮らし給へば、都のうちは云ふに及ばず、近國他國の者までも傳へ聞きつゝまうで來り、この聖を拜し奉り、末世の衆生を助け給はんとて、彌勒佛の生れ來り給ふと云ひならはしけるが、おのづから彌勒上人とぞ人の申しける。あまりに人の多く集りければいとはしく思ひ給ひて、

聲をきゝ色を見るにも世の中に心とまらぬ墨染の袖

ひとり世をのがれてすめる庵なれば軒もる月もいとはしきかな

かくて猶も浮世遠からん方をもとめんとて、北山の奥へわけ入り、人氣稀なる峯に柴の庵を結び、行ひすましておはしけるに、或夜夜半ばかりに柴の編戸をほと〳〵と叩く音す。野分の風のさそふにやと思ひ、ともし火をかゝげ心を澄まし聞きゐたるに、重ねて物申さんといふ音す。晝だに人のおとづれざるに、いかなる者の來るべき、只天魔破旬のわが道心を妨げんとて來るらん、よし何者にてもあれ、澄ましつる心の月は曇らじものをと思召し、誰なるらんとの給へば、これはこのあたりの者にて候ふが、元より罪業

五逆十悪―前にいづ

深き女の身にて候へば、今上人の御教をうけ、後の世を助かりまゐらせんと思ひ、これまで参りて候ふといふ。聖聞召し、仰せはさもあるべけれども、かやうに世を捨てはてたる庵の内へ、女人の御身なるに、しかも夜更けていかで入れ申すべきぞ、急ぎ歸らせ給へと仰せければ、此女房きゝて、上人の仰せにて候へども、罪深き女の身にて候へばこそ法の庭には近づき候へ、五逆十悪のもの、女人、非情草木までも助け給はんとの佛の御誓願にて候はずや、そのうへ我身かやうに老いたる尼の事にて候へば、何か苦しかるべきとて、かづける衣を引きのけたるを、柴の編戸のひまよりもさやけき月に見給へば、六十に餘りたるらんと思しき尼の、薄青の衣に練貫かみにうちかづき、露にしをれてゐみたり。聖見給ひて、さては苦しからぬ者ぞと思ひ、柴の編戸を開き給へば、此尼やがて内に入りぬ。

聖仰せけるは、このあたりの人と仰せ候ふが、こゝは人里遠き所なるに、夜ふけてしかも女の一人渡らせ給ふこと、かたゞ〳〵不審にこそ候へと仰せければ、誠は五條あたりの者にて候ふ、都にては常に参り仕へしことの候ひし、昔を語り申さば思召しあはする事の侍るべし、それはまづさしおき、かゝる迷ひ深き身のゆくへ、一偈一句の御示しをも受けまゐらせんために、これまで参りて候ふと申すところへ、又年の程は二八ばかりなる女房の、柳色の衣きて、薄紫の小袖上にかづき、する〳〵とさし入り、彼の尼君の脇に直り、みづからも御跡を慕ひまゐり候ふ、五障三從の雲厚うして眞如の月を澄ますことなし、今遇ひ難き縁にひかれて、是まで参りたるこそ嬉しう候へ、いかさまにも上人の御教にまかせ、末の闇路をはらしまゐらせんとて、露に萎れ涙にむせびてぞ禮拜しける。

かゝる所に又十四五ばかりなる女の、薄萠黄の衣きて黄なる小袖うちかづき、足たゆく内へ入り、いと面はゆげにて尼君のそばに打ちそばみてぞ居たる有樣、いはん方なくらふたけて見えける。聖御覽じて、いかなる人々なれば召しつれらるゝ人もなくて、かく淺ましき庵の内へは渡らせ給ふぞとの給へば、かの女房しばしは御返事をも申さでやゝありて、みづからは父母もなき孤兒にて候ふが、いとけなき時より物思ふ事絶えやらで、道芝の露とも消えぬべく思ひつるに、繋がぬ月日たち行くまゝに、いとゞ思ひはます鏡、面影にたつ父母のことなつかしき明暮は、煩悩の垢あつく積り、拂ふ心の風絶えて、猶妄執の雲霧を、いかにもして晴らしやせんと來り侍るなり、上人の御値遇にひかれ、輪廻の業を免れ、父母われら諸共に無爲法樂の臺に到らんと思ふ心をしるべにて、方々の御跡

を慕ひ參り候ふと、涙に咽び申しければ、聖も尼君も墨染の袖をぞ濡されける。又そのあとよりつゞき、二十ばかりなる女房の二十四五人いざなひ來るを見れば、いづれも花を飾りたる有樣なり。

あるひは紅に白き袴をき、白綾に紫の袴ふみしだき、十二重の衣に花づくし縫ひて、又唐綾、唐錦、色をつくして飾り立て、次第々々に竝みゐたり。中にも少し年たけたりと見えたる女房、上人に向ひ申すやう、これまで誘ひ參り候ふ人々は、御覽ぜられ候ふ如く、いづれも若く候へども、罪業深き女の身ながら、月花に心をそめて明かし暮らすのみにて、身の後の事をも知らず候へば、都のうちにていかなる知識をも賴みまゐらせ、御示をも受けまゐらせんと思ひながら、心ならざる身の悲しさは、いつとなく打過ぎぬ、今この上人の御事世にすぐれさせ給ひて、たふとく有難き御慈悲とうけたまはり及び候へば、皆々これまで誘ひ參りて候ふ、かゝる愚痴の迷ひを夢ばかりはるけてたび候へとて、いとあはれげにぞ見えける。聖聞召し、こは不思議なる御事かな、方々の御有樣を見奉るに、只人ならぬ御よそほひなり、雲の上人にて御渡り候ふかや、十二人の御局の中にても、女御后にてもおはすらん、さらずば公家の中にても近衞殿か、九條殿か、二條、

十二人の御局―天子に十二人の后ありといふよりいふ

一條、鷹司、伏見殿の姫宮か、菊亭、葉室、西園寺、その外家高き人の姫君なるらん、しからば玉の簾、錦の帳の内にて、常は琵琶を彈じ、琴を調べ、歌を詠じておはすらん、又假初の物詣などにも御輿車花を飾り、舍人雜色あたりを拂ひ、上﨟、侍、御供申し、鞍馬の山の櫻狩、賀茂や八幡の物まうでなどにこそ出でさせ給ふべけれ、かゝるいぶせき柴の庵の内へ、しかも夜ふけ物凄き折ふし、御供申す人もなく、かちはだしにて來り給ふは、只人間にてはよもあらじ、愛宕の山の太郎坊、比叡の山の二郎坊、鞍馬の奥僧正が谷にすまひをなす小天狗の通力をめぐらし、此聖が心を迷はせて魔道へ引入れんとて來りたるか、さらずば此山にすむ虎狼野干のものどもが餓を助からんために、此僧をたばかり命を奪ひとり、しゝむらを服せんとて、女に變化て來るらん、よしそれとても力なし、たとひ魔緣の者なりとも、又虎狼野干にてもあれ、此界へ生をうけたらん者の、佛法に近づくは多生劫の緣ぞかし、一偈一句の功德にて、無量無邊の罪を滅し、佛果菩提に到らしめんこと疑ひあるべからず、方々の有樣を、佛の戒め給ふところを、あらく示し申さん、まづ涅槃經に見えたるは、三千大千世界のもろ〳〵の男子の煩惱を合せて、女人一人の業障とすと說き給へり、あるひは又女人は地獄の使なり、長く佛の種を絶つ、

多生劫―多くの生死をへたる遠き昔　方々の有樣を―此下に脫文あるべし

面は菩薩に似て、内心は夜叉の如しとも說かれたり、しかるによつてもろ〳〵の佛にも嫌はれ、十方の淨土へ生るゝことも叶はずと、一切の經々に嫌ひ疎まれたること其數を知らず、そも〳〵我朝は粟散邊地の小國とはいひながら、欽明天皇の御代にはじめて佛法此國に渡り、聖德太子これを弘め給ひしよりこのかた、佛法流布の國となり、惡魔外道おのづから退き、民の煩ひなく國おだやかなり、津の國天王寺を佛法最初の御寺として、比叡山延曆寺は傳敎大師の開闢、桓武天皇の御建立、藥師醫王の佛像あり、又南都の東大寺興福寺は三國一の大伽藍、聖武天皇の御建立、笠置の寺は天智天皇の御願所、高野の峯は弘法大師の御開闢なり、其外白山、立山、富士の嶽、戸隱山、釋迦の嶽、尊き山々峯峯寺々、靈佛靈社數を知らずおはしますが、峯をさかへ谷を限り、女人を深く嫌ひ戒め給ふぞかし、誠に內には五障の罪深く、外には三從のさはりありと聞く、又唐の白樂天が詞にも、人生れて女人の身となること勿れ、百年の苦樂他人によれりとあり、誠にかやうに內典外典に嫌はれ、かく淺ましき罪業の人々の、いかで佛に成り給ふべきを、釋迦如來の御慈悲の有難さは、一念隨喜の功德して無量ざいの罪を滅し、卽身成佛と說き給ふ、又法華の名文に、草木國土悉皆成佛とも說かれたれば、有情非情に至るまで、皆佛性をう

醫王―藥師の一名

峯をさかへ―峯を境として

無量ざい―無量罪

けながら惡業煩惱の闇に迷ひ、地獄には墮つるなり、迷故三界成、悟故十方空、本來無東西、何所有南北ともあり、迷ひの故に三界の流轉あり、悟る故に十方も空し、本來の面目を明に見れば、東西も南北もあるべからずと思召し、心の玉を磨き給ふべし、たとへば惡業煩惱のおこることは大洪水の如し、いかにとしてこれを堰きとめんや、只其水を切り流し〳〵せば、終には水つきぬべし、その水に溺れぬれば卽ち地獄なり、是を以て地獄遠からず極樂まのあたりなり、さればをのこなりとも物每に執著し、あるひは叶はぬ事を願ひ、又は戀慕愛執にひかれ、一念を切ることなきものは、六道四生に輪廻すべし、女人なりとも妄念を切りすてて、ひとへに佛に賴み給はゞ、何を疑ひあるべきぞと、さま〴〵に敎へ給へば、此女房たちは皆隨喜の涙に袖をうるほし、上人を拜し奉り、あら有難の敎化やな、忽ち輪廻妄執の雲晴れて、眞如實相の月おのづから澄める心地して、有難くこそ覺え候へ、御いとま給はり候へとて、皆々座を立ちければ、聖怪しく思召し、さもあれ方々はいかなる人々にておはしますぞ、御名のりあれと仰せければ、此女房達皆もとの座に直り、上人の仰せこそ御ことわりにて候へ、身の一大事を授かりまゐらせて、いつまで我名を包むべき、いで〳〵我名をあらはさん、我等は皆花の精にて候ふ、上人

六道四生―前にいゞ

都に御座ありし時は、あけくれ寵愛せられ申せしに、いつしか捨てられまゐらせて、其妄執深き故に、これまで參り御結縁にひかれて、佛果をうくる事こそ有難けれ、いざや面々のちまでの御かたみに、腰折歌なりとも一首づつつらね申さんとて、袂より短冊を取りいだして、

短冊―傍訓原本に從ふ

夕顔
聞きうくる法の光は玉かつらかけてぞ頼む花の夕顔

萩
思ひきや露を結べる絲萩のこよひし花の紐とけんとは

女郎花
つひに又消ゆべきものをあだし野の露をみなへし手向にやせん

桔梗
二つなく三つなく法を一すぢにきゝやうくると尋ね來にけり

二つなく云々―此歌桔梗の字を隠したり、以下この類多し一々註せず

百合
あひがたき法の教は優曇華の花も心をゆりてこそ聞け

朝顔
はかなくも夕べを待たぬ朝顔の花の袂にかるゝ白露

菊
のりの聲きくより早く雲霧のはるゝ心の月ぞさやけき

山吹
うれしさに露を拂ひてこよひしも御法の庭にいでの山吹

絲薄
白露のたまゆら結ぶ絲薄みのりの雨に潤ひにけり

藤袴
ぬぎすてし薄紫の藤袴のりのゆかりを尋ねてぞきる

忍草
のりの聲聞く嬉しさのあまりにや忍ぶに堪へぬ我涙かな

刈萱
消えやすき露のうき身をかる萱の花に馴れつゝ願ふ後の世

撫子
なでしこと思ふ佛の恵みあれば及びなき身も頼もしきかな

仙翁花
いかにせんおふけなき身のかくばかり妙なる法の教なからば

小車
法の師にめぐりあひにし小車の花さへ笑める心地こそすれ

葵
あひ難き法にあふひの花かづらかゝる涙は袖にあまりて

菫
こよひ聞く法に心のすみれ草花もや笑みの眉ひらくらん

藤の花
紫の花にうつろふ藤波のよする汀や西の彼の岸

紫蘭
一すぢの道をしらんと尋ねきて法の教にあふぞ嬉しき

ゑむ―笑む、
しをん―紫苑、師恩

蓮（はちす）
心なき身もたのもしく思ふかな法の蓮のゑむに引かれて

紫苑
迷ひつゝ心の闇のおのづから晴るゝは法のしをんなりけり

深見草
深見草ふかく頼みをかけまくもかしこき法の教うけつゝ

末摘花
紅（くれなる）の色にそみても何かせん末つむ花のたむけならずば

紫陽花
あぢさゐの四ひらに咲ける花の枝折りて佛に手向にやせん

露草
露草の露の身ながら法の庭にたち交（まじは）りて頼むのちの世

蔦
蔦の葉のつたなき身さへ頼みあれや法の教の道たがはずば

葛

葛の葉のうらみもなどか殘るべき心の秋の風し立たずば

忘草

たをりつゝ三世の佛に手向して花に憂きをもいざ忘草

尾花

よろこびの涙なるらし片岡の招く尾花が袖の露けさ

荻

秋風にそよぎいでつる荻の聲もおのづからなる法のことわり

かやうに心々のさまを一首づつ短册に書きつけ、上人の御前にさし置き、御いとま申して立ちいづるかと思へば、柴の戸ぼそをさそひくる嵐と共に、搔き消すやうに失せにけり。上人思召しけるやうは、かく心なき草木まで、和國の風俗を知りけるぞやと、いと有難く思召し、かやうに口ずさみ給ふ。

草も木も皆佛ぞと聞く時はたれかは漏れん法の誓に

かやうによみて裾野の原に立出で給ひ、座具をのべ香をたき、一切非情草木成佛とくわし、暫く兩眼をふたぎゐ給へば、頃しも秋の草花の咲き亂れたる中に、時ならぬ藤、山吹、

座具―僧の用ふる敷物
くわし―觀じの誤なるべし

蜜、蓮、其外さまぐの花の、今をさかりと匂ひ深く露を含みて月に色めき渡りけり。聖は御覽じて、さてはめんの體をあらはしけるぞと思ひ給ひて、煩惱卽菩提、生死卽涅槃といふ文を重ねて示し給ふ。たとへば煩惱と菩提、又生死と涅槃は水と氷との如し、又響と聲に似たり、しかれども煩惱は生死の源なり、かるが故に思ひのまゝに煩惱を起さば、生死つくることなし、されば只一心不亂の所にこそ涅槃の妙諦は讃歎すれ、過去の因によりて有情非情のかはりありとも、この妙文にひかれて佛果を得んこと疑ひなしと回向して、もとの庵室に歸り給へば、東雲の空もほのかに明けすぐるとかや。心なき草木のたぐひだにも、誠の道に入りぬれば佛に成ること疑ひなし。此草子を見給はん人は、慈悲正直を專らにして、貪欲邪見戀慕愛執、忍辱慈悲を楯につき、名號の利劍をもつて是を鎭め給ふべし。

めんの肬―めんめんの肬か女人の肬の誤なるべし

惡業ほんの―惡業ぼんなうの誤か

玉水物語

玉水物語上

三十二相―原本「二十五相」とあり、紅葉合によりて改む

なほざりばかりは云々―只そのまゝ家にあくは殘念に思ひ

中比の事にや有りけん、鳥羽の邊に高柳の宰相と申す人おはせしが、三十に餘り給ふまで、御子もなく、如何なればとて歎き給ひて、佛神に祈り申し給ひければ、其效驗にや北の方たゞならず見えさせ給ふ、御悅び限りなかりけり。扨神無月の初めつ方に、姫君出來給ひけり。手の上の玉と傅き育て奉り給ふ。三十二相の御容めでたく誠に傍ら光るばかりに見え給ふ。斯くて年月かさなる儘に十四五に成らせ給ふ。吹く風立つ波につけても、心をかけて歌をよみ詩を詠じ、何となき御遊にても類難有くおはしければ、父母なべてならず思し傅きて、なほざりばかりは痛はしく思召し、御宮仕にや出し立てんと思す。御心樣優にやさしくおはしませば、前栽の花ども咲き亂れ、四方の山邊の霞み渡り、いと面白きを、或夕暮に御乳母子の月さえと申す女房只獨り御供にて花園へ立出で給ひつゝ、花に戯れ、何心なく遊び給へり。此邊には狐と申すもの多く住みける處なり、折節此花

園に狐一つ侍りしが、姫君を見奉り、あな美しの御姿や、せめて時々もかゝる御有樣を、餘所にても見奉らばやと思ひて、木蔭に立ち隱れて、靜心なく思ひ奉りけるこそ淺ましけれ。姫君歸らせ給ひぬれば、狐も斯くてあるべき事ならずと思ひて、我塚へぞ歸りける。熟々と座禪して身の有樣を觀ずるに、我前の世に如何なる罪の報にて、かゝる獸と生れけん、美しき人を見染め奉りて、及ばぬ戀路に身を俏し、徒らに消え失せなんこそ恐しけれと打案じ、潸然と打泣きて伏し思ひける程に、よき人に化けて此姫君に逢ひ奉らばやと思ひけるが、又打返し思ふやう、我姫君に逢ひ奉らば、必ず御身徒らに成り給ひぬべし、父母の御歎と言ひ、世に類なき御有樣なるを、徒らに爲し奉らんこと御痛はしく、兎や角やと思ひ亂れて、明かし暮らしける程に、餌食をも服せねば、身も疲れてぞ伏し暮らしける。もしや見奉ると、彼の花園に蹌踉ひ出れば、人に見られ、或は飛礫を負ひ、或はじんどうを射掛けられ、いとゞ心を焦しけるこそ哀なれ。中々に露霜とも消えやらぬ命、物憂く思ひけるが、如何にして御側近く參りて、朝夕見奉り心をも慰めばやと思ひ廻らして、或在家の許に男ばかり數多ありて、女子を持たで、多き子供の中にひとり女ならましかばと、朝夕歎くを便にて、年十四五の容鮮かなる女に化けて、彼の家に

じんどう―神頭、鏢頭などの字をあつ、鏃の一種

行き、我は西の京の邊に在りし者なり、無緣の身となり、賴む方なき儘に、足に任せて是迄迷ひ出でぬれど、行くべき方も覺えねば賴み奉らんといふ。主の女房打見て、痛はしや尋常人ならぬ御姿にて、如何にして是まで迷ひ出でけん、同じくは我を親と思ひ給へ、男は數多候へども、女子を持たねば、朝夕ほしきにといふ。さやうの事こそ嬉しけれ、何處を指して行くべき方も侍らずといへば、斜ならず喜びて、愛み置き奉る。如何にしてさも有らん人に見せ奉らばやと營みける。されど此娘つや〳〵打解くる氣色も無く、折々は打泣きなどし給ふ故、我に隱さず語り給へと慰めければ、努々さやうの事は侍らず、憂身のめざましく覺えて、斯くむすぼれたる樣なれば、人に見ゆる事などは、思ひも寄らず、唯美しからん姫君などの御側に侍りて、御宮仕申したく侍るなりと言へば、よき所へ有り付き奉らばやとこそ常に申せども、さも思召さば、兎も角も御心には違ひ候ふまじ、高柳殿の姫君こそ優にやさしくおはしませば、妾が妹、この御所に御ひてうにて候へば、聞きてこそ申さめ、何事も心易く思されん事は語り給へ、違へ奉らじと言へば、いと嬉しと思ひたり。

斯く語らふ所に、彼の者來りければ、此由と語れば、其樣をこそ申さめとて、立ち歸り

見給ふ君―戀ひ慕ふ人

御ひてう―未詳

此由と語れば―かく〳〵の次第なりと語れば

御乳母に伺へば、さらば唯やがて参らせよと宣ふ。悦びて引裝ひ参りぬ。見様容貌美しかりければ、姫君も悦ばせ給ひて、名をば玉水の前と付け給ふ。何彼につけても優にやさしき風情して、姫君の御遊び、御側に朝夕馴れ仕うまつり、御手水参らせ、供御参らせ、月さえと同じく御衣の下に臥し、立ち去る事なく候ひける。御庭に犬など参りければ、此人顔の色違ひ、身の毛一つ立になるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。餘りけしからぬ物怖かな、此人の御覺えの程の御羨しさよなど、傍には嫉む人もあるべし。斯くて過ぎ行く程に、五月半の頃、殊更月も隈なき夜、姫君簾の際近くゐざらせ給ひて、打眺め給ひけるに、時鳥おとづれて過ぎければ、

郭公雲井のよそに音をぞ鳴く
と仰せければ、玉水取敢へず、
ふかき思ひのたぐひなるらん
やがてわがの心の内と口々申しければ、何事にか有らん心の中こそ懐しけれ、戀とやらんか、又人に恨むる心などか、怪しくこそとて、

供御―食事

口々―内々の誤か

さみだれの程は雲ゐの郭公たがおもひねの色をしるらん
玉水やがて、
心から雲ゐを出でて郭公いつを限りと音をや鳴くらん
月さえ、
覺束な山の端いづる月よりも猶鳴きわたる鳥の一聲
など言ひかはし、夜も更けぬれば、内へ入らせ給ひぬ。されども玉水は月残り多く侍るとて残り居て、來し方行く末打案じ、扨も我はいつを限りに何となるべき身の果ぞと、漫に涙漏れ出でて、袖も絞るばかりに成りにければ、
思ひきや稲荷の山をよそに見て雲ゐはるかの月を見るとは
心から雲ゐを出でて望月の袂に影をさすよしもかく
心から戀の涙をせきとめて身のうき沈むことぞよしなき
いと久しく歸らねば、月さえ心もと無くて立ち歸るに、かく吟むを聞きて怪しく覺ゆれば、
よそにても哀をぞ聞く誰ゆゑに戀の涙に身をしづむらん

心から雲ゐ云々―紅葉合には「おのづから雲ゐをいづる望月の秋に影をさすぞ物うき」とあり

哀をぞ―紅葉合に「哀とぞ」とあるよろし

と訪へば、姫君聞き給ひ、

おほかたの哀は誰もしらずやと身には習はぬ戀路なりとも

はや夜も更けぬらん、入らせ給へと宣へば、泣く〳〵歸りて、月さえ諸共、姫君に添ひ臥し奉れども、思ふ心のもと言ひ現はさねばにや微睡まず。

斯くて月も立ち行く程に八月ばかりに成りぬ。初雁音の告げ渡る聲も身に染む心地して、哀を訪ふと覺えたり。養母の方よりは絶えず訪れ、誠の親よりも愛しく當りけり。常の衣裳の外にも鮮に目易く仕立ておこせけり。文にも、などや時々は出ても慰め給はぬ、我はかく夜の寢覺にも、生まぬ親なれば、みやうとくのみもてなし給ふと恨みければ、我も覺束ながら過ぐる朝の心には思はざらなん、誠の親ならねばと、承るこそ侘しけれなど言ひて、返事をしければ、是を見て、げに〳〵さぞ有らん、理ぞかしとて打泣きぬ。去程に三年と申す神無月に、姫君の親しき人々數多寄り集り給ひて、紅葉合あるべしと、定めさせ給ふ。明日にもなりぬれば、色美しく葉數多有らん紅葉を尋ね侍るに、此玉水夜更けて打紛れ出で、元の姿になり、烏羽殿の南面の塚に、兄弟などある處へ行きたりければ　見付けて斜ならず悅び、如何にや何處より來れるぞ、失せぬると覺えて後

目易く―見ぐるしからず
みやうとく―けうとくの衍か
我も覺束ながら云々―文章調はず、我も覺束なく思ひながら過ぐる朝夕の心にかけてなどか思はざらんの意

の營みをこそ此三年はしつれ。此程御所の邊に候ふなり、靜かに語り申すべし、扨は明日一大事の用ありて、紅葉尋ね來りたり、各如何にもして尋ねて給べと言ひければ、所や有る、易き事かなといふ。嬉しくもあるかな、さらば高柳の御所南の對の椽に差置き給へといへば、易き事なり、さりながら犬や有ると問ふ。犬は侍らず、心安くおはせなど言ひ置きて歸りぬ。姫君　月さえは、例ならず何方へ出で給ひしぞといへば、打笑ひ、怪しき者に戀ひ契りて出で逢ひつるなど戯れければ、實にさや有りつらん、いと久しかりしなどいへば、姫君、さもあらば、如何に憎からん、移れば變る習ひなれば、我は必ず思ひ捨てられんと戯れ給へば、忝なく嬉しいみじと思ひて、あな傍痛や、世にあるまじき人と言ふとも、御側を立ち離れて他人に添ふべき心地はし侍らんものをと申せば、知れ難き事と打笑み給へるを見奉れば、身に染む心地していと味氣なし。さて彼の兄弟は、山へ入りて紅葉尋ねけり。中にもさしつぎの弟、五寸ばかりなる枝に、色は五色にて、葉毎に法華經の文字を摺りたり。鮮に磨き付けたる如くなるを、明日の午の時に、玉水出でて見れば、枝ざしの斯かるもの有りけるや、まだ見ずとて、愛で悅び給ふ事限なし。外よりも數多奉らせ給へども、是に並ぶや有るべき。扨面々に紅

所やある―紅葉合に「われ〳〵が山にぬきて到らぬ所のあるべきか」とあり、此意の句落ちたる也

心地はし侍らんものを―「侍らん」は「侍らぬ」の訛

さしつぎの弟―すぐ次の弟

葉に歌をつけらるべしと有りしかば、同じくば歌を玉水よみて付け給へと宣ふ。たゞ遊ばしたらんこそと言へど、強ひて宣へば、さらば書き出でて見せ奉らばや、少しもよろしげならんを取り直し給はなんとて、筆とり上げすさみ居たる。殿も渡り給ひて、紅葉を御覽じ愛でて歸り給へば、また母上ぞ渡り給へる。

扨玉水は歌を書き出でて、姫君に奉る。何れも面白しとて、五つの枝に五首歌を付けらる。青かりし枝に、

もみぢ葉の今はみどりに成りにけり幾千代までも盡きぬ例に

黄なる葉に、

黄なるまで紅葉の色は移るなり我人かくは心かはらじ

赤き葉に、

くれなゐに幾しほまでか染めつらん色の深きはたぐひあらじを

白き葉に、

野邊の色みな白妙に成りぬとも此紅葉ばの色はかはらじ

紫の葉に、

幾しほに染めかへしてか紫の四方の梢を染めわたすらん

並ぶもなかりけり―並ぶものなかりけりの衍か

御きそく―御氣色

かく田―紅葉合には「のだ」とあり

ほかい所―紅葉合に「けはひ所」とあるよろし、化粧料の意なり

とぬん書き付けられける。殘りは姫君書かせ給ふ。扨其日になりて合せ給へば、色々心を盡して讀みいで、えならぬ枝色を調へ給へども、姫君のに並ぶもなかりけり。五合度せ給へども、度毎に姫君ぞ勝せ給ひける。此事隱れなく、内にも聞召され、彼の紅葉御召しあり。惜み給ふべきかはとて、やがて參らせ給ひける。帝叡覽ましまして、やがて其姫君參らせ給ふべきよし、時の關白に仰せ下されければ、定めて參らせ給はん事は悦びなるべけれど、宰相微なる住居にて候へば、出し立てん事難くやと申させ給へば、やがて心得させ給ひて、三ヶ所を賜びにけり。かねて願ひし事なるに悦び給ふ事限なし。やがてその御營みめでたかりけり。玉水の前の御きそく類なし。津の國かく田といふ所をば、玉水のほかい所に賜びにけり。我身は無緣の身なれば、たゞ哀をかけさせ給はんこそ嬉しう侍らめ、斯樣の御事は思ひ掛け侍らずと度々申し返し奉れども、樣々恨み仰せられければ、さらば父母悦ぶ事斜ならず。或時彼の母物怪めきて、惱み渡る、多くの祈をしけれども、月日重なる儘に重くのみ見ゆれば、おほぢ子ども歎きけるに、御所に候ひ給ふ娘に、今一度逢ひ奉らまほしう、常に戀しきを見て止みなんと言ひければ、此由か

身置き奉らん云云―御身をあとに置きて先立つが悲しと也

くと傳へ申しけるに、いと哀と思ひて、暫しの暇を申して參りければ、悦ぶ事限なし。如何なる前の世の契にか、唯朝夕御事のみ心苦しく、御宮仕も何時までかと痛はしく思ひ奉る、御身故に心易く過し侍れば、難有く嬉しくも覺え奉る、思ひ掛けずかゝる病を受けぬれば、千に一つも助かり難し、身置き奉らんこそ悲しけれとて、衰へたる手を差出して搔撫で泣きければ、此人は物も聞えず、泣くより外の事ぞなし。側に付き添ひ給へば、殘りの子供は少し暇ある心地して、此處彼處に打休む程なり。

玉水物語下

此母少しも人心地ある時は心細げなる事ども言ひ、又起ると思ふ折々は物怪めきて、現にもあらぬ風情なり。起りて又少し押鎭めて言ふやう、我は斯かる有樣なれば、遂には消え失せなん、痛はしや御身も我世に無くなりなば、又誰をか母とも賴み給はん　我母の讓りにて鏡一つ持ちたり、日比命の限りと思ひしものなれば、是を形見に御覽ぜよとて參らせけり。今ははや歸り給へと勸むれど、見捨て難くて一日二日と過ぐる程に、既に三日になりにけり。姫君の御方より文あり、母の惱み心苦しかるらん、少しもよき樣ならば、早く歸り給ふべし、此方の徒然思遣り給へ、搔暗す心地なんすと書かせ給ひて、

年を經るはゝその風にさそはれば殘る梢はいかになりなん

と遊ばしたるを、此母すこしの間心よく見奉りて、忝くも仰せられたるかな、御宮仕ならずは、いかで世にある者とも知られ奉らん、とにもかくにも難有し、身より出でたる子供よりも、おろか無く思ひ奉るぞと悦びけり。月さえも細々と書きて、

初花の云々―此歌紅葉合に「初花のつぼめる色のゆかしさにいかに梢の世を惜むちん」とあり

我狐―汝狐の意

初花のつぼめる色のくるしきにいかに木の葉の色をみきくに

と、かゝる事を見聞くにつけても、思ひの色は晴れやらず。御返りは、忝き御哀み申し盡し難う、筆にも及び難う侍るなり、心に掛らぬ折なく參らまほしう侍れども、見捨て難くてなん、少しもよろしげならば、參りてよろづ自らこそ申し侍らめとて、

ちりぬべき老木の花の風吹けば殘る梢もあらじとぞ思ふ

月さえにも同じく書きて、

蔭たのむくち木の櫻朽ち果てばつぼめる花の色も殘らじ

など書きて參らせけり。

かゝる處に母の物怪起りければ、一所に集りて歎くに、又少し怠りたる樣にて寢たれば、皆打緩み、夜更け人靜まりて、此娘ばかり起きて居たるに、毛一條もなく禿げたる古狐一つ立ちよりて見ゆ。よく〳〵見れは我父方の伯父なり。是を追ひ退けければ、病者は微睡みけり。互に、こは不思議なる事かな、如何にといふ。我狐われ聊かの便りによりて、この病者を親と賴む事あり、然るべくは立ち退きて此苦みを止め給へと言へば、ゆめ叶〳〵ふまじき、其故は彼の病者の父、我賴みたる子を、さしたる咎も無きに殺したれば、などか思ひ知らせざらん、我も此娘を惱まし、命を取りて、思ひをさせんと思ふなりと語る。玉水、理なれどしゆしやうむしやくしやう化城品と名付けたり、然りながら、業に引かれて、六道に迷ふ罪によりて、元の三途に歸る事、身より出せる焔なり、我等畜類なり、未だ業因盛なり、然りと云へども、善根をもせば、などこんど人體を受けざるべき、又人體は佛の體なり、心違はずば、などかこんど佛にならざるべき、幾程あらぬ世の中に、一旦の念に引かれて、忽ちに此病者を失ひ給はゞ、彼の罪と言ひ、又多くの人の歎きを受け給ひなん、何事も報いのものなれば、さあらば、獵師の手にも掛り給ふか、然らずは三途に歸り給はん事のはかなさよ、唯然るべくは、立ち退きて助け給へと言へば、古狐目を見出して申すやう、人界に生るゝも佛の敎によりてなり、然れば佛も度々現じて、忽ちに人の命をも斷ち給ふ、我に起す罪ならず、彼等が招く罪なれば、努々身に過失なし、終日に坐禪工夫をして我心を見るに、心に種なし、理を知りて心とす、理を計つて、そこと案ずるに、起らざる念を理とす、念を拂ひて功德とす、此仇を知らずして、思はん事は力なし、延喜の帝と申すは、末代まで忍ばれさせ給ひし帝なれども、過去の宿業によりて、無間の底に沈み給ふ、帝の皇子かふや上人とて世を背き給ひし人、御夢想の告に

しゆしやうむしやくしやう―未詳　三途―地獄、畜生、餓鬼

などかこんど―「こんど」は「來ん度」の意

目を見出して―目を丸くして

かふや上人―太平記には日藏上人の事とせり

隨ひて、無間の底より、炭頭の如くなるを金鋏にてはさみ出し給ふとこそ申せ、斯かるめでたき御門だに前世の業をば免れ給はず、又播磨の書寫に住みける蟒、雀の子を尋ぬるとて、法華經の聲を聞きし故、聖武天皇の后とならせ給ひしなり、今惡念を拂ひ、菩提心を起し、十惡五逆の罪人まで導き給ふ彌陀の名號を賴み奉らば、後生は疑ひ有らじ、然るに汝も獸なり、我も畜類なれば、一業所感の身として、何れを敎化すべしといふ。其時若狐理はいと能く知り給ひて、佛の力にはけ給ふ謀一旦の事なり、法然上人の仰せられし事を、耳に留めて覺えきかんといふは、善惡を嫌はざる處なり、罪に理非は入るべからず、淨飯王の王子悉達太子と申せしも、王宮を出で給ひし故にこそ、今の釋迦佛とも成り給へ、又善惡を分け給ふはかうこそ有るべけれ、子の敵を取り給へば惡なり、助け給へば善なり、爰に於いて善惡けつしやうは、是を殺さんと思ひ給んは念ならずや、爰に於いては拂はぬ念なり、彼是を思ひ捨て給へば悟なり、卽身成佛こそ有らまほしけれ、十惡五逆を盡して、阿彌陀佛の敎化を賴み給はん事は然るべからず、此上にそれを思ひ取り給はずば力なしと申せば、其時古狐、猿眠して打頷き、斯かる不思議に逢ふ事前世の幸なり、誠に殺したればとて、戀しき我子歸るべきにあらず、今は一筋

一業所感―前世になせる一作業が現世にて其結果を感起するをいふ

佛の力にはけ給ふ―誤字あるべし、意味通ぜず

耳に留めて覺えきかんといふは云々―紅葉合に「耳にとゞまり」て候ひしは惡を知らざるところをざぜんすと申す也罪は理非をわくべからずとあり

善惡けつしやうは―けつしやうは決定か、このあたり文章調は

に亡き後を弔ひ給へ、我は入道して山深く閉ぢ籠り念佛申すべしとて、病者の許を立ち退きけり。母は娘の人と物語するとぞ思ひける。扨病者は心輕くなりて、物など言ひ、物見入れなどしける由聞き、同じ畜類と言ひながら、有か見たりとて語りければ、實にさる事ありとて、彼の射殺しつる狐の後弔ひ、樣々の孝養したり。扨玉水は心易く見置きて御所へぞ歸りける。

有か見たり―誤脫あるべし意味通せず

既に霜月になりぬれば、御内參りの御儀式目も驚くばかりなり。女房達童三十人、中にも此玉水をば中將の君になし給ひて、一の女房に定めらる。されども是を勇しくも覺えず、常は打萎れたるを、如何にと怪み給へば、何となく風の心地など言ひ紛はし、いかさまにも物思すらん、かばかり隔てなく思ふを、などか心にこめて言ひ出で給はざるらん、語りても慰み給へかしと宣へば、打泣きて、遂には知召さるべき事なれども、今は語り奉らじ、亡からん後にも哀とは思召し出させよなど申せば、心苦しう思す。御内參りも近づく儘に、玉水熟々と思ふやう、我畜類と言ひながら、近づき參りて契り奉らん事は痛はしさに、只斯くながら見奉り添ひ奉るに、心を慰めつる事のはかなさよ、姫君の御耳へは聞かせ參らせばやと思へども、今まで知らせ奉らで思ひの外に恐しとや思され

ん、とても御内參りあらば、其時こそ紛れ失せめ、わが化けたりし姿を、今まで見つけられざりつるこそ不思議なれと思ひ廻らして、風の心地とて、我住む局に閉ぢ籠り、初めより思ひ染め奉りし我有樣、今までの事を書き集め、小き箱に入れて、姫君にもて參り、何とやらん此頃は世の中味氣なく仇なる物と、思ひ知られて物憂く侍れば、もし夜の間にも消え失せ侍る事もやと覺えて、此箱を奉る、我いか樣にも成りなん後此箱を御覽ぜよと申して、潸然と泣きければ、姫君は怪しく、如何に思ひ給へば斯くは宣ふぞ、此儘わが行先をば見屆け給はまじきやと打怨み給へば、御内參りにも御供申し奉るべけれど、もし如何なる事か有らんと心細くて、是を奉り置くなり、儀式の折は人目繁くて、此箱をもえ參らせぬ事かあらんなどと、思ひ奉りてなど言ひ紛らかしつゝ、構へて〳〵此箱を類なく思召し、又親しく思召さるゝ月さえなどにも見せさせ給ふな、樣ある箱にて候へば、左右なく人に見せさせ給ふまじ、中の懸子をば御年積り世を思召し放ちたらん時、明けさせ給へと申せば、打泣き給ひて、何時までも候はんとこそ思ふに、斯く末の世の事まで宣へば、心元なく、いと憂き心こそすれと宣ひながら、此箱を受け取り給ひて、互に涙に咽び給ふ。月さえも參り人々忙しげなれば、紛らかしつゝ立ち去りぬ。姫

見屆け給はまじきやー見屆け給ふまじきやの訛

君さらぬ樣にて、此箱を引き隱し給ひけり。何處ともなく失せにけり。殿には内へ御供なり扨御内參りの紛れに車に乘るよしにて、里に止りぬらんと人々も思ふ。姫君も歎かと思す、内には心地惡しと常に言ひしかば、里に止りぬらんと人々も思ふ。姫君も歎かしく、如何もなりつるぞと、心元なう思召し、二三日過ぎて、何方へも無しと聞えければ、親の方此處彼處尋ねさせ給へども、行方も知らず。五日十日の程は、さりとも聞き出でん、餘所よりや歸り來んと待ち給へども、見えねば、何處に失せぬるぞ、人の隱したるかと思し給ひければ、御悅びに御心の内の御歎ぞ增させける。諸卿の女房達打託ち歎き合ひけり。何事につけても此人あらましかばと思しける。宰相殿は中納言にぞ成り給ひける。玉水の事常に名高く、いみじき事も有れば、如何に成りぬる事ぞと歎き給ふ。姫君は此箱の中ゆかしく思さるれども、御門のおはします事絶えず、暇なくて明かし暮らし給ふに、或時官の廳へ御幸あり、よき暇と思召し、忍びて開けて御覽ずれば、始めより終りの事を書き付けたり。こは如何になる事ぞと、御胸打騷ぎ、恐しくも哀にも思しけり。我故かやうに化けたりしを、遂に色にも出さで過ぎし事の、畜類ながら無慙さよ、覺えの志を見せつゝせし事の哀さよ、難有き心かなと、思召し續けて打ち涙ぐみつゝ御覽

官の廳ー太政官の正廳

晴れやらで浪に漂ふ―紅葉合に「浮雲の風に漂ふ」とあり

負ひなん事の―紅葉合に「ふもはん事の」とあり

身の類ぞと―類は賴又は願の誤か

ずれば、此巻物の奥に長歌をぞ書き付けける。

束の間も　去り難かりし　わがすみか
君を逢ひ見て　その後は　靜心なく
あこがれて　うはの空にも　迷ひつゝ
はかなき物は　數ならぬ　憂身なりける
物ゆゑに　すゞろに身をば　つくし舟
漕ぎ渡れども　晴れやらで　浪に漂ふ
篠蟹の　糸筋よりも　微かにて
過ぎし月日を　數ふれば　唯夢とのみ
成りにけり　我身一つは　如何にせん
君さへ長き　恨みをば　負ひなん事の
由なさよ　朝夕君を　見る事も
身の類ぞと　慰めて　夢現とも
別き難く　明かし暮らしつ　面影を

變らじと―紅葉合に「忘れじ」とあるよろし

人知れず云々―意味通ぜず、紅葉合には「人知れず思ひ入りけ

何時の世までも　變らじと　思ひ明石の
浦に出て　潮干の貝も　拾ふかな
蜑の焚く藻の　夕けぶり　棚引く方も
なつかしや　島傳ひして　みるめ刈る
蜑の子どもに　有らねども　乾く間もなき
袖の上に　訪ひ來る風も　ほしかねて
靡く氣色を　餘所に見て　思ひ知られぬ
身の程も　遂に甲斐なき　心地して
たゞ一筆を　すさみ置く　玉章ばかり
身に添へて　長き思ひの　しるしぞと
常に弔ふ　心あらば　後の世までの
掛橋と　なりても君を　守りてん
かゝる憂身を　人知れず　とぶらはしとは
をのやま　またついなや　花に出でて

る縁の道世にためしなき契をばかき留めける水莖の跡ばかりこそ由なけれ」とありて満尾せり

濁りなき世―此歌の上句缺けてなし

よう思召し―世を思召しの誤なるべし

とぢめ―終局の意

打傳への爲におくなり―打傳へん爲にかきおくなりの誤か

また例なき　たぐひをも　思ひ出でよの
心　に　て　只書きすさむ　水　莖　の
岩根をいづる　山　川　の　谷水よりも
處　狹　き　袂　の　露　を　君は知らじな

色に出て言はぬ思ひの哀をも此言の葉に思ひ知らなん

濁りなき世に君を守らん

かやうに歌を書き奥に二首の歌を書き付て、此箱は人に厭かれず、年經れど添ふ人に愛を増す箱なれば奉るなり、君に添ひ參らせん程は、此懸子をあけさせ給ふなと申し置きつる如く、よう思召し離れんとぢめなどには、開けても御覽ぜさせ給へなど、細々と書きて參らせたるに、哀淺からず思召しける。斎類ながらかゝるやさしき心の、哀深きを打傳への爲におくなり。

鶴のさうし

かけ給ふ一乗ぬるをいふ

鶴のさうし上

情深うして、富貴の家と榮ゆる事、中比宰相にて右兵衛督をかけ給ふ人ありけり。父は左大將むねまさとて、世に覺えいみじかりしが、此宰相は殊更慈悲心深く、飢ゑたるものに食を與へ、窶れたる人に衣裝を取らせ、我身の上を忘れ給へば、何時しか家貧しくなり、朝餉夕餉の烟も絶え、春夏の衣をも脱ぎ更へんたよりもなし。自然人の交際も薄くなり、親しきも遠ざかりければ、かくて世に生存へ、時めく人に嗤はれんも心憂し、いかなる山林にも籠り、身の隱家を求めんとて、只一人そことも知らず、迷ひ出で給ふ。或山蔭に草の庵の有りけるを、一夜の宿と頼みて夜を明し給ふ。

夜明けて里人來り、是は人の住む家ならぬに、如何なる人なれば、艶きたる容姿にて、この内にはおはしますと咎めければ、我は行方もなき世捨人なれば、汝等心ありて孚みてくれよかし、我身に叶ふ事をば、如何なる奉公をもし侍らんと宣へば、里人聞くより

も、御身の姿にて田の草を取り、畑打つ事もなるまじ、只何處へも行かせ給へと申しければ、力及ばぬ次第とて、庵の内を出で給ふが、やう〳〵力弛み足も立たざりければ、一足踏みては畔に倒れ、二足には巖の苔に打ち轉び、行きやらぬ風情を、里人哀れと思ひければ、如何に聞召せ、我々一日の營みだにも容易からねば、御身を養ひ奉らん事も叶ひ難し、さりながら餘り御痛はしく候へば、是に留り給ひて、晝は稲葉の鳥を追ひ、夜は小男鹿を拂ひて給はらば、此所に留め申さんと言ひければ、如何にも孚みて給び給へ、嬉しき人々の志かなと、涙を流し給へば、里人も情深く、柴の庵を設ひて留め奉る。己が食を分けて其日の飢をば助けてけり。日もやう〳〵暮れければ、里人は皆歸りて、物荒涼じき山陰に、只一人臥し給へば、秋風烈しく身にも染みて、露の手枕安からず、事問ひ交すものとては、虎狼野干の叫ぶ聲、耳に從ひ目に觸れて、昔の夢も結ばねば、何に樂む世の中ぞや。傳へ聞く唐土のちやうさうといへし者、世の交りを疎み果て、七珍萬寶を捨て、山中に籠り居て、悟の道を得るとかや。我は濁世の凡夫にて、觀念坐禪の力もなし、只一念の功力にて、安養淨土の營みには、佛の名號に若くはなしとて、高らかに念佛して夜を明し給へば、鳥類畜類も其聲にや靜まりけん、早稲田の稲も食ひ荒さず、晩稲の穂並

ちやうさう―未詳
いへし者―いひし者の訛

田面の如く―田面の此の如くの衍か
榮ふる―榮ゆるの訛

も其儘色づく秋となりにけり。里人是を見て、あら不思議や、我々終夜漉返を立てて鹿を追ひ、鳴子を引きて鳥を拂へども、荒れ果てにたる田面の如く、初めてかやうに榮ふる事、御身の惠みと覺えたり、是菩薩の化身なりとて悅ぶ事限りなし。漸うに孚みけれども、粟の飯稗の粥にて貯へ置ける物もなし。晝は來りて慰め奉り、畑を打ち稲を刈り、御目にかけ日數を送り給ふなり。

或日の事なるに、柴の庵を立ち出でて、田面の中道を踏み分けて、落穂を拾ひ、袖に入れ、霜の下草打ち拂ひ、うつらふ菊を摘みためて、昔の事を思ひ出で、今の浮世を慰みて、四方の梢を眺め給ふ。錦彩る山の端は、染むる時雨や厭ふらん、雲井を渡る雁音は誰が玉章や掛けつらん、忍ぶ甲斐なき故里も、今更思ひ出でけれども、一度厭ひし浮世なれば、立ち歸るべき心地もせず、柴の樞の屢々も、住めば都の心地して、日も暮れ方になりぬれば、ありし庵に立ち歸らんとし給ふ處に、何處とも知らず、雛鶴一つ飛び來り、澤邊の小田の片淵に降り居つゝ、漁してこそ居たりけれ。宰相熟々と見給ひて、あらゆゝしの鳥の姿かな、費長房といふ仙人は、鶴の翼に宿をとり、虛空を翔る例あり、衛の懿公と言ふ者は、鶴を愛して一生を暮すとかや、我はせめて野鳥の鶴を愛しつゝ、今

壽命せんくわ―せんくわは遷化か

日の憂き日を慰まんと、岸の隱に佇みて、驚かさじと見給ふなり。かゝりける處に、男子一人堤傳ひに忍び寄り、天の網を引延へて、彼の鶴を手捕りにして、首を捩ぢて、羽交の下にぞ敷きにけり。無慙やな雛鶴は、今まで虛空を翔り、水を渡り、思ふ事の有りけにも無きに、彼の男に生捕られ、今を最後の一聲は、壽命せんくわと聞えたり。宰相是を聞き給ひ、只今の鳴く聲は、千年の鶴命終ると悲めり、是を聞きながら目の前にて、殺さん事我殺生となるべきと思しければ、するゝと走り寄り、如何に御身は、何とて其鶴をば取りて、害し給ふぞや、我に得させ候へ、親の孝養に放つべしと呼はり給へば、男子聞きて呵々と打ち笑ひ、和殿は何者なれば、偶捕りたる此鶴を、得させよと乞ふこそ不思議なれ、我は此里の傍に住む獵師なるが、明暮江河の鱗を漁り、山野の獸を捕りて、一生を過ぐるなり、此四五日は如何したりけん、沖の鷗、磯千鳥の、一つも捕り得ずして、妻子が飢に臨みしなり、今日偶捕りたる此鶴は、天の與へと思ひしに、くれよと言ふこそ心得ね、活けて置くにこそ人の怨みも有るべけれと言ふまゝに、鶴の細首引き延べ、己が小脇に引き敷きて、力を出して締めたりけり。宰相愈悲しく思召し、獵師に取り付き、暫く待ち給へ、假令殺し給ふとも我が言ふ事を聞き給へ、釋尊一代の御法にも、人間と生れんもの、五戒を保ちて、佛果を得る、殺生、偸盜、邪婬、妄語、飲酒戒是也、上代の事は扨置き、五百戒も保ち給へども、末世濁亂の我々は、一戒をも保ち難し、それを如何にと言ふに、先づ偸盜戒は盜人の事、手を出しては取らざれども、欲しきと思ふ妄念は、日々夜々に絶え難し、此執著の盡きざれば、偸盜戒も破るなり、邪婬戒は夫婦最愛の事なれば、俗體にては保ち難し、妄語戒は虛言を言ひ、人の交情を避くる事、さがなき人に交れば、是も保つに難かるべし、飲酒戒は酒を絶つ事、上一人より下萬民に至る迄、悅びの處には酒を以つて富貴をなし、哀傷憂への座敷にも醉に化して忘るれば、是も在家は叶ひ難し、其内殺生戒を第一として、殊に是を戒め給ふ、御身如何なる果報にて、世の營みも多かるべし、生きたるものの命を取り、明日をも知らぬ露の身を、助からんと思ふ心の罪深さよ、其上鶴は千年の齡を保ち、人間には勝りたり、假令我身は鶴に代りて死するとも、助けて給べと宣へば、獵師愈腹を立て、我は賤しき者なれば、五戒も十戒も辨へず、只價もいらぬ魚を漁り、人も咎めぬ鳥を捕り、調味して食ふ時は罪も報も覺えぬなり、御身の命に代り給ふとも、我が餌食ともならばこそ、由なき人に見付けられ、時を移して妻や子供の待つべきに、こゝ放し給へと怒りけれ

ば、宰相聞き給ひ、實に道理と思へども、昔も去る例あり、釋尊の昔、薩埵王子と言ひし時、御懐の中へ山鳩一つ飛び入りぬ、後より白斑の鷹追ひ來り、其鳩出し給へとせめければ、力及ばせ給はず、鳩の代りに御身の肉を切りて鷹に與へ給へば、流石鷹心ありて、御志の難有さに鳩を助けて歸りしなり、其善根にて、一代の教主釋迦牟尼佛と生れ給ひ、鷹も優しき心にて、成佛したると說かれたり、御身殺生し給ふ事、五逆の罪には勝れども、今一念の慈悲心にて無量の罪を滅し、極樂世界に生れ給ふべし、鶴の代には我重代の守なれども、是を參らせんとて、肌にさしたる金作りの刀をこそ與へ給ふ。扨元より慾心深き者なれば、莞爾と打笑ひ、此刀を代なしては、一期の貯蓄あるべきと思ひければ、今日より獵師を止むべきなり、鶴を御身に參らするとて、急ぎ我家に歸りけり。宰相嬉しく思召し、鶴を抱き取り、汝心あらば物を聞け、大きよせんちよにいづれは獵師の憂へ有るとは此事ぞや、唐土の鳳凰は聖人の時世に出で、賤しき者の見る事なし、汝は日本の鳥の王として、此淺澤に降り居つゝ、捕られけるこそ淺ましけれ、今より後人なき島に下り、千町が野邊に求食して、人近づかば飛び去り、小田のかたへの稻垣は、天の網と思ふべしと、能く〳〵せめうを含めつゝ、鶴を放ち給ふなり。彼の刀と申すは家に傳

大きよせんちよ―大靈千町か

せめう―未詳

はる重寶なれば、乞食非人の後までも、肌を放さじと持ち給ひしかども、慈悲の心を先として、獵師に與へ給ひし御志、例少き善根なり。宰相暫く鶴の後を見送り給へば、鶴も心ありけるにや、後を見返り〳〵て雲路遙かに上りければ、嬉しく思召し、柴の庵に歸り給ふ。明くる日の夕暮に、さもやんごとなき上﨟の、下女一人連れて來り、此庵の内に案内申さんとこそ呼ばはりける。誰なるらんとていで給へば、年の程二十ばかりなる女房の、濃き紅の五つ重に、綾の袿に顔隱して立ち給ふ。宰相御覽じて、あら淺ましや、如何なる變化のものなるぞや。かゝる山中に斯樣の人の來るらん事、思ひも寄らぬ事なれば、身の毛も彌立つて覺えけれども、臆したる氣色もなく、如何なる人ぞと問ひ給へば、女房立ち寄り、我は都の者にて候ふが、故なき人の妬をうけ、何處ともなく出でけるが、焚く火の光につきて、この處に迷ひ來りたり、一夜の宿を貸し給へと申しければ、宰相聞召し、よし何處の人にてもおはせよかし、此處は人里遠き處にて、我ならで住む者もなし、夜更けぬれば鹿獸の凄じく、嵐烈しき山彦は、雷の如くなれば、いかでか明かさせ給ふべき、何處へなりとも、御志の方の侍らば、送りて參らせんと言ひければ、女房聞きて、いやとよ、何處を終の住所とも定めず、賴むべき方も有らざれば、ひらに一夜を明かさせて給び給へ、野邊の千草の葉毎にも、露の宿りは有るものを、森の茂みの木隱れは、翼の宿となるぞかし、ましてや御身は世捨人の身の、問ひ寄るこそは他生の緣、庵の内に叶はずは、軒端の下の轉寐に、何か無情くましますと、怨み顔に見えければ、宰相も流石岩木の身ならねば、餘り見苦しき庵の内の恥しさに否とは申しつれ、さらば此方へ入らせ給へとて、庵を開きて入れ給ふ。狹き藁屋の内なれば、女房二人をば、奥の間に宿し、我身は樞の前に臥し給ふ。其夜は殊に物淋しく、軒端を誘ふ秋風、肌はいとゞ狹筵の、露微睡まんよしもなし。藻屑の烟焚きすさび、世の憂事を語り給ふ。女房言ひけるは、御身の容貌を見奉るに、いかさま通常人とも覺えず、流竄人にてましますか、自らも故ある者なれば、今日より是に止め置き、妻と定め給ふならば、寶を與へ奉らんとぞ申しける。宰相怪しく思ひながら、元より誠の道心ならず、身の貧なるに從ひて、世の謗をつゝましく、暫しは隱れ給へども、未だ御年廿一、盛の花の山櫻、雲に隱るゝ風情にて、誘ふにつけて色に愛で、熟々と見給へば、翡翠のかんざしたをやかに、青柳の風を含める裝ひ、打項低れたる顔容は、雨に靡ける海棠の、眠れる花の姿なり。我古の清涼殿の御遊の時、數多の女御后を見しかども、かゝるめでたき貌はなし、唐土皇帝の楊貴

妃は、一度笑めば百の媚、君が心を迷はして、世の政道を亂すとなり。我も浮世を厭へども、心は空に憧れて、覺えず寄り添ひ給ひつゝ、苔の筵を褥とし、早稲田の稻を枕にて寢亂髪の打匂ひ、梅の小枝に降る雪の、消えかゝりたる肌の色、いをねもならはぬ下紐を、解けて寢ざりし宵の間の、悔しかりける睦言は、まだ何事も語らはぬに、遠山寺の鐘の聲、物凄じく聞えければ、孀烏の浮かれ聲も、今宵しもさかしらと聞きなし給ふ。誠に昨日までは、秋の夜の長き怨みの床の上、今日は引きかへて、千夜を一夜と願ひ給へども、軒端の山に横雲の、引く月星の光も旭日の影にそばひ、夜はほのぐゝと明けければ、訪れ通ふ者もあらねば、扃の簾掲げつゝ、尙熟々と見給ふに、言はん方なくらうたけて、雅やかなる面影は、立ち離れん由もなし。

女房も心打解けて、下女に持せたる袋の内より、黄金千兩取出し、是にて萬計らひ給へと言ひければ、宰相悅び給ひ、今まで孚みし里人を近づけ、此由かくと宣へば、里人めでたき事なりとて、黄金を受取り、番匠數多呼び寄せて、御殿を結構に作り、衣裳を調へ、召使ふ男女數多揃へ、或は道具を拵へ、俄に長者となり給ふ。此事里々に隱れなかりければ、處の侍は申すに及はず、土民百姓に至るまで、酒肴を調へて、參るものもあり、時の景物なればとて、果實を數を盡して、我劣らじと參りつゝ、今日より御内の者となり侍らんと、敬ひける事限りなし。其品々の引出物、絹小袖を賜はる者もあり、金銀を賜はりて、悅ぶ事は限りなし。去程に其年も暮れ、新玉の春にもなりければ、其國の守護宮崎左衞門督といふ人、身内外様の者百餘人召し具して、朝鷹狩に出でにけり。裾野の原の勢子の者、二行に立つてぞ狩り廻る。峯とも谷とも分かずして、雪間の草を栞とし、尾上の松を目に掛けて、四方の谷より狩り上る。岩を飛ばせ、古木を拂ひければ、雉、山鳥は言ふに及ばず、野干臥猪の床までも、隱れん方もなかりけり。大鷹小鷹の飛び違ひ、中有にて組んで落つる處を、押へて取るものもあり、兎、狢を目に掛けて、弓矢を取つて追ふもあり、太刀、刀を拔き持つて、猛りてかゝる猪を向様に打つもあり、巳の時の初めより午の刻の下りまで、打留めたる鳥獸、數ふるに遑あらず、面白かりし見物なり。

各立歸らんとせし時に、春雨しめやかに降り注ぎければ、思ひ〳〵に木蔭に宿を借り、岩の洞に立ち隱れて、雨を凌ぎて居たりけり。宮崎殿は、馬に乘り谷に降り給ふが、とある山陰に烟の立ち上りければ、人里やあると、只一人駒を早めて行き給ふ。堀の船橋

打渡り、内の體を見給ふに、四重に塀をかけ、屋形の棟數數多あり。あら不思議や、我領内にかゝるゆゝしき者の有りけるぞや、如何なる者の住むやらんと、小柴垣の陰に休らひて、暫く佇み給ひける。宰相も北方も見る人ありとも知らず、南面の廣椽に立出でて、庭の花を見給ふに、梢色添ふ初櫻、かつ散り初むる眺めつゝ、北方取敢へず、

かぞいろの育てあげにし甲斐もなくいたくも雨の花をうつおと

と口吟み給へば、宰相殿も思ひ續けて、北方を熟々と見給ひて、如何ばかりの事か思ひ出で給ひけん、

初櫻いろにそめぬる春雨は花の紐とくつまにぞありける

と、打詠じ給へば、北方打笑みて、

春雨は同じけしきにすさめどもあだにも散りし花の色かな

と戯れ給ふを、左衞門督熟々と見て、あらぬ思ひのつき添ひて、立ち忍ばん由もなく、さし現れて覗き給へば、

かぞいろ―父母

鶴のさうし中

北方御覽じて、あれは誰なるらん、あら恥しとて、宰相諸共に内に入り給ふ。宮崎殿は今一度見る由もがなと佇み給ふを、人々參りて、やう〳〵雨も晴れ候へば、歸らせ給へといさめけれども、只茫然として、物も更に宣はず、御心地怪しきとて、駒の口を取り、御腰を抱き、御内の人々前後に立ちて、我家に歸り給ひけり。今は只管戀の病と臥し沈み、せん方もなく思ひければ、御内の侍に田邊の七良とて、萬賢しき者の有りけるを呼び出し、言ひいだすにつけて便なけれども、狩場の山の主の女を、一目見しより、其面影の身に添ひて、かゝる病となりけるは、いかゞして薫る烟の胸の中、思ひ消えなん謀を、よきに計らひて得させよと有りければ、七良承り、是は理なき事を思ひより給ふものかなと、思ひながら、さも言はゞ、いとゞ物病にやなり給ひなん、暫し慰めばやと思ひ、それこそいと易き事なるべし、男女の習ひ、慕ふに靡かぬ者はなし、我々が伯母に内侍の局と申すものは、元は都に宮仕して、萬優しき人なるが、此三ヶ年は、此

其匂ひなつかしけれども―此下に「枝のさまこちたく柳は」などいふ文句脱落せしなるべし

處の傍に、さる者と語らひて侍るが、常に彼の家に參る由を承る、此人を呼びて、事の心を尋ね給へ と申しければ、宮崎悦び給ひ、それこそ然るべき神の御引合せと覺えたれ、急ぎ呼び寄せ侍れと聞えければ、やがて使立てられけり。局參りて、何事の御用なれば、自らをば召し給ふぞや。宮崎殿枕元近く呼び寄せ、扨も此山の彼方に、いみじく作りし家居には、如何なる者の住みけるぞや、主の名をば何と云ふぞと問ひければ、局承り、自らも去年の冬より折々參り候ふが、主の御名は誰と知りたるものも候はず、北方も、去年の秋迎へ給ふと承る、誠に家榮えて、今長者とぞ申しける、只天よりの降人のやうにこそ言ひ習し侍ると語りければ、宮崎聞き給ひ、扨も其北方は年は何歳になり給ふぞや、さこそ情の深からん、覺束なしと問ひ給へば、局承り、されば御年は二十ばかりにてもや候ふべき、容顔の美しき事中々賤しき口にて言ひ難し、我古都にありし時、數多の女御更衣を並べ置き、花の譬にせられしが、御名は定かに言ふに及ばず、先づ初春の梅は雪の内より咲き出でて、其匂ひなつかしけれども、枝たをやかなれども匂ひもなし、花もなし、されば何れによそへても、思ひ所はあるものを、此人と申すは、梅が香を櫻の花に匂はせて、柳の枝に咲かせても、春の過ぎん事をのみ、見る人

世を亂れしー世を亂りしの誤なるべし
よも勝るべしー よも勝るべきとありたし

惜までや有るべき、唐土の幽王の世を亂れし褒姒が姿、越王勾踐の再び國を覆されし西施の面影と言ふとも、是にはよも勝るべし、聲いと匂やかに、愛敬ありし眦は、如何なる島の夷なりとも、心を迷はさでは有るべき、あはれ殿の御目に掛けばやと、言葉に花を咲かせて申しければ、いとゞだに堪へ難き物思ひに、此物語を聞くよりも、忍ぶべき心もなく、扨も其人を如何にも申し、媒介して、同じ枕の轉寐こそ叶はずとも、此思を告げて給び給へ、さらば御身の爲もいかでか疎略に思ふべき、是は當座の引出物なりとて、側にありし綾の小袖を取らせ給へば、局嬉しく思ひながら、主ある人にいかゞして言ひ寄らん、由なき事を語り出し、行末いかゞあらんと思へども、さらば先づ御文を遊ばせ、便も有らば、御目に掛け侍らんと申しければ、宮崎硯を取り出し、紫の薄樣に梅花の匂を焚き染めたるに、思ふ心の底までも、細々と書き流し、せめて一筆の御返事もがなと、涙を添へて渡し給へば、局文受け取りて、急ぎ我家に歸り、色も妙なる花を折り、宰相殿へ參りける。北方出で給ひ、あら珍しや、如何なる風の誘ひつゝ、思ひ寄らずの花の色、懐しき局かなとて、奥の間に召し入れて、先づ酒肴を調へて饗應し給ふ。局申しけるは、此程は彼方此方と打紛れ、御訪問も絶え果てて、仇なる者とや思すらん、只今參る

事別の子細にて侍らず、自ら住み荒したる蓬生も、春は隔てぬ花の宿、夕つ方入らせ給ひて、朧月夜の終夜、慰め奉らんと申さん爲に參つて候ふと申しければ、北方、誠に切なる志にて侍れども、假にも立ち出でたる事もなし、又殿の心も取り難ければ、叶ふまじきと仰せけり。局たくみし志違ひて、斯くと言ひ出すべき言葉もなく、暫し浮世の物語しけるが、懐より玉章を取り落したる體にて、これ〳〵御覽候へや、只今參る途にて、此文拾ひ候ふが、いかさま故ある人の手遊やらん、やうがましく認めたり、御慰みに御覽候へと申しければ、北方受け取り給ひ、開きて見給ふに、誠に御言葉を盡しつゝ、奥に一首の歌あり、

はる〴〵ととめよる宿の櫻花したしからぬも隔つべきやは

と有りければ、面白き歌の心かな、古き言葉に、遙かに人家を見て、花あれば入る、貴賤と親疎を論ぜずといふ詩の心を引き直して詠みたる、いかさま是は又初々しき人に思ひ亂れたる人の文なるらん、見るにつけても痛はしく侍るなりとて、局に返し給へば、局便宜よしと思ひて、よし〳〵誰人の文なりとも、御手に觸れさせ給ふ事、他生の機縁深かるべし、捨文の返しと思召し、只一筆遊ばして、自らに賜はれかしと申しければ、戯

遙かに人家を見て云々一朗詠「遙見人家有花入、不論貴賤與親疎」

言を言ふ人かなと打笑ひて、兎角紛かし給へば、重ねて言ひ出すべき由もなく、日も暮れければ、またこそ參るべけれとて立ち歸る。宮崎殿に斯くと申しければ、扨は我文を御手に取り見給ふかや、歌の心を感じ給ふ上、などか御心の無情かるらん、又明日も參りて御返しを取りて給べと聞ゆれば、局も如何にもしてと思ひければ、それより日毎に參りて、包む氣色もなく、初めよりの事ども仄かし、あはれ浮世の習ひに、人の心を慰め給はゞ、賴む方なき我身までも、寄る邊も波の助船、こがれて消えん泡沫の、怨みの程も盡くべきか、其上思ひ染めし憂人は、此國の主なれば、一つは情と言ひながら、處にては處に從ふ習ひなれば、もし一筆の御返しもましまさずは、誰か其怨みを忘るべきと申しけれども、人の聞かんも憚あり、今日より局參るべからずと、簾中深く入り給ふ。力なく立ち歸りける。宮崎殿に申しけるは、如何なる雲の上人も、情の道は知るものを、此人は眉目容貌こそ生れつきたらめ、心はさすが田舍人、物をも知らぬ人なれば、言葉の色をも聞き知らず、自らが使には、叶ふべきとも覺えず、只思召し留り給へかし、面目なく候ふと言ひ捨てて、走り歸りければ、今までは使の歸るを便にて、少し心も慰みけるに、賴み寄るべき緣もなし、せん方なく思しければ、田邊の七良を呼び出し、もしやと

賴みし吾戀の、空しくなるこそ無念なれ、我領内にありながら、上も恐れぬ女は、押寄せて奪ひ取り、無情き心に思ひ知らせん、はや打つ立てと怒り給へば、七良由なき事と思へども、氣色變りて見えければ、尤も然るべき御計らひなり、某一人なりとも忍び行き、奪ひ取らんはいと易き事なれども、彼もさすが故ある者と聞えければ、欺くに及ばず、軍勢を催して、一方の山より攻め下り、東の方を開けておくならば、定めて夫婦郎從も落ちて行くなるべし、行かん處を道に兵を伏せて、男をば切つて捨て、女をば抱き取り、この御館へ齎ひ入れ奉らん事、今日の日を過すべからず、御心易く思召せとて、賴もしげに申しければ、宮崎悦び給ひ、片時も早く見奉らんに、軍勢を催せとて、きらの兵三十八騎、雜兵合せて百五十騎の軍兵を揃へ、今日の暮方に押寄せんとて、馬に鞍を置き、庭騎するものもあり、太刀、刀を磨ぎ、弓の弦を食濕し、日の暮るゝをこそ待ちたりけれ。此事隱れなかりければ、里へ急ぎ宰相殿に參り、只今押寄せ申すと告げければ、宰相は夢にも知らせ給はず、此方に云々と語り給へば、元より我故と思召し、初めよりの事ども語り給ふ。力なき次第なり、誠に御志難有く侍れども、我故に御身の命を失ひ給はんも心憂し、一先づ彼の方へ行き給ひ、人の心を慰めて、夢の浮世を暮らし給へ、御心

きらの兵―綺羅の意にて精選の武士をいふ

變らずは、二世の契なりしと聞きければ、愚なる人の言葉かな、賢臣二君に事へず、貞女兩夫に見えずと申す事の候へば、一度のたのしみ御身を捨て何處へか行くべきぞや、もし軍勢の寄せ來らば、御身を先に立てて、切つて出で、思ふ儘に軍して、叶はぬ時は引き籠り、刺違へて死出の山三途の川を、手に手を取りて行くならば、何の恨事か候ふべき、其上千萬餘騎寄せ來るとも、自らが謀にて追ひ拂ひて見せ申すべし、太刀も刀もいるまじとて、一間所に引き籠る。さもゆゝしき姿にて、寄する敵を待ち給ふ。去程に日も西山に傾けば、時分よしとて、宮崎を先として、百五十騎兵等、太刀、薙刀の鞘を外し、さしも嶮しき山路を、谷も谷とも崖とも言はずして、三方の峯に馳せ上り、館を目掛けて弓取り直して、下り拳に差詰め引詰め散々に射たりけり。其中に田邊の七良進み出で、味方の軍兵に向つて言ひけるは、方々はいかゞ心得給ふらん、弓矢を留め給へ、是は聊の怨言せんため、此處へ寄せ來りたる人を威さん其爲の謀なり、よし敵を射殺さば勳功は扨置き、かみよの御不審を蒙るべし、今日の軍の大將は此七良が承りたりとて、只一人門外まで馳せ來り、大音揚げて言ひけるは、只今こゝに寄する事別の子細に候はず、此山中に隱れ給ひて、夜討、强盜を業として、いみじき有樣を聞召されて、

二世の契なりしと聞きければ―「二世の契なりと聞きければさのみ力も」とし給ふなど」などの文句脱落せしなるべし

一度のたのしみ―一度たのみしの衍か

寄せ來りたる人―「たる」の二字不用なるべし

かみよ―かみがみ(神々)の誤か

討つて參らせよと、忝くも宣旨を帶して參りたり、誠は身の咎の有るならば、尋常に腹を切り給へ、さも無くは主に出でて、其理由を申し開き給へと呼ばはりければ、籠り居たる若黨ども驚き騷ぎ、寄手は雲霞の如く近づきけるに、何とて臆し給ふぞや、はや打出で給へと犇きけれども、宰相殿、北方に諫められ、少しも驚き給はず。暫くありて北方、はや敵の寄せ來りたるやらん、物騷しく聞えけるぞや、いでさらば防がんとて、何時よりも尋常に出立ち、皆紅の扇を持ち、廣椽に立ち出でて虛空を招き給へば、宮崎是を見て、人々靜まり給へ、わが思ふ敵の立ち出でて、此方を招くは降參すると覺えたり、御迎へに參れ、七良と、獨笑して悅びけり。あら不思議や、俄に山風烈しく吹き、黑雲一群棚引きて、館の上に立ち覆ひけるが、雲の內に異類異形の物こそ見えたりけれ。眉目よき女房の具足、冑を鎧ひつゝ、弓矢を持つて進むもあり、夜叉、羅刹の形にて、矛を持つて振るもあり、鷲、熊鷹の人業に、劍を植ゑたる如くにて、敵の前に飛び行きて、弓の弦をはせ切るところもあり。

蝶、蜻蛉は甲冑の隙間を狙ひ、眼に塞りて、さしもに猛き武夫も、働くべきやうもなし。寄手の人々呆れ果てて、心も消え、そのまゝ絕入る者もあり、退く事も叶はず、まして進む

御迎へに參れ七良と—「御迎へ參れと七良は」の誤なるべし

弦をはせ切る—弦をば切るの衍か

に及ばねば、馬諸共に立竦み、我助け給へと、天に祈誓し念佛申し、さも哀れなる有樣なり。

されども田邊の七良は文武二道の者なれば、大將の前に馳せ歸る。さればこそ初めより由なき事と思へども、仰せを背き難きにより、是まで御供申すなり、天より降人と聞きしが、僞ならず覺えたり、如何樣佛神の化身なるべし、佛の怒るを鎭むるには、心經に若くはなし、心の內に祈念して、御經を讀誦し給ひて、惡魔を鎭め給へと、高らかに讀みければ、次第々々に雲晴れて、變化のものも失せにけり。人々悅びて危き命助かり、我先にとぞ歸りけり。館に歸り誰々討たれたると思ひ給へば、殊に御經の功德にや、手負うたる者一人もなし。宮崎悅び給ひ、我邪の働きして、かゝる奇特を見る事よ、偏へに佛の方便なれ、是を菩提の種として、今日より浮世を厭ひつゝ、佛道を願はんとて、日比貯へ置きたる財寶を、貧なる者に與へ、慈悲第一の人となり後生善所の營みは、難有かりし發心なり。惡に强き人は必ず善にも强き事、今に始めぬ事ども なり。去る間宰相殿は不思議の難を逃れ給ひ、北方に宣ふやう、初めより御身は尋常人とは覺えぬに、只今の事どもは人間の業ならず、いかさま佛の化身と拜み奉るなり、此上は包まず名を名

告らせ給へと有りければ、いやとよ、自らが計略にあらず、御身心素直にして、慈悲深き人なれば、佛神の力を添へ給ふ事の難有さよ、いざさらば自らが父母のもとを見せ奉らんとて、夜に紛れ、只二人忍び出で、山路遙々と分け入りて、嶮しき谷に下り給へば、數千丈高き巖より白き布引延へたる如くなる瀧の白波漲りて落ち、岸根の松は枝乘れて、心凄き苔の細道踏み分けて、片山際の洞の中へ入ると思へば、宮殿樓閣は甍を竝べ、七寶莊嚴の眞木柱、金銀の瓦を敷き竝べ、咸陽宮の大内裏と申すとも、是にはよも勝らじと思ひつゝ、踏む足もしどろにて、めでたう遙かに入り給へば、内よりも青侍官女と思しき者、我先にと微語き、北方に取附きて、珍しくも入らせ給ふものかなとて、前後に立つて介錯申し、奥の間に請じければ、又公卿、殿上人と思しき人々走り出で、宰相殿に色代して、是も同じ座敷に直し、煌々しき體なり。其中に女御と思しき人、宰相殿の前に寄り、萬恥がましき我姫を、留め給ふ御志、何時の世にかは忘るべき、疾く入らせ給へと申すべきを、一日々々と打過ぎ參らせ、明暮御姿を見まほしく思ひしに、遙々是まで渡らせ給ひ、御見參に入り奉り、自らが心の内如何ばかり嬉しく侍ると、御推量あるべき、それ〳〵と宣へば、女房達承り、黄金の銚子に盃取り添へて出でけ

としをけ―侵陰の誤か

れば、山海の珍物に、國土の菓子を調へて、三々九度の土器は擧ぐるに暇こそなかりけり。かゝる不思議の處に入らせ給ふ御慰みに、管絃をして聞かせ奉らんとて、琵琶、琴、和琴、簫、篳篥、思ひ〳〵に音を取りて、樂の數をぞ盡しける。昔としをけといふ者、唐土にて習ひ傳へし琴の爪、蟬丸といふ世捨人逢坂山に引き籠り、琵琶を彈ぜし撥音、用明天皇のいにしへ上の空なる戀をして、さんろと呼ばれし時、思ひを晴らす雨の中に、音を取り給ふ笛の音も、是にはいかで勝るべき、只是極樂世界にて菩薩聖衆の歡喜の時、音樂の曲難有かりし事ども なり。

かくて夜も明方になりければ、今宵の御引出物參らせんとて、黄金千兩、銀の盆に積み、綾羅錦繡の卷物を、山の如くに積み上げて、御前に差置き、夜明けば人目つゝましければ、御名殘惜しく候へども、はや〳〵歸らせ給ふべし、我隱家を初めてお目に掛くる事恥しく候へども、此後は常に入らせ給へと、暇乞して出で給へば、それ〳〵送り奉れ、承ると申して、虚空を翔る車に、二人の人々乘り給へば、引出物の數々を鳥の翼に乘せ、或は力士に負はせて雲に乘せてぞ送りける。片時の程にて、ありし館に送り著き、皆々立ち歸りけり。愈其家繁昌して、近國他國のものども、附き從ふ事限りなし。或

時北方宣ふは、申すにつけて恐れなれども、今は父母の許へ歸るべきと思ふなり、假初に馴れ初めて、此年月の情の色、生々世々に忘るまじ、御名殘惜しく候ふとて、打伏して泣き給へば、宰相聞召し、あら思ひ寄らずの御言葉かな、後の世かけてと思ひしに、仇なる人の心ぞや、我淺ましき折に問ひ寄り給ふ志、今更何に見落され、捨て給はんとの言葉ぞや、よし〳〵それも力なし、御身の父母の有樣は、我等如きの凡夫の身を、見屆け給はんとも思はれず、されども御身は假に浮世に現れて、語らひ初めし睦言は、隔てぬ中と思ひしに、せめて三年も添はずして、殘り留る憂き程は、絶えて存ふべきならずと、泣き口說き給へば、北方聞召し、その御心の痛はしさに、今まで斯くとも申し得ず、我は誠の人間にあらず、「遂に添ひ果つべき身ならねば、先づ此度は立ち別れ、生を變へて、誠の妻となるべきぞや、御形見の一筆を賜はり、それを知邊とし尋ね給へ、自らも尋ね奉り、思ふ事なく暮すべし、父母の許にて聞召されし酒は、不老不死の藥にて候ふ、面影も變らず、命の終る事も無し、錦金襴の卷物は、如何程裁ちて取り給ふとも、盡くる事も有るまじ、黃金は使ふに從ひて、跡見ゆる事ならじ、いつまで語り侍るとも、名殘は愈增さるべき、暇申してさらばとて、廣椽に出で給ふを、御袖に取りつきて、暫し留め給ひければ、我をば誰と思召す、澤邊にて獵師に捕られし雛鶴なり、極まる命を助け給ふ、其恩德を報ぜんため、人間となりて來りたり、あら恥しや我身かなと、もとの姿を見えんとて、虛空に飛びてぞ歸りける。宰相はいとゞ哀れに思ひつつ、此二年の情の程、思ひいづれば懷しく、後を見送り、只茫然と立ち給ふ。

あら恥しや我身かな―「あら恥しの我身かな」の誤にや

鶴のさうし下

偖宰相はありし閨に立ち歸り、枕並べし床の上、打著せし中の香の唐衣、今は獨の手枕は、寐覺のたびに別れつゝ、夢にも姿見々えねば、遣方もなき思ひの程、せめて慰みには、身内の者を近づけ、里人を語らひ、春は花の下にて日を暮らし、秋は月の前にて夜を明かし、年月豐かに住み給ふ。其比三條の内大臣と申すは、君の御伯父にて時の覺え、他に異にして、家の繁昌肩を並ぶる人もなし、されども御子の無き事を歎き給ひ、天に祈誓し給へば、御納受まし〳〵て、北の御方懐胎し給ひて、程なく姫君を儲け給ふ。されば天より具ふ形なれば、耀く玉とも申すべき。父母悦び給ひ、御命長かれとて、玉鶴姫と名づけつゝ、數多の乳母をつけ、齋き傅き給ふ程に、愈光増さりけり。幼き時は其心もつかざるが、成人らせ給ふにより、左の腕の肘のかゝりまで身に添ひて、御手自在ならず。父母御覽じて、大人しくなるならば、さもあらじと思ひしに、年月に從ひて、斯樣に取付きてある事は、胎内にての事なるか、産み落したる其時に、荒く當りし故なる

みな〳〵の人〳〵なみ〳〵の衍か

かやと、藥を與へて揉み合せ、色々養生し給へども、其甲斐なくて憂き事と思ひながら、世の人の見る事ならず、只眉目容貌の類なきをば、かたへの公卿殿上人聞き傳へ〳〵、思ひを掛けぬ人も無し。やう〳〵十三になり給へば、父母宣ふやう、姿かゝりより心樣も優しければ、女御に供へんと思へども、手の叶はぬ事の恥がましければ、御目に掛くるに及び難し、さればとてみな〳〵の人に見せんも心憂し、如何せんと歎き給ふ折節、關白殿の御子に二位の中將と聞えし人、此姫君を思ひ掛け、人して斯くと宣へば、内大臣嬉しき事と思召し、北方と談合せ、此年の八月には必ず參らせんと、御返しありて、其用意をぞし給ひける。

姫君は此事聞召し、父母に宣ふ、我は身にも不具候へば、何處へも參るまじ、只御暇を賜はれ、片山陰に引き籠り、佛道を願ひて靈山淨土に生れんと思ふなり、女御、后も此世ばかりの樂みなれば、羨しく思はれず、ましてそれより下の人に相馴れ侍らんとは、更に思ひも寄らずとて、歎き悲み給ふなり。父母もいとほしき姫君なれば、さのみ愛で諫めて、目の前の憂き別れも有らんかと思召し、兎も角も御身の計らひなるべし、さりながら御身偶々儲けし事なれば、片時離れて有るべきかや、我々世にある程は慰めて給び

給へ、是孝行の一つなり、偖亡き後は尚々頼み申すなりとて、二位の中將殿への營みも差置きて、其年も暮れ、十四の春にぞなり給ふ。雨の晴間の朝日影、長閑なりける花の色、うつろふ東の窓の前に、簾几帳をかゝげて、蕾める花に心を痛ましめ、散りぬる櫻に怨を添へ、思ひ〳〵に花の短册つけ給ふ。内大臣、

かく散るを見てはくやしきさくら花またくる春は待たじとぞ思ふ

北の方、

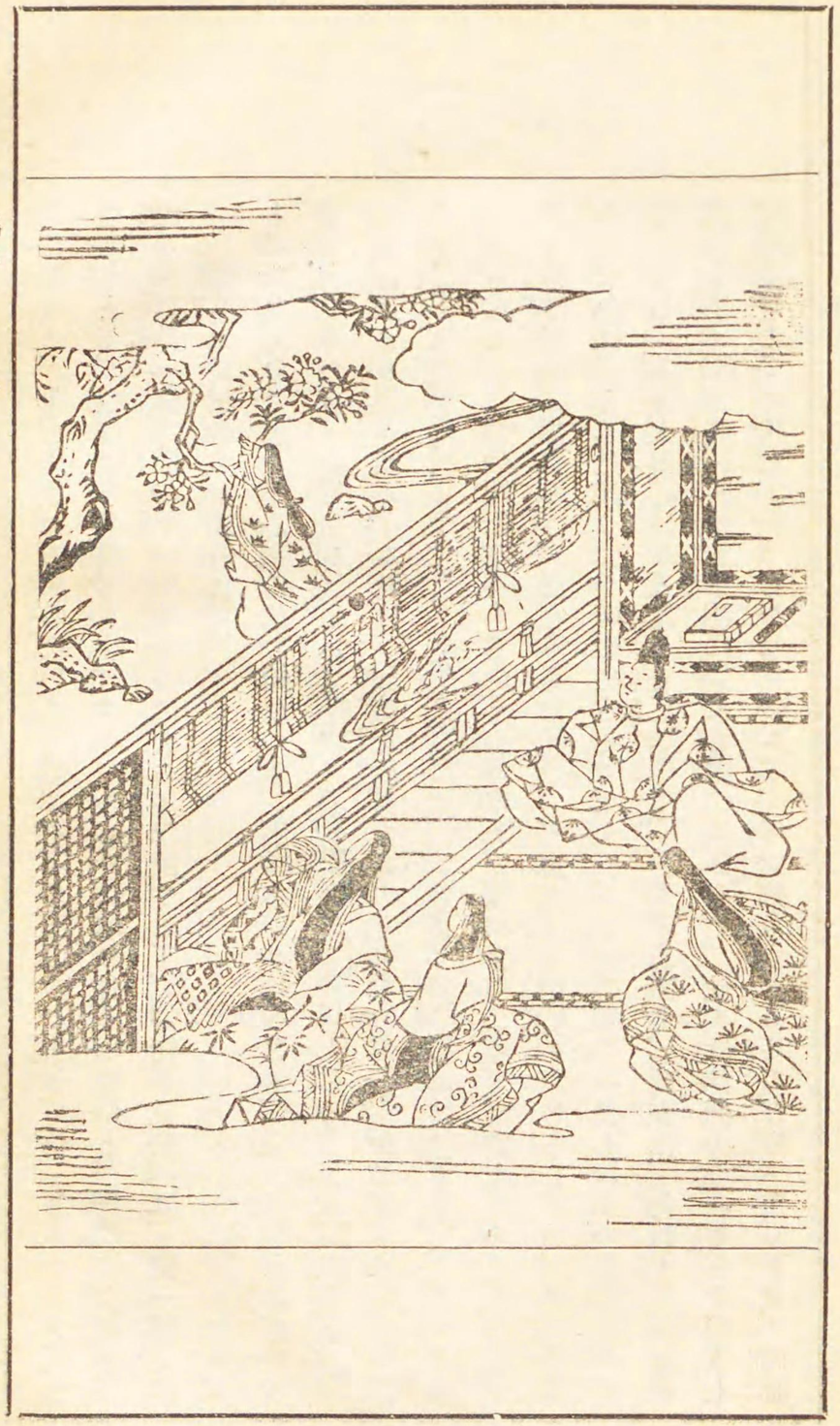
雨のうちにほころびそむる花の色朝日に散るぞしづ心なき

玉鶴姫、

あひいでし若木の櫻さかりぞと見せまくほしき花のいろかな

と詠み給ひければ、父母も怪しの歌の心かな、如何なる思ひの有りて、かやうに歌をば詠みけんと思ひながら、心を問はん由もなし。

各の歌を、姫君の筆取りにて、短册に書き留め、庭に下り立ちて、櫻の枝を引き撓めて、結び付けんとし給ひし、其處の枝強くして、姫君の取り付き給ふ左の御手を引き上げてこそ見えたりけれ。人々驚き、いかに御手の痛み候ふやとて、庭へ走り下り、御肌



を見奉るに、附き添ひたる腕の延びさせ給ふぞ不思議なり。父母、傅、乳母、めでたき事なりとて、悦びける事斜ならず。さりながら身に取り付く事もやと、御肌に白粉の煉薬をつけ給へば、腋の下に玉章あり。あら不思議やとて、押開き見給へば、只一行、

　　偽らぬ言葉の末を頼みにて

とばかりあり。愈々不思議に思ひ給ひつゝ、姫君に尋ね給へども、前の世の事をばいかで知召さるべき、自らも知らず候ふとて、顔打赤めておはしける。内大臣殿宣ふは、此姫は天より與へ給ふ子なれば、如何樣故ある人の再來なるべし、かゝる不思議の事どもを、下にて計らひ申さんより、ありの儘に奏聞し奉り、勅諚に任せて、兎も角も方付き侍らんとて、彼の短冊を持ちて急ぎ參内申し、初めよりの事ども詳しく申し上げ給へば、帝不思議に思召し、短冊を取らせ給ひ、打返し〳〵叡覽ありけるに、未だ新しき筆の跡なれば、もし見知りたる者やあるとて、大臣、公卿の御中へ出し給ふ。其比才學優長なりし、其後大將といふ人熟々と見給ひて、あら不思議や、此筆は、むねまさの左大將の一子、宰相右兵衛督が手跡に似たる處の候ふぞや、此人は慈悲の心を主として、七珍萬寶を非人に施し、いつしか其身衰へて、行方知らずなり侍るなり、年號を數ふるに

今年十五年に罷り成る、内大臣の姫は十四になるなれば、生れぬ先の事なるべし、彼の人世に無き事はよも有らじ、急ぎ尋ね給へと、奏聞申されければ、帝愈々不思議に思召し、さらば官人をもつて尋ねよとて、日本六十餘州に宣旨を下し、其國々の守護に仰せて、谷、峰、賤が庵まで殘る處なくぞ探しける。近國の官人は其日に歸りて無き由を申し、遠國の國司は五日十日を隔て、さやうの人は無しといふ。偖は此世に亡き身となるかやと、せん方なく思召すところへ、或代官の申しけるは、是より北山若狹の境の山陰には、天よりの降人とて、此十五年が間、富み榮えて侍るが、此人こそ怪しけれと奏しければ、偖はそれなるらんとて、急ぎ勅使を下されけり。其時の勅使は花園の左中辨とて、宰相の爲には從兄弟なり。彼の處に下り案内もなく入り給へば、宰相はいにしへ二十一にて世を厭ひ給ひし姿、少しもかはらざりければ、左中辨なじかは見損じ給ふべき、如何に御身はこの所におはするかや、此程さる子細ありて、秋津島が其中を殘る處なく尋ね給ふなり、はや〳〵參内あるべしとて、取るものも取り敢へず、馬に召されければ、宰相殿は夢にも知らぬ事なれば、以ての外に驚き給へども、勅使許し申さず、急ぎ都に上りけり。今までは世を厭ひし人なれば、五位の裝束召されしが、いにしへの

三位の宰相の装束にて、君の御前に出で給ふ。帝御側へ近く召されて、其後御物語ども暫く有りて、偖も此の手を見知りたるかとて、彼の短册を出し給ふ。宰相是を見給ひて、はつと思ひければ、時ならず顔に紅葉を散らし、其事となく涙浮びて、何とも御返しをば申さず、頭を地につけてぞおはしける。人々色を見て、偖は疑ふところなし、御前にて包み給はんも恐れなり、思合する事あらば、ありの儘に語り給へと、面々申し給へば、宰相申されけるは、偖此文は如何なる人の持ち來り、御前には留り候ふや、それにつき思合する事をも、御物語申し上げ候はんと宣へば、先づ御身の言葉を聞きて、此方にて申すべし、僞なく語り侍れと仰せければ、ありの儘に申さんと思へども、鶴の變じて契をこめたる事、誠しからぬ事なれば、少し僞の申さばやと思ひ、今は何をか包むべき、某貧しくなり果てて、身の置所なき儘に、此十五年以前より、片山里に忍び居て、明暮御經を讀み、後の世を願ひしに、何處とも知らぬ女性の來りつゝ、自らが妻となり、寶を數多與へけるが、明くる年の春の頃、我は誠の人ならねば、生を變へて夫婦となり、二世の契を結ばんとて、互の形見を取交し、其人の手遊は是に持ちて候ふとて、肌の守より、短册一つ取出し、御前にこそ置きにけり。人々あら不思議やとて見給ふに、

思召しければ―思召しけれどの衍なるべし

ふたゝび生れあはんとぞ思ふ

とあり。初めの短册と引合せけるに、紙も同じ紙にて、歌の言葉を讀み續くるに、

いつはらぬ言葉の末をたのみにてふたゝび生れあはんとぞ思ふ

と讀み合せければ、君を始め奉り、御前にあり合ふ大臣、公卿も、あつとばかり感じつつ、暫く物も宣はず。

やゝありて勅諚ありけるは、御身心素直にして、慈悲心深くある故に、佛神の御惠と覺えたり。内大臣それ〳〵明し侍れと仰せければ、初めよりの事ども、詳しく語り給ひける。かゝる不思議の事どもは、昔も今も末代も有るべき事とも覺えず、急ぎ吉日を選び祝言有るべきとて、昔の屋形をしつらひ、金銀の鏤めて、玉鶴姫を迎へ給ふ。姫君は世の人に見々えん事を、疎ましく思召しければ、此宰相とは前世の契の事なれば、などかは隔て有るべきぞや、何時よりも御心も浮きやかに、悦び給ふよそほひなり。宰相殿は見給ひて、昔契りし面影の、少しも變らざりければ、懷しとも愚なり。かゝる目出度き事あらじと、忝くも、君よりの贈物、大臣、公卿の捧物、山の如くにぞ積み上げて、門前には馬車の、所狹きまで見えたりけり。やがて官位を賜はり、左大臣まさあきらと

ぞ申しける。斯くて其年の秋に、北方たゞならずなり給ふが、月日にわづらひなく、明くる五月に、玉の如くなる若君の出で來給ひ、それより打續き姫君若君の數五人までこそ出で來けれ。何れも容顔勝れければ、或は后に立ち給ふ御方もあり、或は關白殿の婿にならせ給ふもあり、めでたしとも中々に、譬へん方もなかりけり。去程に大臣殿は隱里にて羞めける不老不思議の藥の酒の威德にて、御齡百年に餘り給へども、姿形は老いもせず。元より北の御方は天に稟けたる事なれば、御年重なるに從ひて、花の顔容麗しく、御惠みの深き事、水に影さす月の如し。されば聖人一人世に出づれば、萬民心素直になりて、いと靜謐なれば、遠國波濤も穩かにして賴みあり。民の竈も賑しく、運ぶ貢の道直に、關の閉さぬ御代となりにけり。是を以つて思ふに、只假初にも夫婦の緣を結ぶ事、前世の契淺からず、後の世かけて賴もしく、神の定めし中なれば、互に隔たる心もなく、交す情の末遂げて、望まざるに位を進み、貯へざるに財寶をうけ、出で入る人は袖を連ね、ます〳〵富貴繁昌の家とぞなり給ふなり。

寛文二壬寅　五月吉日

三條通菱屋町　ぬ屋仁兵衛

草木太平記

草木太平記卷上

こひそめ―戀初め、濃染

草木元年ちやうしゆん半の頃かとよ、不思議の軍ぞ起りける。故をいかにと尋ぬるに、大和の國み吉野の里に、色異なる八重櫻の一本ありけり。いにしへ若木の花よりも尙色深く枝嫋かなり。誠に其姿繪にかくとも筆に及び語るに詞もなかるべし。又其里近きところに年ふるき一むら薄のありけるが、此花の姿を籬の隙に見そめしより、其色深き戀となり、或日の雨中のつれ〴〵草に、つく〴〵と案じけるは、それ人間は中すに及ばず、鳥類畜類に至るまで此道に心をかけずといふ事なし、たとへば草木なりともいかゞは隔あるべき、此事をたゞに止みぬるものならば、あだし野の露と消えなん後までも長き障ともなるべし、いかなる風の便にも露の玉章を送らばやと思ひくらして、硯に向ひ花染のこがれたる薄樣に、言の葉をつくしてぞ聞えける。扨も高間の山の峰の花、よそながらみ吉野の、こひそめ薄穂にいでて、亂れ心をつく〴〵し、杉菜の立つもつらからじと、書き

送られたる菫の色、みるに思ひの深見草、花散る里に宿木の、身をつくしても明石潟、とわたる舟の梶の葉に、かくともつきぬ言の葉を、たれかは花に夕霧の、立つ名を流す川竹や、涙ひまなきかけろふの、日影まつまの露の身に、深き思ひを椎が本、末摘む花の宴となり、胸の薄雲はる風の、吹きも定めぬつま故に、歎く胡蝶のねも高き、ふぢの裏葉におく露を、拂ひかねたる蓬生の、宿にかたぶく枕だに、夢の浮橋中絶えて、ふみ迷ひゆく玉章の、結ぶ契となれかしと、祈る杯の色ふかき、若紫の戀衣、怨みがちなる君をだに、せきやうにかけて松風の、吹くに亂るゝ玉葛、長き思ひをすゝきさへ、戀の床にぞ臥しにけると書きとどめ、

せきやう―夕陽か

しげき野の草の根ごとにわれぞなく一むら薄うゑそめしより

小萩すゝきに力づけ

すゝき此文を風の便に送りければ、花は此由をみづ莖の結ぶ二葉のむかしより、梅のかをる大將に匂も深く相馴れて候へば、四方の霞に散らんこと思ひもよらずとばかりにて、氣色も強き花垣の言ひよるべき言の葉もなし。すゝき此由きくよりも、いかなる堅き石竹なりとも、情にしをれぬ事やあるべきと、往きては還る小車の、しぢに心をつくせども、尙つれなき青柳の靡くけしきもあらざれば、薄も今は藻鹽草かずかくまじとこひ枕に伏沈み、夜もすがら案じけるは、我身數ならぬ一むら薄の風情して、かやうの色ことなる花に亂れそめけるこそ由なけれ、色にうつり香に染むは皆これ浮世のたはぶれ、暮れゆく秋を思へば、枕にすだく虫の音までも思ひの數となるべし、とかく浮世をいと薄の細き命を何にかけてかはのべの草、いづれか秋にあはで果つべきと言ひし言の葉までも、今身の上にしら露の消えかへるよりも仇なれば、我らがゆかり刈萱の、道心坊を賴み、ひとへに草木蓮華の臺にも到らばやと思ひ草、かき集めたる春の夜も程なく明けて朝露の、袖を爭ふ折節に、宮城野の小萩、薄がいほりへ音づれたり。薄かたはらへ招いていひけるは、爰に文をつくれども返事をもせず、便のなさけをも戀けざりしつれなきものありけると、打萎れ語りければ、小萩此由打聞いて、たとへばいかなる花、又はぬしある木なりとも、花の色は移りにけりないたづらにと言ひし事の候へば、みづから言の葉をつくして、言ひ靡けんにいと易かるべし、いかなる花にか亂れそめけん、怪しと問ひければ、其時すゝきは限なく打笑みて胸の蚊遣火ほにいでてぞ語りける。もとより小萩かやうの事にさかしき者なれば、少しも子細あるまじと言ひしかば、筆を執りそめて

のべの草―野邊、延べ
いづれか秋に―平家物語、妓王「萌えいづるも枯るゝも同じ野邊の草云々」

花の色は移りにけりな―小町の歌、下句「わが身世にふるながめせしまに」
いひしかば―原本「いふかば」とあり

山吹色の薄様にかくぞ、

思ひやる花の玉章かずつきて何と薄が言の葉もなし

小萩つかひに行きし事

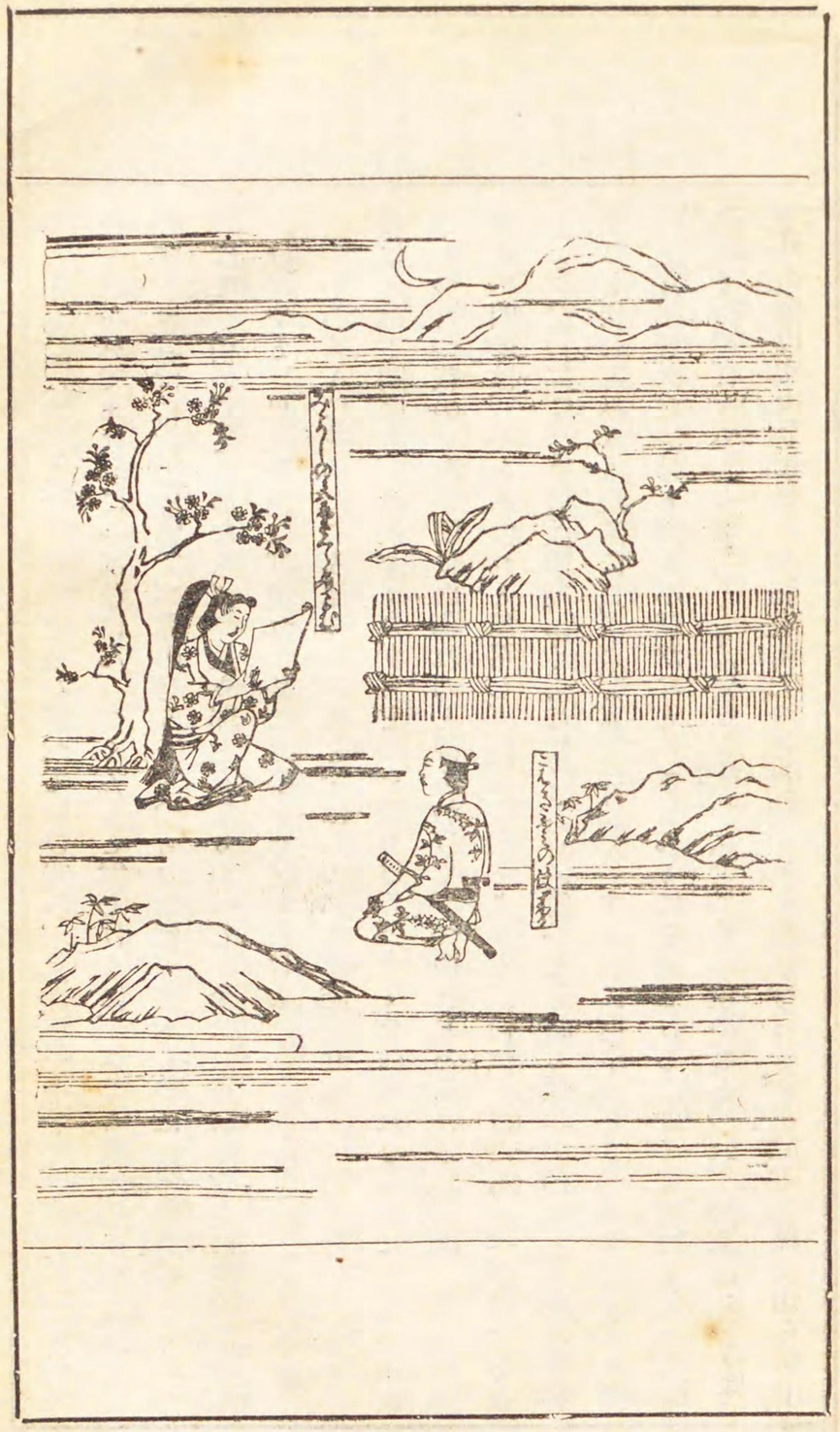
萩はこれを薄紫の袂に入れて、花のもとにぞ忍びける。折節花の匂ひくる櫻花の風にさそはれて、籬の外に散りかゝる其姿、みるに心もさみだれの、ふるき薄が思ひそめけるも道理かなと思ひ、まづ小萩とりあへず、

もろともにあはれと思へ山櫻花より外にとふ人もなし

かくたはぶれて詞に花を咲かせつゝ、さて〳〵かやうの事申しいだすもいと萩の、したばに餘り候へども、餘りに色ふかき花の御けしき、外山のよそに見奉りしも、堪へ忍び難き事にて候へば、せめてはつての御返事をなりとも賜はり候へかし、さのみ度重ならばこそ藤のうらはに引く網の、まづ言の葉に洩れ聞え、憂名の立つ事も候はめ、笹の小篠の一節も、露かゝる事ありとても、皆くちなしの何とてか言の葉にかけ候ふべき、げにげにつれなき御氣色にて候はゞ、すゝきも露と消えなん後には、必ず鬼薊の形をあらはし、死出の山吹山茶花を、くるり〳〵と小車の、うさもつらさも後の世に、思ひ知らせ申す

したば―舌歯、下葉

うらはー裏葉、浦廻



せう〳〵―少少、少將

べしと、或時は目を怒り、或時は枝を垂れていひ怨み、さて彼の玉章を取りいだしければ、花も歌を見てあはれにや思ひけん、つく〴〵と案じけるは、さても錦木の千束に茂るこひすゝき、殊に思ひは深草の、露のせう〳〵つもりなば、若木も終に百年の姥櫻ともやつれはて、梢の霜と消ゆならば、長き罪ともなりぬべし、今は只花のかごとに露の情をもかけばやと、思ふ氣色に打現れ、終に返事をぞせられける。

いろ〳〵に花のたつみはつらけれど今はしのぶの草結びせん

萩は此返事賜はり、急ぎすゝきがもとにぞ歸りける。すゝきは亂れ心を空にして、よれつもつれつ萩の戸を、明けぬ暮れぬと待ちわびて、つゆまどろみける其中は、薄が氏神深草の明神は、是をあはれと思召し、枕上に立ちよりて、何歎く終にあふべき花すゝきと、あらたに聞えて失せ給ふ。すゝきは夢さめ打驚き、是ぞ祈も深草の賴もしき神の御告なりと伏し拜みける折節に、つての小萩は打歸り、すゝきに返事をぞさし出す。すゝき開いて宮城野のなさけも深き小萩かなと、さま〴〵にぞ感じける。かくて其日もくれなゐの花まつ程になりしかば、すゝきは草の葉衣打拂ひ、荻の葉のおとづれ、戀草の招くをも君かなどと待ちゐたり。其後花もたそがれ時の嵐と共にすゝきが許にぞ散りかゝる。櫻

千夜を一夜に―伊勢物語「秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寐ばや飽く時のあらん」

睦言を―睦言もの誤か

互に聞いて―誤脱あるべし

折りえても云々―新續古今、下句「さそふ嵐のありもこそすれ」

梅の推し―推に酸いをかく

白玉か何ぞ―伊勢物語「白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なましものを」

も今は花の下紐打解けて、苔の筵に露をしき、連理の枝に花さく春はありぬとも、心の花の散る時は勿れと、かねて別れを悲み給へば、すゝきも優曇華の花まちえたる心地して、草の枕をとりかはし、千夜を一夜になす巾もがなと、思ふ心のかひもなく、しのゝめやう〳〵明けぬれば、花の袂にすがりつゝ、

睦言をまだつきせぬにしのゝめの明けぬと告ぐる鳥ぞ悲しき

花もとりあへず、

かりそめに伏見の野邊の草まくらすゝき忘るなわれも忘れじ

梅いくさを思ひたつ事

かやうにたはぶれて、互に聞いてこは口惜しき次第かな、折りえても心ゆるすな山櫻とは是なるべし、その義ならばすゝきが野邊に火をかけて、根葉を枯らさんとぞ怒りける。花も薄も打聞いて、包むにあまる花の香の、洩れても梅の推しけるかと、嵐のつてに散る花の、袖にかゝれる心地して、かろやかに花を搔負ひ、白玉か何ぞと問ひしいにしへも、かくやと思ひ知られつゝ、草むらの中に隱しおきければ、花かぎりなく打詫びて、武藏野はけふはな燒きそ若草と、言ひしたぐひにも成りぬるものかな、我身かく埋木の

花さく春を知らぬ身となり、末の露本の雫と消えぬとも、草蔭にても忘るまじきは、さまは霜にしほめる女郎花、風に従ふ絲萩のゆふべの氣色もかくやらんと、見るに萎れぬ花はなし。其後すゝきがたくみけるやうは、我等が本國武藏野に下り、草のゆかりを催し、旗をあげんと思ひ、よろづの草共をかり集めけるに、まづ新玉の年たちかへれば初草や、芹、薺、五形、たびらこ、佛の座、鈴菜、すゞしろ、これぞ七草。この若草を初めとして、あるひは月もうつろふともとあらの小萩、波も色ある井手の山吹、あるひは遍昭僧正のわが落ちにきと人に語るなと、たはぶれし嵯峨野の秋のをみなへし、光る源氏の大將の、白く咲けるはと名を問ひしたそがれ時の夕顔の花、見るに思ひの深見草をさきとして、いづれも作り花の如くにぞ出たちける。まづ小萩のいでたちには、秋の野に草づくしの鎧を著、藤紫の袴に刈萱を笠高に負ひなし、露重籐の弓のまん中握り、葵作りの太刀をはき、花月毛にもぐら置いてぞ乘られたり。その次には木曾の山吹巴の薙刀持つ儘に、うら山吹の下重ね、紫苑唐草の鎧を草摺長にさつくと著、菖蒲の鉢巻結んでさげ、黄月毛の馬にのられたり。さて女郎花の裝束には、忍ぶ文字摺たかにとつて付け、ゑんどうの弓を横たへ、黑駒に菫の手綱をかけられたり。扨深見草のいでたちには、牡丹花の

月もうつろふ―續千載「秋萩の花野の露に影とめて月もうつろふ色やかふらん」
波も色ある―後鳥羽院「玉川の岸の山吹影みえて色なる波に蛙なくなり」
わが落ちにき―古今「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな」
もぐら―蓐を敷にかけていふ

腹卷、龍膽の弓にえもぎの矢負ひ、菖蒲作りの太刀をはき、とう駒にさゝき鐙をかけいでたり。その外のつはものには、芙蓉、芍藥、菊、葵、しもつけ、紫陽花、けしの花、紫苑、龍膽、藤袴、桔梗、岩藤、櫻草、花かけちらす駒つなぎ、くる小車の忘れ草、しのび音による鶉草、立ちこそつゞけ足曳の、大和撫子、唐撫子、がんぴおどしの鎧に石竹の征箭、法師武者には萱草をさきとして、水仙、きいせん、鳳仙花、このぎぼうしども、いづれもしそう色の鎧に、けまんの旗をさしつれて、靜にくる姫百合の、さそひつれたる美人草、からあやめ、紫蘭のよろひに、あるひは紅、紫、萌黃匂、色々染めつくしたる鎧を著たり。いづれも其姿たとへて言ふべき花もなし。さて其外の下草には河原の大黃、虎杖の楯をつき、しのねの征箭をにほひくる、唐草には唐蓼、毛蓼、犬蓼の吠えいづる聲につゞくはゑのこ草、あとには杉菜、木賊まで、綺羅を磨いてぞいでたちける。總じてあるとあらゆる小草共に至るまで、さうかうを振立てて寄る程に、紫野、內野、宮城野にすきまもなく入り亂れて、尾花が末に吹く風は草の旗を靡かし、野邊に住む蟲までも、喊の聲をぞ添へにける。

もしほ草加勢

えもぎ―よもぎ（蓬）の訛
けまん―蟹鬘
にほひくる―になひくるか

かゝりける處に須磨明石の藻鹽草ども寄合ひてつぶやきけるは、此程の風の便に言問へば、都には木草の爭ひ半と聞く、われ〳〵潮瀬に年をふるとても、流れは同じ草なれば、近きあたりに聞きながら、さてあるべきにあらず、陸地の軍は知らねども、蜑の刈藻に身を焦さんよりは、波の討死せばやとて、寄せくる草を數ふるに、軍の花を散らすは櫻海苔、海松も和布の春駒に力革、せゝの鹽手をはやかけて、青海苔きたる鎧には、いつも變らぬ大あらめ、ひじき物具著るまゝに、波の濡衣はるふのり、皆しほくびを取りどりに、いづれも槍をつくも髪、そるあまのりに至るまで、磯菜をあゆんとゆふ波に、時をつくるは雞冠海苔、此海苔どもをほんだはらとして、南は淡路繪島が崎、鳴門の沖、西は播磨路須磨の海草共聞きつたへ〳〵、弓の濱に三保のせきづる掛けそへて、射るや八島の浦風に、昆布の海旗吹きさらさせ、潮どきをどつと作つて、波間々々に控へたり。

鹽手―鞍の前輪後輪に二處づつ付くる紐

あまのり―尼にかけていふ

よしの山勢ぞろへ

さる程に此事かくれなかりしかば、梅の薫る大將、こはいかにと騒いで、さても憐みを垂れ助けおきければ、敵となるこそやすからね、それ草のかず多くとも、木の勢に勝つこと思ひもよらず、さらばくわさんのゐんを花のちやうに構へよとて、一門を集むるに、まづ梅、櫻、松、楓、柳、桃花をさきとして、名所々々の古木ども、夏山の茂みの如くうちよつて、馬を華山に控へたり。さても梅は匂ひ深くて枝たをやかならず、櫻は色ことなれどもその香もなし、柳は風をとゞむる綠の絲、露の玉ぬく枝ことなれども、匂ひもなく花もなし。梅が香を櫻が色にうつして、柳の枝に咲かせたるらんも、このたとへなるべし。まづ梅の薫大將その日のいでたちには、楊梅桃李の腹卷に、梅のこだちを結んでさげ、紅梅月毛の馬に乘り、素槍おつとり出でられたり。公達には白梅のにほひ、ひようぶの花をどしの鎧に、うのはのや白木の弓に白栗毛の馬ひきよせ、ゆらりと乘られたり。そのきやうはくばいの頃より深き匂ひかなと、褒めぬ者こそなかりけれ。絲柳の裝束には青柳のいと珍しき鎧を著、柳の細太刀佩くまゝに、葛袴の裾をとつて、鞠の如く肥えたる馬に沓をかけ、あり〳〵と出でられたり。誠に其姿未央の柳もかくやと思ひ知られたり。さて東山に地主の櫻、ならびに雙林寺の花、いづれも花やかにこそ見えにけれ。地主の櫻は花橘の鎧を著、唐太刀を佩くまゝに、花靫をさもやさしく負ひなし、樺月毛にさくら打置き乘られたり。雙林寺の花は小櫻をどしの鎧に、花色の大口のそばを高らか

楓―傍訓原本に從ふ

こだち―小太刀と木立とにかくうのはのや―うのはなやの誤か

あり〳〵―蹴鞠の掛聲によそへいふ

かいとう―海棠と籐
使は來たり―頼政「花咲かば告げよといひし山里の使はきたり馬に鞍おけ」

におつとつて、かいとうの弓に手柏の征箭をとりそへ、はなかげを乘りいでて、八重一重に討死せんと進まれたり。さて北山の鞍馬の雲珠櫻、使は來たり馬に鞍おけと、騒いで毘沙門どうの鎧を著、黒木の柄にはなし目貫の太刀をはき、黒文字の母衣ぎぬ開いてさつとかけ、黒柿の弓にかやおつとり、こかげの馬に乘られたり。此外都あたりの名木には、大原や小鹽の花、ならびに嵯峨、仁和寺、御室の花、小原、賤原、宇治、醍醐、伏見木幡の山櫻に至るまで、咲き後れじと寄る程に、其數千本の花も過ぎたり。さて國々の遲櫻には越後櫻、信濃櫻、伊勢の國に神路山の櫻、昔を忍ぶ志賀の花、花の吹雪と口ずさみに山を越え、花の都につきにけり。年はふれども若木の櫻、浪華の梅さきがけて、しろに冬ごもらんとくる、程遠き南殿の櫻に至るまで、一門の大事此時なりと、吉野にて勢揃へをする程に、百萬騎の勢どもちくばの花を揃へて、けふ九重に匂ひ來にけり。總じてこゝの山、かしこの里の家櫻、軒端の梅に至るまで、手毎に素槍をもちばなの引きもちぎらず續いたり。さて松の大將には加賀の國に安宅の松、やがて軍にあふみ路や、志賀唐崎の一つ松、名も高砂の松、墨の江の松、五葉にたつは子の日の松、總じて松ふぐりをさげたる程の若松小松を引きつれて、まづ東山にて小松が峯に陣をとる。いづれも

力をゑぬ―力をそへぬの誤か
柏木の衞門―衣紋にかけていふしい―四位と椎

緑の色をかゞやかし、音羽の山の松までも力をゑぬは無かりけれ。麓にはいろ〳〵の與力ども、騎馬の鼻をそろへたり。まづあきばの中將、葉室の中將、紅葉匂ひの鎧に朽葉の直垂、もみ烏帽子に蒔繪の細太刀、いづれも柏木の衞門をひきつくろひ出でられたり。其外むくげしいの位は團栗毛の馬に乘つたり。或は綾杉、白檀磨きの鎧に、弓取り八千代をこめし玉椿、薄色の裝束に、抜けば白玉散るやうなるをさしかざし出でたつ。賀茂の山よりはだんのつゝじと名乘つて、さつき色の馬にのり、さみだれ燒刃の太刀を佩き、今を盛とさきつゞいたり。さて山中の葉武者には、丹波の國に朝倉の宰相、唐革の腹卷に唐織の直垂、唐太刀にさんしやうの目貫うちいでて、唐鞍をおいたる駒ひきよせ、犬山椒のもみたびにはりがねやつて、あぐち高にはいたるは、あつぱれ山椒の氣色やと、口にかけぬはなかりけり。伴ふ勢にはてゝうち栗、いかものの具を著るまゝに、栗毛の馬にゆらりと乘り、けふの軍をかち栗にせんと言ひつれたるは、かきをの柿核よせ具足をきるまゝに、こねりぎぬの大口に、きざはしの弓の中握り、はりそめるは澁紙のへたけに軍をしぬるなと、漆の木に至るまで、負けじといでたつ鎧には、青漆色の腹卷に黒漆の太刀をはき、ぬりでの弓をとりかため、錆月毛の馬に乘り、つゞいて木曾の山よりは、皆ひ

いかものの具―栗のいがにかく

著長―原本「きせが」とあり、今改む
はいだて―膝甲
づんばい―椿桃、此桃毛なし故に毛ぎれ云々といへり、又礫をづんばいといふより敵にあたるともいふなり
このみ〳〵―木の實と好み
くるみ―來る身と胡桃
あせぼ―汗のため肌に生ずる小瘡をあせぼといふ、それを馬酵木にかく

くれなゐの著長に柾目のはいだてを著ごみにし、いためのの籠手をさすまゝに、椹木の弓かるゞ〳〵ときほうの矢を筈高にとつてつけ、丈よき牧の駒ひきよせ、このみかろげにゆらりと乘り、どゐの原にぞ控へたり。老武者には西王母、ひたうの腹卷に桃色の鎧き、いろにふしかげとつたる矢も、花しげ籐の弓の眞中握り、柘榴の馬にこがなしの鞍置かせ、こゝちにおもむく郎等には、楊梅、杏、敵にあたるはづんばい、毛ぎれしたる鎧を著たり。同じく橘のあつそん九年母、陳皮の腹卷に柑子の皮のひつしき、だい〳〵傳はる金柑作りの太刀をはき、みかんよき馬に乘つたるは、誠に一き千本のきほひやと、囃さぬ者はなかりけり。其外果物どもはこのみ〳〵の鎧を、われも〳〵きなりにする。えのみてにならばなれ木は椋の木と、いろ〳〵に爭ひつれてくるみども、すぎたてを持ちかねて、あせぼを流す谷川の橡がらに至るまで、そのみを捨てて寄る程に、總じて山々里々木の下草の蔭までも、花ならずといふ事なし。誠に九てうをも花の都といひし事、始めて驚くばかりなり。

宇治茶合戰

かくせし程に都近き宇治の里にも、此事かくれなかりしかば、茶園どもはさればこそと

上林―有名なる茶師
づんぎり―茶壺にかけていふ
一度に茶をぞいでにける―茶は茶屋の誤脱なるべし

ひしめいて、上林の許に森の如く集りて、まづ著到をつくるに、聞き傳へ〳〵何千きといふ數を知らず、植込路次までつめよつて、腰かくる所もなかりけり。さて此事いかゞあるべきと、とり〳〵に評定しけるは、敵寄せ來らば宇治橋を引き切つて、一々にづんぎりにせんと云ふもあり、又かしこへなかだちして言ひけるは、我等が緣者のすまひする栂の尾に打寄つて、ひく敵を茶臼の如くとりまはし、立てかけて討たんといふもあり、其外すい茶のこい茶の、或は薄茶のと、すき〳〵にいひければ、中にもふるきこ茶どもは、持つたる柄杓にてなかつきの上を丁どうち、いかにもたぎつて言ひけるは、さやうに甘茶の煎じ茶のと、敵の氣を汲みはからんこと、皆新茶の若氣にて靑き分別とこそ存じさむらへ、それをいかにと申すに、われらがうぢは昔より木にもあらず、草にもあらねば、いづかたへつかんとも申し難し、只この所に控へてわびに力をそへんと、大人しやかにいひければ、いづれも別義あるまじとて、一度に茶をぞいでにける。さて其日の茶將軍極上之助うぢよしのいでたちには、茶絲の腹卷に茶巾の大口、茶の實なりの星兜を猪首に著、そぐつて上帶丁どしめ、一そりそつたるさしやくどうづくりの太刀をはき、茶の糟毛なる駒引寄せ、海松茶の手綱を結んでさけ、茶のみからげにゆらりと乘り、ちやせ

い二千ぎばかり　前後左右に從へて、白雲の風に靡くが如く、宇治晒の白旗をまつさきに進ませて、まづ平等院に陣を据ゑ、茶の木の弓杖にすがつて、みなやりを月こそいづれ朝日山と、輝くばかりにいでたつたりしは、あつぱれ大將の勢やと、ちやどきを揚げてぞ褒めにける。

あふり―障泥

茶壺加勢

さる程にさて國々の茶壺共に至るまで、大將に從はんと、愛宕山につめよる程のまつほ共吊輿の荷ひ茶屋のと打乘り〳〵引きもちぎらずくだつて、大勢かゝらばこぐちを切拂ひたてをすて、ひき色に見えたる敵あらば、なつぎりに切り散らさんと、壺尻かろく家をいづるは、藤四郎茶碗色の鎧、染付のはいだてに、丸壺のほりいだしうつたる冑を著、備前のうちものさすまゝに、信樂の弓に弦つけて、葉茶屋壺をかるぐ〳〵と負ひなし　ふゆかんよきしりぶくらのぶんりんと跳ねたる馬に、青磁のあふりをかけさせ、その鞍壺にゆらりと乘り、われも〳〵と驅けいでたるは、なつめも驚くばかりなり。相從ふつはものには、島燒の日利き物、薩摩燒のやらうども、今燒の土につかゆる太刀をはき、敵よせ來らば肩つきにつきはつて、だいかいにはめんと言ふまゝに、水こぼしの瀨戸にいづれも控へたり。其外あると霰釜に至るまで星兜を猪首に著、鎖の鎧を長々と釼付とつてひつたて、弦掛おいたる淨頗梨をてまへも口におし握り、やいばよきかま槍を手取にしたる破釜共、敵に尻矢をいかけられ、猶洩らすものならば末代の疵にもなるべしと、沸えふためいて九輪釜、そのせいほうろく千騎にて、まつかなわに陣をとり、こゝを茶せんと一度にたてたる時の聲、上は自在天目までも聞え、下は鑵子の底までも響き渡つておびただし。其外の勢共は、橘の小島が崎に夜もすがら螢火に冑の星を輝かし、宇治川ながれに花を散らすもあり、或は茶舟にとりのつて、焙爐にかける茶の旗を、槇の島にあぐるもあり。これぞかなめの合戰と、扇のしまに賴政のそのいにしへもかくやとばかり、聞くに花香もかうばしく、見るに其色むじやうやと、宇治山ずりと褒めたるも道理かなと、その茶をもちひぬはなかりけり。

扇のしまーしまは芝の誤か　むじやうー無上、無常

草木太平記 巻下

京わらび―京わちべいふ顔―夕顔にかく

芝居―芝のはえたる場所

かうじの花―麹花にて酒の意に用ふ

たんほゝ―蒲公英にかく

さる程に京わらびども寄合ひて言ひけるは、都家々の櫻咲きも殘らぬ、また山里に契りおく花もいくさをすると聞く、いざさらば行きて見んといふ顔の、瓢簞に酒など入れてもつまゝに、花衣の袖をつらねて行く程に、程もなく北山の麓につきぬ。こゝかしこの山々を見渡せば、百しゆの花をつらねたり。誠に興ある見物かなとて、いづれも芝居のうへにつくゞしと竝みゐて、かたはらより聞えしは、

いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな

又あるかたよりは、

春の野にいくたびやりをつくゞし共草摺に花を散らすか

などと折にふれたる草歌など口ずさみ、肴杯とりゞに遊ぶほどに、やう〳〵かうじの花もあがりしかば、たんほゝとて鼓などうちはやし、時の小唄などいと面白く歌うつ舞うつ戯れて、その後酒の燗に焚き殘したる青楓の燃えいづるをも、時ならぬ薄紅葉の心

やかんさう―射干草を夜間の意にかけたり

みくさ―みちくさの誤か

がんひ―岩菲（仙翁花）といふ草の名を火にかけていへり

あけやらぬ―原本「あやらぬ」とあり、今改む

地して、手毎に花を手折りつゝ、皆家路にぞ歸りける。かくせし程に其日もやう〳〵暮れそめて、弓張月のいるや彌生の山の端にかゝりしかば、今宵は花の下臥して、あすは軍と相定め、おのがさまゞ〳〵陣を取る。其後花の方にふれたるは、敵陣に聞えたる葛かづらやかんさうなどとて、夜討に馴れたるものあり、足元より這ひかゝり取卷くこともありぬべし、篝をたけといひければ、谷の早蕨もえいづる峯の檜の木もおもひばを焚く。草の陣にもこれを見て、さらば篝をたかんとて、野邊のみくさをたきものの、焚きつづけたる空炷は、鎧の袖や匂ふらん。更けゆくまゝに是を見れば、足曳の山高き雲の原、さてがんひを焚く麓の野邊に見ゆる火は、賀茂白川に立つ波の、花を焚くかと怪まる。かくせし程に草の枕をとる程もなく、しのゝめやう〳〵明けければ、大將をはじめとして、いづれも弓をはるの野に、駒かけちらし打出でて、波うち際に控へたり。敵も城よりおりさがつて、白川表に陣を張る。扨其日の物見には、芭蕉の大助青葉の旗をさしあげて、草のはたてをつき竝べ、まだあけやらぬ朝霧の晴間より、花の城を見あぐれば、峯にはあるとあらゆる花ども、枝を交へて色々に雲か雪かと疑はる。總じて山々を見渡せば、白旗、赤旗、紫、縹色、花菱、花輪ちがひ、桐のとうを初めとして、色々の旗どもは木

木の梢にひるがへつて、山を五色に染めなせり。麓には鴨川を要害に堰き入れ、亂杭逆茂木を引いたれば、鳥ならでは通ふべきやうもなかりけり。

難波津の蘆先陣

さる程に草の陣を見渡せば、霧の幕、霞の幕、牡丹唐草、菊唐草、菊水、藤色、山吹色、桔梗の紋をはじめとして、色々の幕どもを透間もなく打つたるは、錦をさらすに異ならず。さて花の方の旗頭には棕櫚、同じく銀杏、ならびに蘇鐵、一所に打寄り控へたり。まづ棕櫚は花を招く團扇の旗、銀杏は風を含める扇の旗、さて蘇鐵は敵をきりさきの旗、いづれも毛深き馬に乘り、鴨川を見渡せば、花の色は水にうつろひ、草は色々に生ひ渡つて、梅花の林に入る如し。その後七草をはやすが如く、鬨をどつとつくつて、敵は桑の弓を引き、草は蓬の矢を放つ。いづれも共草摺をゆり合せ、東西の岸に臨んで、果しかねたる所に、草の陣よりも水を得たるつはもの共先陣に進んだり。まづ難波津の蘆、其日の裝束には水色の鎧をきるまゝに、蘆の征箭を筈高にとつてつけ、弓のひしづるくひしめし、よしみつの太刀をはき、蘆毛の馬にゆらりと乘り、菅の小笠をかたぶけて、濱荻をさしかざし、元より水は我物と、白波を立ててぞ泳がせける。つゞく勢には三河の國に八つ橋の杜若、名をくのかみに殘さんと、さわやかにこそいでたちけれ。花紫の唐衣きつゝ馴れにし駒に乘り、菖蒲づくりの太刀をはき、澤潟の笠印を川風に吹き流させ、澤邊の眞菰、沼の河骨ひき具して、くもで川を渡るが如く、つどいて軍をしなのはすみをぬけ、いでたつ鎧には蓮絲のをり裝束に蓮の葉形の冑をき、蓮木刀をするりと拔き、蓮切にせんといふ波に、れんげん蘆毛を打入れたり。扨は田面の早苗と名乘つて、ふし縄目の鎧に糠星の冑を著、やきごめ籐の弓にみつばの稻を隨へて、まづ苗代をいでたるは、水際たつてぞ見えにける。

秋の田を人にまかせて我は只花に心をつくるけふかな

これをみかたの先陣として、大勢一度にさつと入り、花筏を組むが如く、草もうら筈元筈とりちがへ、向ふの岸にぞつきにける。大將これを見て、味方の陣をまつさきわけて驅けいで、大音聲にて名乘られける。花多しといへども、我等が櫻いにこすはなし、草は木に從ふをもつて、花の下草とは傳へたり、ある經にも一華開けぬれば天下皆春とは說かれたりと、梢も響くばかりにぞ名乘られける。さて又難波津の蘆も駒を引据ゑいひけるは、我等が先祖をいへば、葦原の昔よりその眷屬多うして、いくらといふ數を知らず、

くのかみ―人のかみの誤か

れんげん蘆毛―連錢蘆毛を運華にもぢりたり

櫻い―櫻いろの誤か

一華開けぬれば云々―大集經にいづ

國土開けしよりまづ始まりぬる故に、草木國土とは說かれたり、木は多くとも草にこすことあるべからずと、言ふより早く蘆の征矢をぞ射かけたり。花も小太刀をするりと拔き、鎬を削り鍔を張り、きさきよりも火花を散らし、木草も枯れよと戰ひける。その後風に木の葉の散る如く、四方へさつと引き退き、いづれも小楯をとつてぞ控へたり。

松かげ―松陰と松塵毛

老松大將の事

さて二陣の大將には老松と名乘つて、大荒目の鎧に苔金物しげく打ち、松笠なりの冑を著、松かげの馬にゆらりと乘りならべ、おほまつのはやりをみどりにし、一合戰と待つ所に、藤原の朝臣と名乘つて、花やかにぞ見えにけれ。若紫の摺衣の鎧に紫の藤袴、同じくふぢしまの太刀を佩き、根曲りの鞍に八つ藤の紋すつて、斷えたる馬にゆらりと乘り、相從ふ勢共には柾にかゝる定家葛、いつも變らぬ常夏の裝束、さてはうらみの葛袴、きて又旅をするがなる宇津の山べの蔦かづら、わけて上りし軍には逢坂山のさねかづら、すひかづらるさいかちの鍔に、あけびの頰當、あるひは鐵仙花の鎧、あるひはつゞらをりの裝束、此外ぶだうだいいちごの花かづらども、數へていふに限なし。此勢を從へて藤波の松にかゝるが如く、前後左右より這ひかゝり、枝にから卷き葉にまつはる。松はもと

ふだう云々―葡萄と武道、蕁と第一

より大力なれば、枝を張りはがねを鳴らし、散々にひつきつて、藤繩に絢うてぞ捨てにける、その氣色唐松にてはめいぼくたいし、我朝にては鬼を從へる柊もかくやと思ひ知られたり。垣根を出でくる勢は朝顏、晝顏、夕顏、大將と同じく討死せんと、まづ朝顏は槿花の鎧、晝顏は照りに照つたるひをどしの鎧、さて夕顏は干瓢の腹卷、この三草をさきとして、百なり千なりといふ數を知らす、命をば瓢簞よりも輕く、同じ枕に討死して夕顏の露とぞ消えにける。草木いづれも是を見て、露をしたてぬはなかりけり。

百なり千なり―共に瓢の一種

猩々菊射殺されし事

その後草の陣よりも菊唐草の鎧を著、裾萌黃の膝甲に菊金物打つたる冑の緒をしめ、菊鍔の太刀に黃金目貫打つたるを、弓手の脇に結んで下げ、大音あげて名乘られけるは、昔より菊みづの流れを汲んで千歲の齡を保つ翁草とは我事なり、よからん敵と討死して菊みづの流れに名を流さんと、敵の陣にわつて入り、

いにしへもかゝるためしを菊川の淸き流れに名をや流さん

又敵の陣よりも龍田山の神木と名乘つて、紅葉の錦の鎧を著、蘇枋袴のそばをとり、赤木の弓の眞中握り、染羽の鏑打ちつがひ、花をみて其名はいまだ白菊の大將に矢一筋ま

菊みづ―きくすゐの誤讀なるべし

射たらば―渡らばのもぢり
太白―太白星と菊の名とにかく

ゐらせんと、時雨に染むる紅葉の旗をまつさきに進まれたり。

龍田川もみぢに宿るつき弓を射たらば錦中や絶えなん

其後菊の大將のがれ難くや思はれけん、太白の扇をぬきいだし、まづこの輪をあそばせと、花壇の上にぞ立たれたり。相從ふつはものには、春菊、夏菊、さて寒菊、その外のより菊どもいくらといふ數を知らず、大將の前後に控へたり。かゝりける所に味方の陣よりも、猩々紅菊と名乘つて、唐紅の鎧を著、菊一文字の太刀を佩き、青き名馬にゆらりと乘り、大將の命にかはらんと、亂れ足を踏んで出でにける。紅葉の錦これを見て、聞くも涼しき詞かなと、あくまでちやうど放つ。無慚や猩々眉間のまん中射られて、鼻血をばつと散らし、馬より落葉の露とぞ消えにける。敵も味方もおしなべて、あつぱれよき紅菊かな、是を生けておきたやと惜まぬ者はなかりけり。亂菊どもは是を見て、安からず思ひければ、抜きつれてぞかゝりける。紅葉の勢も一度に大將討たせて叶はじ、ところどころのむら紅葉、狩りつれてくるは稲荷の薄紅葉、名をも雲居に通天の紅葉、西に小倉、高尾のもみぢ、その外の下紅葉に至るまで、命をばいつの用にかたつた山、散らせや紅葉と呼ばはつて、敵の勢仙翁花と味方の勢百日紅を追うつ追はれつ入り亂れ、かいでを

かいで―楓を手にかく

もみぢ―血にかく

廣げて組むもあり、或はもみぢを流すもあり。物によく〳〵誓ふれば、吉野初瀬の花紅葉、嵐に散るが如くなり。ある合戰の歌に、

千々の秋一夜の春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

敵味方東西にさつと引き、四方を遙に見渡せば、麓には花ちる里のげんげども、いざや味方を申さんと、旗の手を打揚げ、賤が緒環いろ〳〵に、作りおいたる唐瓜の、實數多き鎧を著、胄の星瓜かゞやいたる、黄金まくはの太刀を佩き、鴨瓜の青羽にてはいだる矢を、いとしほらしく取つてつけ、黄瓜の弓に弦かけて、くはしめし口よき馬に打乘つたり。胄のしのびに是を見れば、姫瓜の如く薄化粧に眉刷いたり。あつぱれ瓜一かしらの大將やと褒めぬ者こそなかりけれ。

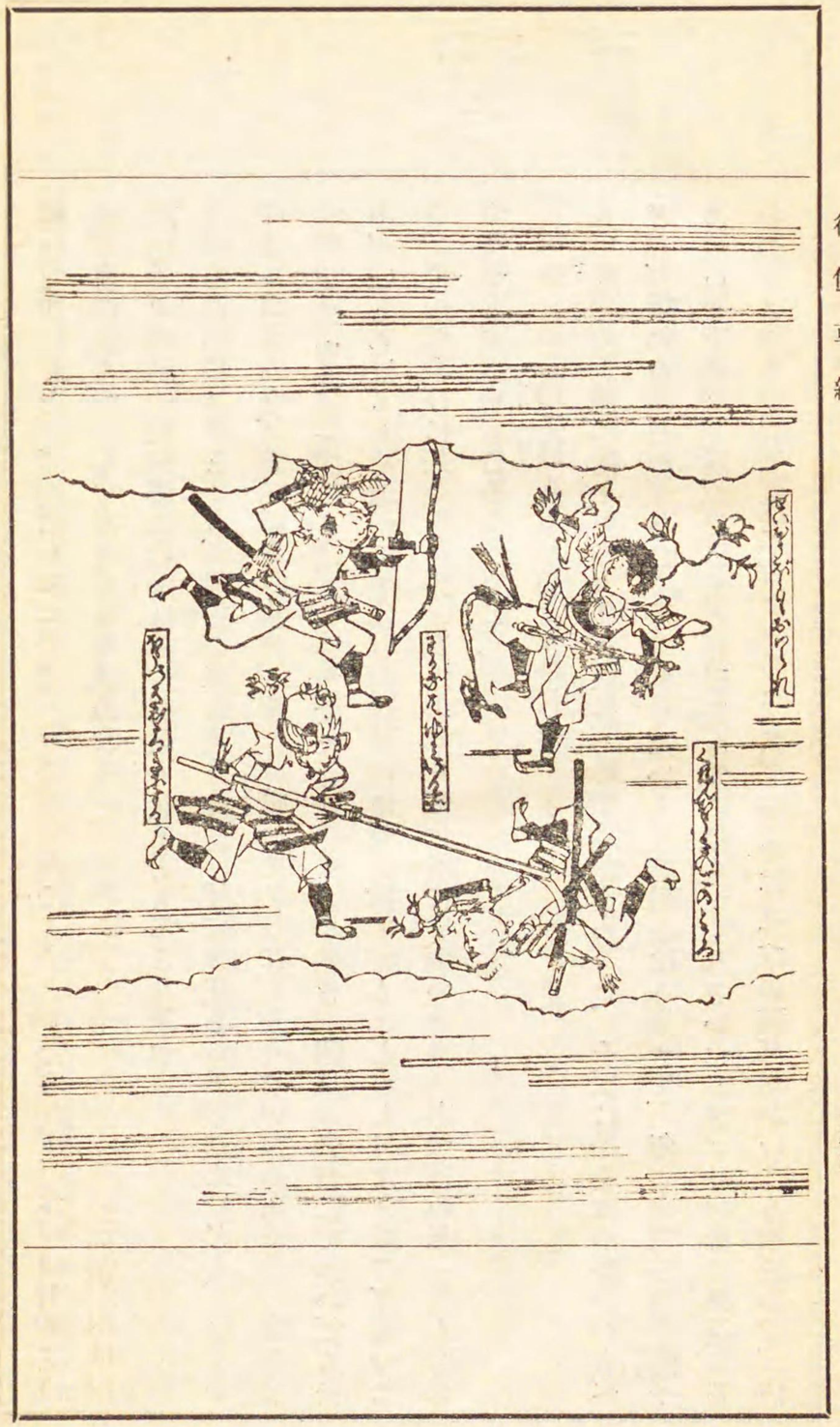
一かしら―瓜は一かしら二かしらと數ふるよりいふ

大納言―小豆の一種に此名あり
わらべ―蕓にかく

西王母もゝを射られし事

さて後陣の大將には小豆の大納言豆男、弓胡籙かるゞゝと、そばに續くは小麥のわらべども、著たる袴をぬぎおき、麥の靭にたいとうの弓をはる過ぎて、年よりたる秋の茄子に至るまで若やぎ討死せばやと、鬢髭を紫に染め、十八さいたるさゝげの矢の節近なるをつまよつて、あひかはにごまからまきの太刀をはき、草の種蒔繪かいたる鞍置いて、白

白駒―白胡麻にかく



たのもん―田の面、他の門
よめがはいだる―よめ がはぎ（嫁菜）にいひかく
まくは形―眞桑と鎌形とにかく
そのみは土に埋む云々―白氏龍門原上土、埋骨不埋名
若菜の上下―源氏物語若菜の卷は上下に分てり
もゝ―股を桃にかく

駒に打乗つたり。その外われとおぼしき大剛の兵者ども、鎬矢を磨きたて、うねめ〳〵に楯おひたるに、たのもんにはゆき蕎、よめがはいたる矢筈の紋、葉と羽は萌黄、根は白絲の靱草、一つの口などかいたるを、木枯に吹き散らさせ、霞に見ゆるは山田の僧都、鳴子の如くに控へたり。其後瓜の陣よりも、まくは形うつたるあこだの冑を猪首に著、絲瓜の皮の腹巻に、はゞよき太刀をするりと拔き、敵の陣にわつて入り、瓜切りに切つてまはる。是を見て北山の芋が子どもに至るまで、所々に討死して、そのみは土に埋むとも、名をば蔓葉に殘しける零餘子どもこそ悲しけれ。若菜の上下おしなべてこれを感ずる所に、草の勢も打寄つて、こゝを引くなとゆふだちの、林を過ぐるが如く篠根をそろへて射かけたり。いたはしや西王母、そのもゝを射られて、千年の命をゆふべの露にぞとどめける。脇に控へたる九年母もほゝづきに突かれてむくろぢをさつと流し、同じ枕に伏しにける。野邊の千草に至るまで、紅葉にそゝぐ雨の如く、皆紅とぞなりにける。續く味方はありの實の梨切にせんといふまゝに、冬枯の森の梢の如くきさきを揃へおつかくる。草も矢種つくれば、茅花の穂の如く拔きつれてぞ蒐りける。花の靡く時もあり、草の亂るゝ折もあり、互に勝負は見えざりけり。かゝりける所に鬼百合、鬼薊などいはれし

きりのき―斬り退きと桐の木
とりき―虜と取木
けひば―かひば（飼葉）の衍か
おほゐ山―おほゐ川の衍か

きどつさうの兵者ども、をどしたてたる鎧を著、花を生捕にせんとおつかけて、きりのきにするもあり、或はとりきにするもあり、[組んでおつるは角力草、散々に切艾の火花を散らいて戰ひけるが、花は終に打負けて、つめの城にぞとりこもり、引きおくれたる遲櫻ども草、のけひばに斷け散らされ、將棊倒しをする如く、大手をさしてぞ引きにける。たいこくの花いくさも、かくやと思ひ氣の毒なり。

鞍馬おちの事

さる程に草は綠の色をかゞやかし、花の袖をくさりつれ、敵の城を圍むこと、七重八重に籬をゆふが如くなり。かゝりける所に花の兵者にさつきとてありけるが、二心の色を咲き分けて、味方の城に花火をかけ花とぞなりにける。をりふし風は嶮しく火花の四方に散ることは、秋の螢の如くなり。城へつぼみし花共は、けぶりに迷へる火櫻の、色のはがれて散るほどに、花の勢もつき弓の引くに力のあらざれば、老木のこども姥櫻は朽木うつぼ木の洞に身を隱す。或は落花をせんと鞍馬に鞭うつ花もあり貴船に棹さす浮木もあり。其外の花どもは東風ふく風の便をえ、西をさして散る程に、草花どもはさゝがにの梢を傳ふもかくやと、逃ぐる敵をおほる山、嵐山の風をも關の聲かと驚き、衣笠山の霞をも

金谷―晉の石崇の別莊ありし地、こゝにて客を會し花見の宴を開き詩を賦せし事有名なり
ぜづひき―未詳
熊野うち云々―ナギの木は熊野の名產なり

旗の手かと肝を消し、坂を下るは花車、いよ〳〵草はかつら川、つきせぬ花はおほゐ川、波の花こそさかりなれ。物によく〳〵譬ふれば、金谷苑裏の春の花、一場の嵐にさそはれて四方の霞に散りゆきし其有樣に異ならず。其後草は勝鬨をつくつて、けふの軍の花はこれまでと、元の陣に立ち返り、物具の露をぞ乾しにける。

楠木高名の事

かゝりける所に楠木正成といふもの、ぜづひきの目も驚く合戰して、味方のはなをあけんといでたつ。其日の裝束には唐錦の鎧に鍬形打つたる兜の緒をしめ、鋼よきかいしのぎの刀をさし、駒のけやき見事なるにきくらげ置いてゆらりと乘り、熊野うちの薙刀を風車に舞はいて、若き葉武者を百きばかり從へ、思ひもよらぬ敵の後より鬨をどつとつくりかけ、草の陣へ割つて入る。八花形といふものに四方へさつとかけ散らし、百草を刈るが如く散々に薙いだりけり。その有樣いにしへの草薙の劍ともいひつべし。古木どもは是に力を得、再び花さく心地して、われも〳〵と立ち返り、こゝをせんどと戰ひける。草の勢はもとよりも油斷せし事なれば、八重葎しげるが如く一所に打寄り控へたり。これを引くものならば笑草ともなりぬべし、皆篠原の露となれと呼ばはつて、草のはらを

雪の下―鴨足草

鹽竈―鹽竈櫻といふ一種あるよりいふ

搔切りちぐさを流す有様、いづれもみそ萩のもろき露となるもあり、雪の下と消ゆるもあり、ちり〳〵草も多かりけり。物によく〳〵譬ふれば、枯野に残る冬草の嵐に吹くが如くなり。すゝき此由見るよりも、この合戰起りしこと我等よりいで來り、速に討死せんといでたつ。其日の裝束にはかりやす色の水干に縅の大口きるまゝに、はよきの太刀をひつさげて、さかげの駒に鞭をあて、蓬生の露打拂ふが如く、末摘花の細首を拂ひ切りにぞ切つたりける。その勢は集つて枝を交へ葉を並べて、簾の如く編みつれて、薄を中にとりこむる。無慚や薄は花籠の花の如く穂にいづべきやうもなし。今はこれまでとや思ひけん、跡とひ給へ刈萱の道心ばらといひさまに、はら一文字に搔き切つて、淺茅が原の露とぞ消えにける。うへ木した草これを見て、花の袖、草の袂をしぼりける。さても薄は千度百度打勝つて、一戰に負けし事、只楠木が業なりと感ぜぬものはなかりけり。

櫻道心の事

さる程に彼の八重櫻は、われ故不思議の軍いできぬれば、夫の薄に再びめぐり逢はん末の契もいさ知らずと、深き思ひは鹽竈の煙とあらはれ、袖の上の涙はあしたの露と爭ひつ、ある山に深くつほめる花の形も色外に衰へて、浮世の靜まるまでを待たれける。花の

つらき思ひは―「は」は「の」の誤か深きにも―深みにもの誤か

知らざる事―知ちざる事をの誤なるべしやうに―やうとの誤か

心ぞあはれなり。薄も別れし頃は彌生の梓弓かへらんことも難ければ、かりの玉章をもつけて、思ひおく花の、たよりをも聞き傳へんと、枕に聞えしその言の葉も打過ぎて、今は靜に楢の葉の皆根にかへると告げしかば、夫の行くへの聞かまほしさに、忍びて都へ上られしが、薄もかくなり給ひぬと聞えしかば、そも夢か現か、夢ならばさむる現のあれかしと、花の薄衣ひきかづき、伏し沈みたる有様は、しほめる花の如くなり。やゝありて口説かれけるは、扨も薄き契は一重櫻のつらき思ひは、八重九重にかさなる身こそ悲しけれ、せめては其夫の果て給ひし野原の草の露とも消え、又は櫻川の深きにも身を沈め、波の花とも散らばやと思ひしが、待てしばし我心、われさへかくなりなば、一むら薄の亡き跡をも誰かは殘りてとぶらふべし、又は多くの草木共の秋の霜と消えはて給ひしも、ひとへにみづから故と思へば、後の世の報いもおそろし、是を菩提樹の種として、庵室の花とも呼ばれ、夫の後生善所をもとぶらひ、無常の風にさそはれば、彼岸櫻の岸にも到り、又はこの土に歸らば、再び草木の契を結ばんと、思ひし涙のひまよりも、

この世にて菩提の種をうゑつれば君がひくべき實とぞなりぬる

さても浮世の物語に、物の道を知らざる事、木の端のやうにいひけれども、人間にたが

ふこと一つもなし。それを如何にとなれば、種を蒔きそめしより芽をひらき、同じく花に匂ひをとゞめ、口なしといへども葉もはえ、聲なしといへども一節もあり、耳なしといへども物をきくらげの耳がましきをば初めとして、手には手柏あり、おのれ〳〵に股もあれば、おほぢのふぐりも下れり、欲なしといへども物をみどりにする緣も備はり、夫婦の道を思ふこと高砂住の江に相生の松を初めとして、その外戀路の道には丹花の脣、芙蓉のまなじり、柳の眉のいとわりなき姿を見ては、おもひばの色をあらはし、錦木の戀衣を重ねて連理の枝とならん事を誓ひ、又かやうに中をわかれては、川柳の歎きをなし、あるひは萎める花も水を注ぎ露をうけては忽ちに開き、喜びの色をあらはすといへども、終には老木となつてむもれ木の土に還らんことをかねて思ひ、跡をつぐべき繼木をもとめて、殘るこのみをゆづりはの次第に跡をさかやかす。この道いづれも人間の愛別離苦、怨憎會苦にたがふ事なし。次には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天、此六道佛の敎へに違ふべからず。或は玉樓金殿、玉の臺の内にして、まづ南殿の花の開けそめしより、ぢうぜんていぎよくのそばに交り、花のこずゑのきさきのとかしづかれ、色々の衣更も過ぎぬれば、うら紫に咲けるふぢまづ言の葉に契りおく彌生も末になりしかば、

おほぢのふぐり―蟷螂の卵
みどり―緣、見取
人天―人間天上
ぢうぜんていぎよく―十善帝王の誤か

卯の花のむら〳〵咲ける垣根をも、雲間の月の影かとぞ眺めあかされ、色々の花どもの色をまじへし有樣、これ天上の樂み目の前なり。さて春は青く夏は茂り秋は染め冬は根にかへる、有爲轉變のことわり、元より人間にかはる事なし。地獄といつぱ、あるひは山林におへいでて賤がつま木となつて、斧鉞のために切りさいなまれ、牛頭馬頭の車に載せられて、民の竈に身を焦し、或は筏のために搦めつながれて、漫々たる大海に浮け沈められ、苛責のせめを受くること、これいづれも阿鼻地獄の苦患にあらずや。又弓、胡籙、ほうの木、木刀のなんどいはれて、合戰の巷にいづること、これ則ち修羅道なり。又は岩巖石の嶮岨にはえいで、或は人家の垣柔に結ひ撓められ、長閑なる春をもあたらず、雨露の惠みをも受け難き風情は、さながら餓鬼道なり。又同じ草木の中にも犬槇、犬黄楊、或は猿すべりなどと言はれし、只今皆畜生道にかはる事なし。此六道の外に神道あり、佛道あり。まづ開けそめしより二柱の神を始めとして、すべら木のかしこき御代に至りては、色々の神木と現れ、扨佛道といつぱ、三如來の御形を始めとして、或はあらゆる木佛に刻まれて、佛くわを開く事、これ又過去の善根によると見えたり。草木國土悉皆成佛と聞く時は、谷の枯木も佛なりと、目前に悟を開き、扨彼の八重櫻は、終

おへいでて―おひいでての訛
阿鼻地獄―無間地獄に同じ
はえいで―生えずして
三如來―阿彌陀如來、釋迦如來、藥師如來
佛くわ―佛果、佛花

にみどりの髪を剃りおとし、花の衣（ころも）を墨染の櫻とこそはなりにけり。

古藤七郎兵衛

歌舞妓草子

歌舞妓草子

あふの宿―逢ふ、大野うし窓―憂し、牛窓ふく島―吹く、福島

都の春の花ざかり〳〵、かぶき踊にいでうよ、そも〳〵これは出雲の國大社（おほやしろ）に仕へ申す社人にて候ふ、それがしが娘に國と申す巫（みこ）の候ふを、かぶき踊と申す事を習はし、天下太平の御世なれば、都にまかりのぼり候て踊らせばやと存じ候ふ。

古里やいづもの國をあとに見て、末は霞みて春の日の、長門の國府（こふ）を過ぎぬれば、かゝる御世にもあふの宿（しゆく）、道せばからぬ廣島や、問ひよる宮は嚴島（いつくしま）、舟のとまりにならたの濱、釣するわざはうし窓の、月にあかしの浦傳ひ、なほ行末は世の中の、なにはの事もよしあしの、若葉に風のふく島の、湊の波の治まれる、御世には今ぞあふ坂や、急ぐ心のほどもなく、都に早くつきにけり。

これははや都について候ふ程に、心靜に洛陽の花を眺めばやと思ひ候ふ、をりしも春の事なれば名にし負うたる花の都、こゝやかしこの花見の遊び、花の袂を重ねつゝ、色々

千本―地名

の裳裾を染めて、木の下ごとに圓居して、歌ふもいとゞ面白し。そも〳〵都ほとりの花の名所、地主權現の花の色、鷲のお山に咲く花は、靈鷲山の春かと疑はれ、大原や小鹽の山の花盛、今も御幸や仰ぐらん。さて又返り眺むれば、大内山の花盛、近衞どのの絲櫻、千本の花にしくはなしと打眺め、天滿つ神にぞまゐりける〳〵。

いかに申し候ふ、今日は三月二十五日、貴賤群集の社參の折柄なれば、かぶき踊を始めばやと思ひ候ふ、まづ〳〵念佛踊を始め申さう。光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨南無阿彌陀佛、なむあみだ、南無阿彌陀佛、なむあみだ、はかなしや鈎に懸けては何かせん、心にかけよ彌陀の名號、なむ阿彌陀佛、なむあみだ。

念佛の聲にひかれつゝ〳〵、罪障の里をいでうよ。のう〳〵お國に物申さん、われをば見知り給はずや、そのいにしへのゆかしさに、これまで參りて候ふぞや。

思ひよらずや、貴賤の中にわきて誰とか知るべき、いかなる人にてましますぞや、御名を名乘りおはしませ。いかなる者と問ひ給ふ、われも昔の御身の友、馴れしかぶきを今とても、忘るゝ事のあらざれば、これも狂言綺語をもつて讃佛轉法輪のまことの道に入るなれば、かやうに現れいでしなり。さては此世になき人の、うつゝにまみえ給ふかや、

ふしぎ―節にかけていふ

かぶかん―浮れ戯るゝをかぶくといふ

きの毒―木と氣とにかく

くる〳〵―來る來るにかく

おかゝ―女房

さしてそれともいは代の、松の言の葉かず〳〵に、袖を聯ねてきた野なる、右近の事と夕顔の、花の名殘の玉鬘、かけても思ひ出でざるや。言葉の末にて心得たり、さては昔のかぶき人、名古屋どのにてましますか。いや名古屋とは恥しや、なごやかならぬ世の交り、人の心はむら竹の、ふしぎの喧嘩をしいだして、互に今は此世にも、なごやが池の水の泡と、果てにし事の無念さよ、よし何事も打棄てて、ありし昔の一節を、歌ひていざやかぶかん、いざやかぶかん。

あ只うき世は生木に鉈ぢやとのう、思ひまはせばきの毒やのう。

あ只お國は柚の木に猫ぢやとのう、思ひまはせばきの藥。

淀の川瀨の水車、たれを待つやらくる〳〵と。

茶屋のおかゝに末代そはゞ、伊勢へ七度熊野へ十三度、愛宕さまへは月まゐり。

茶屋のおかゝに七つの戀慕よのう、一つ二つは痴話にも召されよのう、殘り五つ皆戀慕ぢや。

風も吹かぬにはや戸をさいたのう、さゝばさすとて、疾くにもおしやらいで、あ只つれなの君さまやのう、そなた思へば門に立つ、さむき嵐も身にしまぬ。

いかにお國に申し候ふ、これははや古臭き唄にて候ふ程に、めづらしきかぶきを、ちと見申さう、今の程は淨瑠璃もどきといふ唄を歌ひ申し候ふ、さらば歌ひ聞せ申さんと、つづみの拍子打揃へ、調子をこそうかゞひける。

わが戀は月に叢雲花に風とよ、細道の駒、かけて思ふぞ苦しき。

かけて―驅けて、懸けて

山を越え里を隔てて、人をも身をも偲ばれ申さん、なか〳〵に歌に節とは思ひ候へど、それ吹く笛は宵の慰み、小唄は夜中の口ずさみとよ、あかつきがたに思ひ焦れて吹く尺八は、君にいつもそふてふ、別れて後は又あふしき、春雨のしだれ柳のうちしをれたるを、見るにつけても此春ばかり。

そふてふ―添ふてふ、雙調　あふしき―逢ふ、黃鐘

世の中の人と契らば、薄く契りて末まで遂げよ、もみぢ葉を見よ、薄いが散るか、濃きぞまづ散る、散りての後は、訪はず訪はれず、互に心の隔たれぬれば、思ふに別れ思はぬに添ふ、なさけは大事のものかの。

かぶきの踊も時すぎて〳〵、見物の貴賤も歸りければ、名古屋は名殘の惜しきまゝに、待てしばし〳〵、歌へや舞へや、拍子に合せて打つつゞみの、とゞろ〳〵と鳴る神も、思ふ中はよもさけじと言ひしも、いたづらに別れになれば、お國は名殘を惜みつゝ、又一節こそ踊りける。

お歸りあるか名古三さまは、送り申さうよ木幡まで、木幡山路に行き暮れて、ふたり伏見の草枕、八千夜そふとも名古三さまに、名殘をしきは限なし。

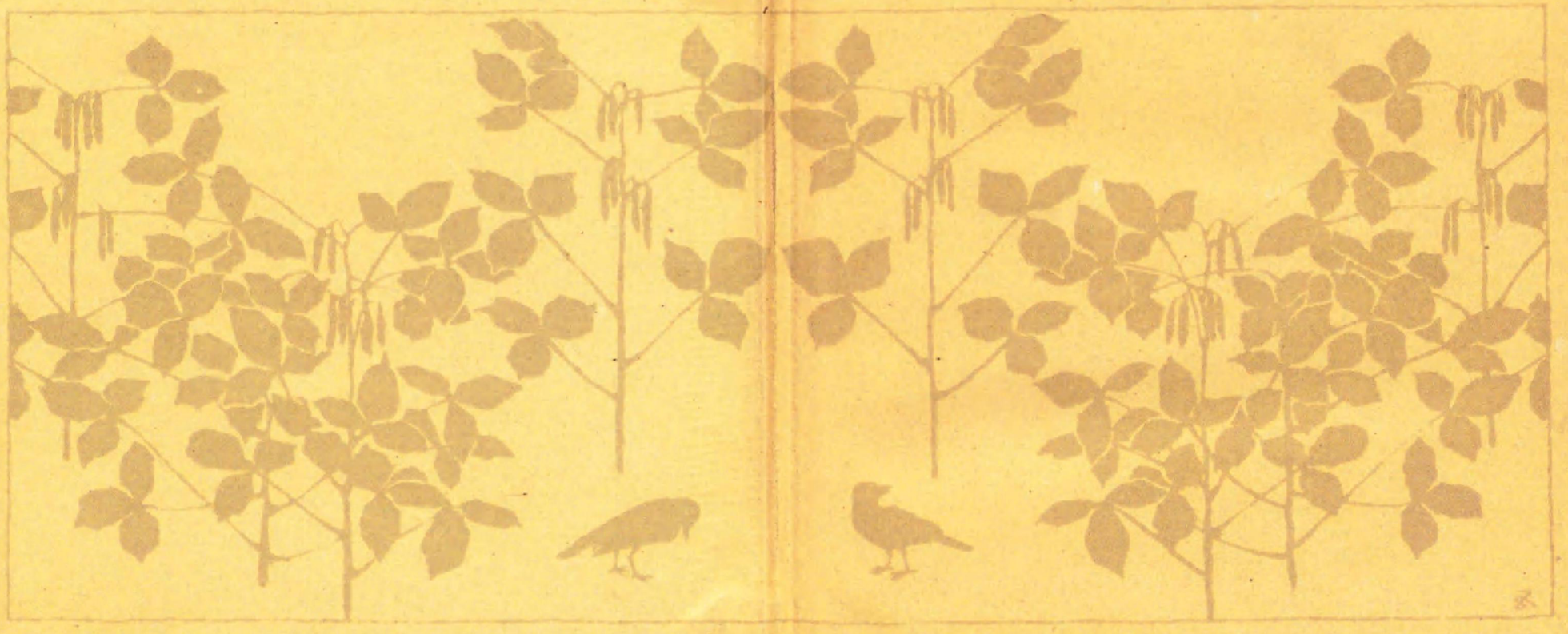
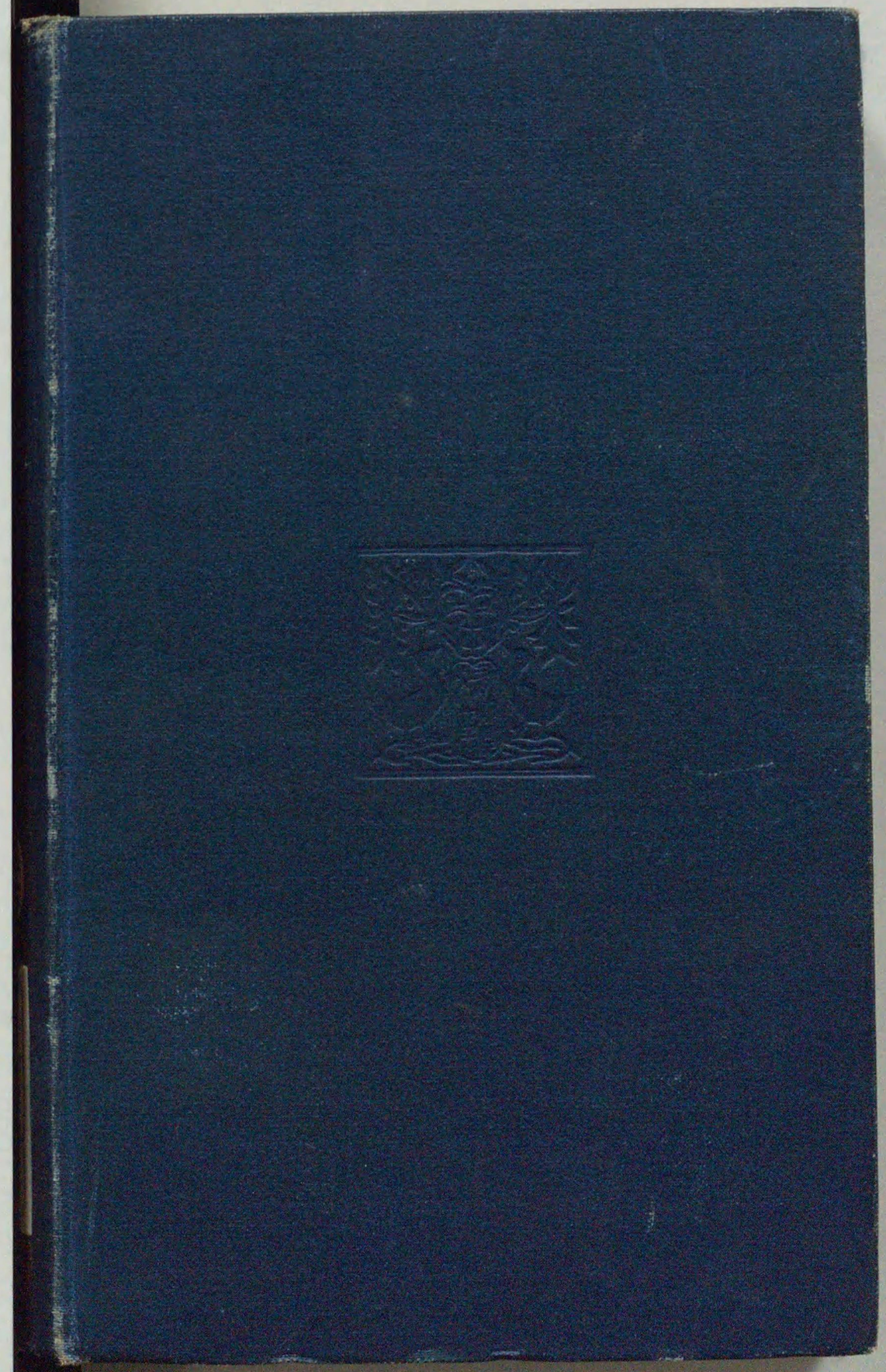
よく〳〵物を案ずるに、このお國と申すは、忝くも大社の假に現れ出で給ひ、かぶき踊を始めつゝ、衆生の惡を祓はんため、かゝるかぶきの一節をあらはし給ふばかりなり、あら難有の次第かな〳〵。

御伽草紙終

大正四年四月二十日印刷
大正四年四月廿三日發行

有朋堂文庫
御伽草紙（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

不許複製